



岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第611集

2013

(公財) 岩手県文化振興事業団
岩手県農政部農村整備室
岩手県南広域振興局

1 1

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第611集

あくざわひがし 安久沢東遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

安久沢東遺跡発掘調査報告書

2013

岩手県農政部農村整備室
(公財) 岩手県文化振興事業団

安久沢東遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いあります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成22年度と23年度に発掘調査を行った奥州市前沢区古城字姥屋敷に所在する安久沢東遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に平安時代の集落跡の存在が明らかになりました。とくに平泉藤原氏の時代の遺構や遺物などが発見されたことは地域の歴史を解明していく上でも重要な成果となります。他にも近世の遺構や遺物が見つかっており、長きにわたって生活に利用されていた場所であることも判りました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室や奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 池田克典

例　　言

- 1 本書は、岩手県奥州市前沢区古城字姥屋敷における安久沢東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は「経営体育成基盤整備事業白山地区」に関連して、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室の委託を受け(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時）が実施したものである。

なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。
- 3 本調査に関わる期間・調査面積は下記の通りである。
 - (1) 発掘調査
 - [2次調査] 平成22年10月15日～平成22年12月7日 面積4,380m²
 - [3次調査] 平成23年4月25日～平成23年6月3日 面積1,260m²
 - (2) 整理作業
 - [2次調査] 平成23年3月1日～3月31日～平成23年8月22日～10月31日
 - [3次調査] 平成23年12月1日～平成24年1月31日
- 4 現地調査は2次調査を西澤正晴・溜浩二郎が、3次調査を西澤、高橋麻依子が担当した。整理作業は丸山直美、高橋が担当し、本書の執筆・編集は西澤・高橋が行った。
- 5 遺物番号は、種別にかかわらず連番を付している。写真図版に記した番号は本文中の遺物番号に対応する。
- 6 近世の銭類の判定は『日本出土銭総覧1996年版』(1996)、『近世の出土銭II - 分類図版編』(1998) 兵庫埋蔵銭調査会を参照した。
- 7 現地調査にあたっては、世界測地系 平面直角座標系Xを基準に準拠した。本書で用いる方位は国土座標に基づく座標北を示す。標高は東京湾平均海面(T.P.)+値を使用しているが、本文ではとくに断りのない限り「T.P.+」の記載を省略している。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議監修)に準拠した。
- 9 今回の調査に関わる成果についてはこれまで公表された資料がいくつかあるが本書が優先する。
- 10 調査にあたり、下記の機関のご教示・協力を得た。

奥州市教育委員会、奥州市前沢総合支所
- 11 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置	2
2 周辺の地理・地形的環境	2
3 周辺の遺跡とこれまでの調査	6
III 調査と整理の方法	
1 野外調査	6
(1) 調査方法	6
(2) 調査経過	10
2 室内整理	11
3 基本層序	12
IV 2次調査の成果	
1 概要	17
2 遺構	18
(1) 掘立柱建物跡	18
(2) 土坑	25
(3) 焼土・炭化物集積	28
(4) 井戸跡	28
(5) 墓壙	29
(6) 溝跡	37
(7) ピット・柱穴	45
3 出土遺物	46
(1) 平安時代の土器類	46
(2) 金属製品	49
(3) 繩文土器	64
(4) 石器・石製品	64
V 3次調査の成果	
1 概要	66
2 遺構	67
(1) 掘立柱建物跡	67
(2) 土坑	76
(3) 井戸跡	77
(4) 溝跡	77
(5) ピット・柱穴	79
3 出土遺物	80
(1) 土器類	80
VI 総括	81
報告書抄録	156

図版目次

第1図 遺跡の位置 1	1	第30図 土器類 1	47
第2図 遺跡の位置 2	3	第31図 土器類 2	48
第3図 周辺地形図と調査区位置	4	第32図 土器類 3	49
第4図 地形分類図	5	第33図 金属製品 1	50
第5図 周辺の遺跡	7	第34図 金属製品 2	51
第6図 グリッド配置図	8	第35図 金属製品 3	52
第7図 基本土層	12	第36図 金属製品 4	53
第8図 遺構配置図 1	13	第37図 金属製品 5	54
第9図 遺構配置図 2	14	第38図 金属製品 6	55
第10図 遺構配置図 3	15	第39図 金属製品 7	56
第11図 遺構配置図 4	16	第40図 金属製品 8	57
第12図 SB01平・断面図	19	第41図 金属製品 9	58
第13図 SB02平・断面図	20	第42図 金属製品 10	59
第14図 SB03平・断面図	21	第43図 金属製品 11	60
第15図 SB04平・断面図	22	第44図 金属製品 12	61
第16図 SB05平・断面図	23	第45図 金属製品 13	62
第17図 土坑	26	第46図 金属製品14・縄文土器・石器・石製品	63
第18図 烧土・炭化物	27	第47図 SB01平面図	68
第19図 井戸跡	29	第48図 SB01断面図	69
第20図 土壌墓 1	30	第49図 SB02平面図	70
第21図 土壌墓 2	32	第50図 SB02断面図	71
第22図 土壌墓 3	33	第51図 SB03平面図	72
第23図 溝跡 1	36	第52図 SB03断面図	73
第24図 溝跡 2	37	第53図 SB04平面図	74
第25図 溝跡 3	39	第54図 SB04断面図	75
第26図 溝跡 4	40	第55図 SB05平・断面図	76
第27図 溝跡 5	41	第56図 土坑・井戸跡	77
第28図 溝跡 6	42	第57図 溝跡	78
第29図 溝跡 7	43	第58図 土器類	80

写真図版目次

写真図版 1 遺構 1	2 SD06・07...	114
1 遺跡遠景 1 (南西から)	99	
2 遺跡遠景 2 (東から)	99	
写真図版 2 遺構 2	写真図版 17 遺構 17	1 SD13
1 遺跡遠景 3 (南から)	100	115
2 遺跡近景 1 (南から)	100	
写真図版 3 遺構 3 調査区全景	写真図版 18 遺構 18	1 SD15
写真図版 4 遺構 4 A・B区全景	2 SD16	116
写真図版 5 遺構 5 C・D・E・F区全景	写真図版 19 遺構 19	1 SD17・18...
写真図版 6 遺構 6	2 SD19	117
1 調査前の状況 1 (A区付近) ...	104	
2 調査前の状況 2 (B区付近) ...	104	
写真図版 7 遺構 7	写真図版 21 遺構 21	1 SD22
1 調査前の状況 3 (C区付近) ...	105	119
2 調査前の状況 4 (E区付近) ...	105	
写真図版 8 遺構 8	写真図版 23 遺構 23	1 SK01遺物出土状況 1
1 基本土層	2 SK01遺物出土状況 2	121
2 D区完掘	写真図版 24 遺構 24	1 SK02
写真図版 9 遺構 9	2 SK02断面	122
1 E区完掘	写真図版 25 遺構 25	1 SK03
2 F区完掘		2 SK03遺物出土状況
写真図版 10 遺構 10		123
1 SB01	写真図版 26 遺構 26	1 SK04
2 SB02		2 SK04断面
写真図版 11 遺構 11	写真図版 27 遺構 27	1 SK05
1 SD01	2 SK05断面	125
2 SD01断面	写真図版 28 遺構 28	1 SE01
写真図版 12 遺構 12		2 SE01断面
1 SD02	写真図版 29 遺構 29	126
2 SD02断面		
写真図版 13 遺構 13	写真図版 30 遺構 30	1 近世墓壙群 1 (東から)
1 SD08・09		127
2 SD07・08・11		2 近世墓壙群 2 (北から)
写真図版 14 遺構 14		127
1 SD06・07断面	写真図版 30 遺構 30	1 S T01・02断面
2 SD07・08・11断面		128
写真図版 15 遺構 15		
1 SD08断面		
2 SD07・08・09断面		
写真図版 16 遺構 16		
1 SD07・09		

2 S T 03-04断面	128	写真図版39 遺構39	1 SB05	137
写真図版31 遺構31			2 SK01	137
1 S T 03-04断面 2	129	写真図版40 遺構40	1 SE01	138
2 S T 06断面	100		2 SE01断面	138
写真図版32 遺構32		写真図版41 遺構41	1 SD01	139
1 S T 08-13・16断面	130		2 SD02	139
2 S T 12断面	130	写真図版42 遺構42	1 SD03	140
写真図版33 遺構33			2 SD04	140
1 S T 14-16・19断面	131	写真図版43 遺物 1	土器・陶磁器類	141
2 S T 17断面	131	写真図版44 遺物 2	金属製品 1	142
写真図版34 遺構34		写真図版45 遺物 3	金属製品 2	143
1 S T 18断面	132	写真図版46 遺物 4	金属製品 3	144
2 S T 20-21断面	132	写真図版47 遺物 5	金属製品 4	145
写真図版35 遺構35		写真図版48 遺物 6	金属製品 5	146
1 ST22-23断面	133	写真図版49 遺物 7	金属製品 6	147
2 ST23断面	133	写真図版50 遺物 8	金属製品 7	148
写真図版36 遺構36		写真図版51 遺物 9	金属製品 8	149
1 遺跡近景(北から)	134	写真図版52 遺物10	金属製品 9	150
2 調査区全景	134	写真図版53 遺物11	金属製品10	151
写真図版37 遺構37 1 SB01	135	写真図版54 遺物12	金属製品11	152
2 SB02	135	写真図版55 遺物13	金属製品12	153
写真図版38 遺構38 1 SB03	136	写真図版56 遺物14	金属製品13・縄文土器	154
2 SB04	136	写真図版57 遺物15	石器・石製品	155

表 目 次

第1表 検出遺構一覧(2次調査)	17	第8表 石器・石製品観察表(2次調査)	93
第2表 出土遺物総重量・内訳(2次調査)	17	第9表 柱穴観察表(2次調査)	94
第3表 遺構別出土遺物量(2次調査)	85	第10表 検出遺構一覧表(3次調査)	66
第4表 土器類観察表	86	第11表 出土遺物総重量・内訳(3次調査)	66
第5表 陶磁器観察表	86	第12表 遺構別出土遺物量(3次調査)	95
第6表 金属製品観察表	87	第13表 土器類類観察表(3次調査)	95
第7表 縄文土器観察表	93	第14表 柱穴観察表(3次調査)	95

I 調査に至る経過

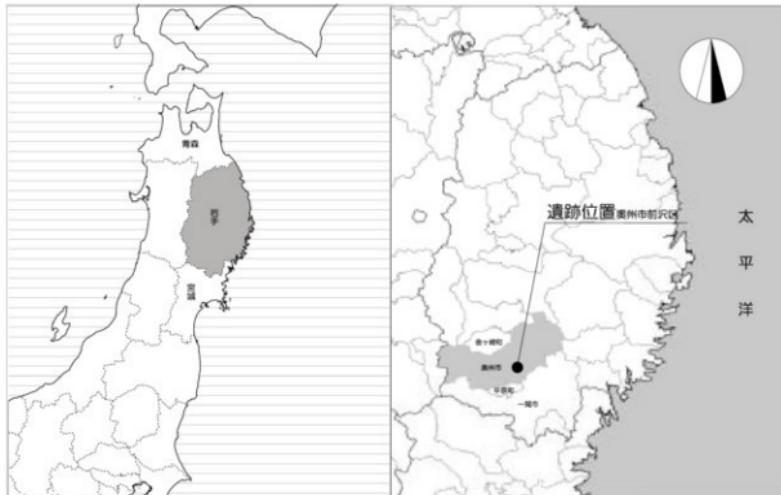
安久沢東遺跡は、「経営体育成基盤整備事業白山地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区の中心部より北東4km程に位置し、現況は小区画・不整形な水田で、なかつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月7日付県南広農整第137-4号から平成22年11月30日付県南広農整第123-10号「経営体育成基盤整備事業白山地区に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年11月16日から平成22年12月17日にかけてそれぞれ試掘調査を実施し、工事に着手するには安久沢東遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成22年1月15日付教生第1268号から平成22年12月28日付教生第1193号「経営体育成基盤整備事業白山地区予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」によりそれぞれ回答してきた。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成23年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で2カ年にかけて委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。
（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）



第1図 遺跡の位置1

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

安久沢東遺跡は、岩手県奥州市前沢区古城字姥屋敷に所在する。JR東北本線前沢駅の北東約3kmの位置である。国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」および2万5千分の1地形図「前沢」の図幅中に含まれ、調査区の緯度・経度上の位置は、北緯39度04分07秒、東経141度08分40秒付近である。

遺跡の所在する奥州市前沢区は岩手県南部に位置し、北上川低地帯の中央部にある。平成18年に旧水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の2市2町1村による広域合併により奥州市となった。北は北上市・金ヶ崎町、南は一関市・平泉町と接している。面積では一関市に次いで県内2位の規模を誇り、人口約13万人（平成20年3月現在）を抱える都市となっている。

奥州市は北上川によりもたらされた肥沃かつ広大な土壌を活かした農業が盛んであり、江刺りんごをはじめとする農産物、前沢牛などの畜産物など全国的に有名である。

前沢区は北上川西岸側にJR東北本線、国道4号、東北縦貫自動車道が、東岸側にはJR東北新幹線が縦断しており、平泉町との境には東北縦貫自動車道の平泉前沢インターチェンジが開設されるなど交通の要所でもある。

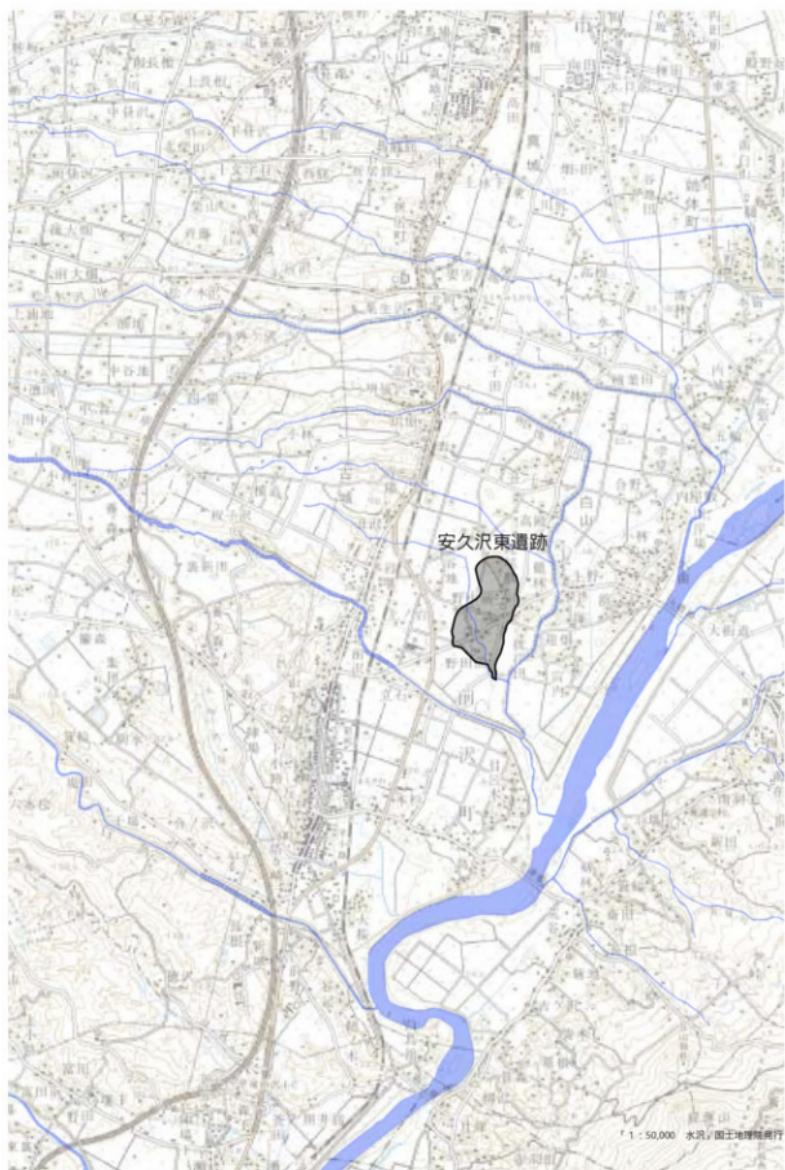
統計によれば、年間の最高気温は35.7°C、最低気温-14.4°C、平均気温は10.5°Cであり、岩手県の中では比較的温暖な地域である。年間の降水量は1,153mmと県平均に近い。

安久沢東遺跡は、北上川の支流である明後沢側の西岸にある微高地（自然堤防）上に立地し、遺跡の現況は、水田や畠地であった。標高は32m前後であり、周囲の低地とは比高は約1mである。遺跡推定範囲内には、延喜式内社である止々井神社（近世に胆沢区より移転）や藤原秀衡の姥が祀られているという伝承のある姥神社が存在するなど、古来より歴史の残る地域である。

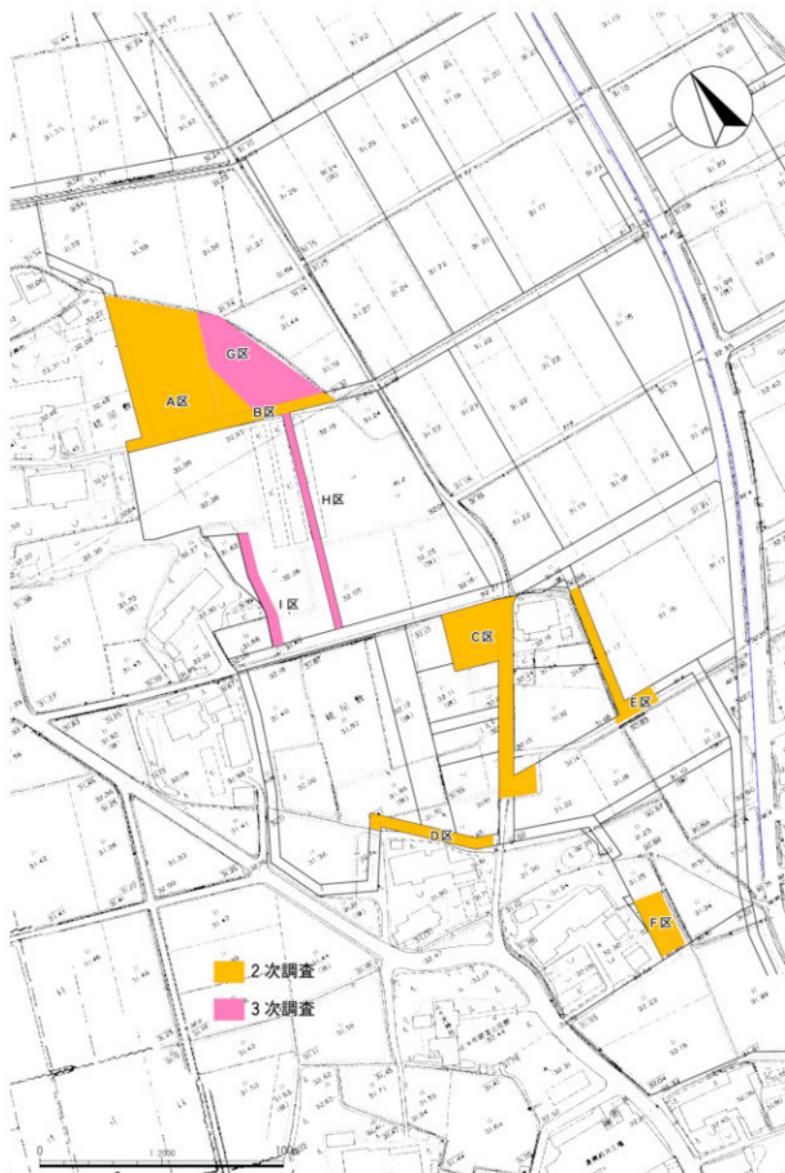
2 周辺の地理・地形的環境

前沢区の地形区分は、東部の北上山地西縁の山麓丘陵地区、北上川西岸に発達する沖積低地および低位段丘面を含む低地地区、西部に形成された段丘地区に3区分される。このうち北上川西岸には、流域最大規模の扇状地形が発達しており、日本でも有数の扇状地となっている。奥州市胆沢区市野々地区を扇頂とする面積約200平方キロに達する胆沢扇状地である。この胆沢扇状地は現在北側に東流する胆沢川の影響を受けて段丘化しており、高位から順に大歩段丘、一首坂段丘（西根段丘、以上高位段丘）、上野原段丘、横道段丘、堀切段丘、福原段丘（以上中位段丘）があり、これらの段丘を取り巻くように低位段丘である水沢段丘面が広がる。この水沢段丘は水沢高位段丘と水沢低位段丘に細分され、北常から北下巾付近にかけて南北約1.5kmの沖積低地が東西に走り、谷底平野を形成する。

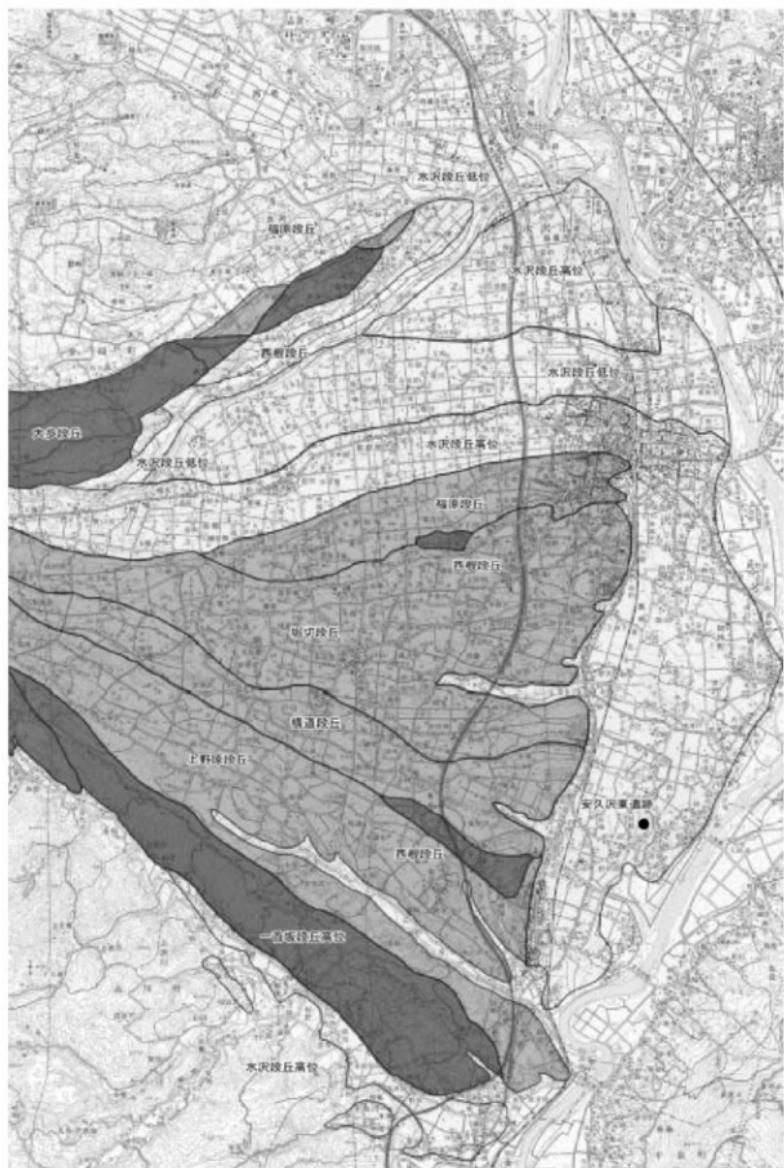
遺跡が所在するのは、先の3地区のうち低地地区にあり、水沢段丘面を含む地形である。この地域のうち、水沢区姉体地区から前沢区白鳥川にかけては、国道4号西側の段丘（ここが扇端になる）から流出した小河川による開析がすすみ、無数の沖積地を形成するとともに、開析により残された多くの微高地が存在している。低地地区にある遺跡の多くはこの微高地上に立地しており、安久沢東遺跡もそのひとつである。



第2図 遺跡の位置 2



第3図 周辺地形図と調査区位置



第4図 地形分類図

3 周辺の遺跡とこれまでの調査

北上川西岸の低地帯には数多く遺跡が存在する。先に触れたように、島状に残された微高地がこの低地に点在しており、多くの遺跡がその上に位置する。県営ほ場整備事業により、近年この地域では発掘調査が行われ、数々の成果が上げられている。

この地域の遺跡は北上川に合流するいくつかの支流によって地理的に分けられる。ここでは、おもに明後沢川とその南を流れる岩櫃川のあいだに展開している遺跡を中心につれておこう。

この地域には多数の遺跡が含まれるが、近年調査された遺跡には、北側より八反町遺跡・古城方八丁遺跡・水尻遺跡・四反田I・II遺跡・高殿遺跡があり、さらに南には安久沢東遺跡・田高I・II遺跡・彼岸田遺跡がある。八反町遺跡は、部分的な調査が多いものの、12世紀代の掘立柱建物跡・道路跡・井戸跡などが発見されるなど、この時期の遺構がまとまって調査され注目されている。古城方八丁遺跡は古代の竪穴建物跡などが検出され、石帶が出土するなど部分的な調査にもかかわらず有力な集落の一つといえる。四反田I・II遺跡・水尻遺跡は、明後沢川とはやや距離が離れて位置する。四反田I・II遺跡からは平安時代の竪穴建物や掘立柱建物が、水尻遺跡から平安時代の四面庇掘立柱建物が調査され、綠釉陶器も出土しており、また、渥美産陶器の出土もある。とくに、四面庇建物は官衙以外検出される例は少なく、単独に近い立地で集落内から発見される場合は寺院の可能性が高いと推定されるが、関連する遺物の共伴で裏付けなければならない。いずれにせよ、この遺跡周辺では平安時代の有力な集落が広がっていることが予想されるのである。

田高II遺跡は、これまで2度の調査が行われてあり、縄文時代前期の集落跡のほかに、14世紀前後の堀で囲まれた居館跡や12世紀の井戸跡などが発見されている。掘立柱建物跡の復元までは至っていないが、鎌倉時代の居館跡がこの地域に存在していた事実は貴重である。県内でも数少ない事例となっている。また、12世紀代の遺構や遺物が少ないものの発見されたことも重要であろう。この遺跡内には、県道工事の際に壊された12世紀後半の経塚があるなど平泉期の痕跡も残されているのである。なお、田高II遺跡の3度目の調査は安久沢東遺跡の調査と並行して行われている。そのほか、この中畠城跡など中世に関連する遺跡が多く残されているのも特徴の一つといえるだろう。

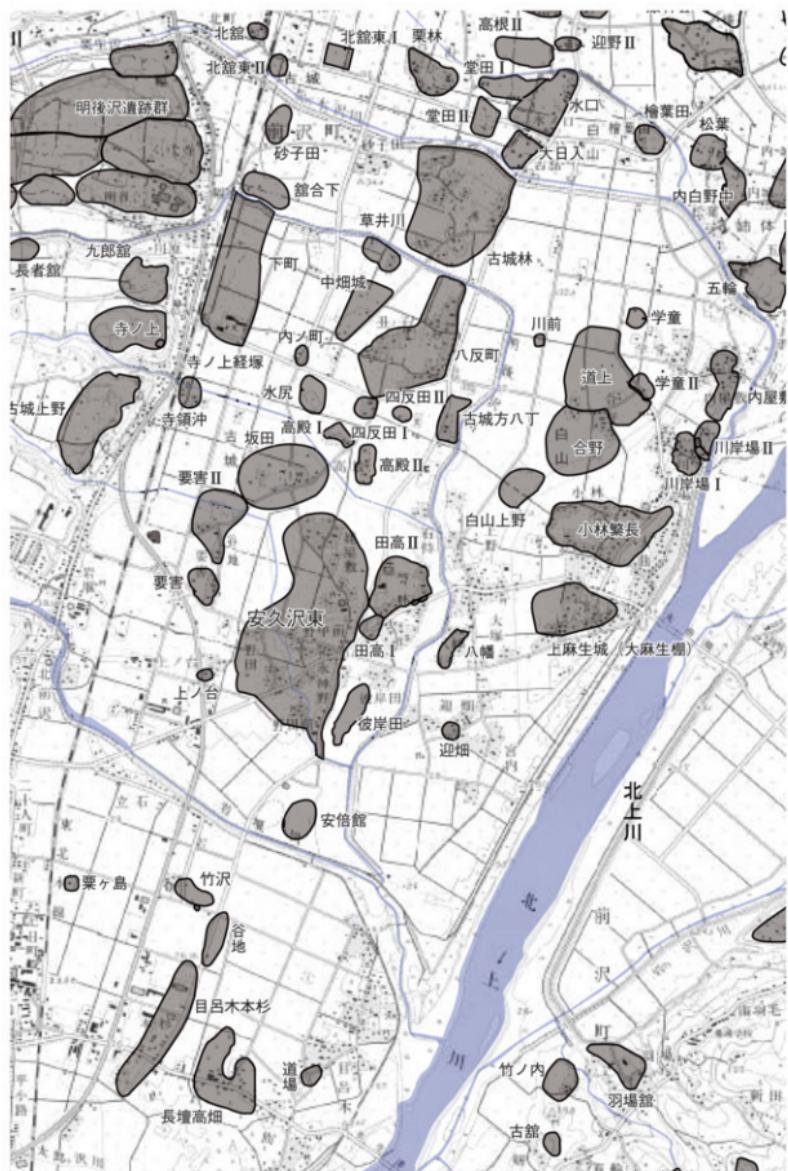
このように、周辺では古代以降の遺跡が多く、中世の城館跡も伝承も含めて多く存在する。とくに平安時代には、竪穴建物跡がまとまって検出される例は少ないものの、掘立柱建物跡の検出例が目立つ。四面庇建物も含まれるなど、通常の集落とは異相を示す。また、12世紀代の遺構や遺物の発見も相次いでいるのも注目される。これまでには、遺物の散布がみられるに過ぎなかったが、遺構を伴う例も増えてきており、近年の調査の増加によって、12世紀代の遺構や遺物が発見され続っており、平泉文化の広がりがより具体的に明らかになりつつある。安久沢東遺跡周辺を取り巻くのは、このような歴史的な環境なのである。

III 調査と整理の方法

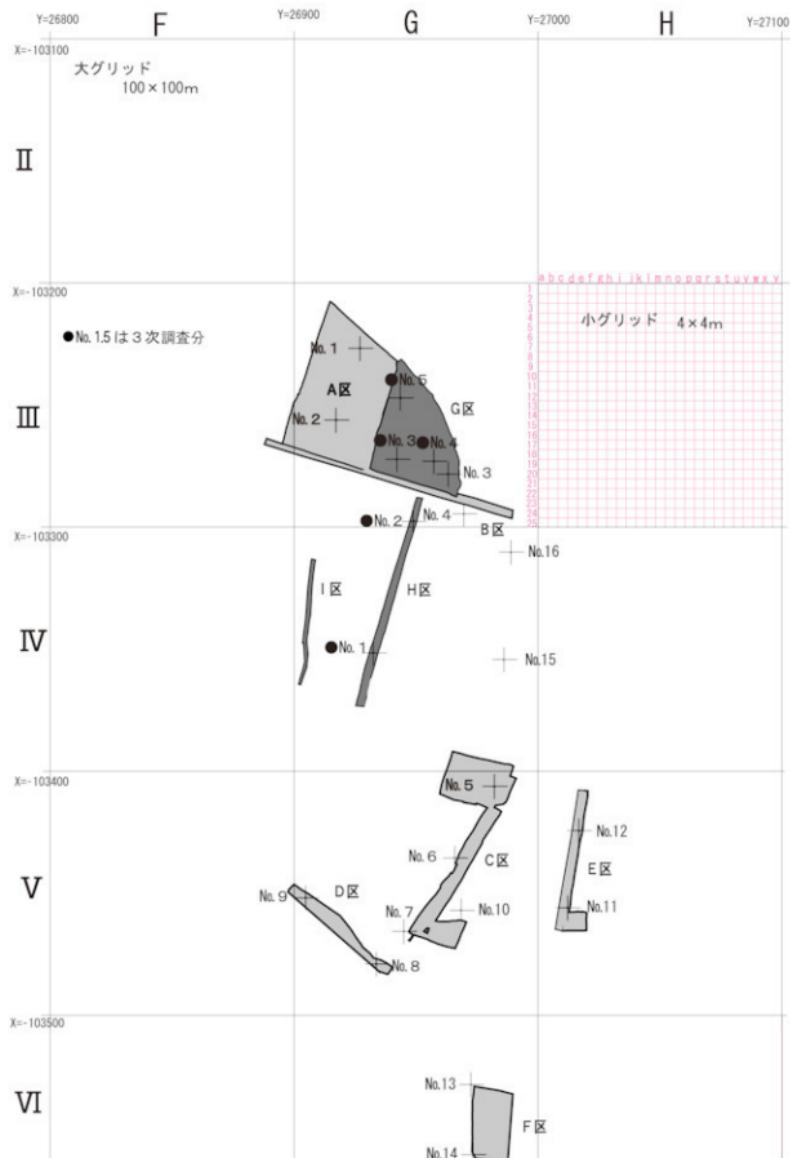
1 野外調査

(1) 調査方法

グリッド 遺構の測量や遺物の取り上げなどの測量作業に際し基準としてグリッドを設定している。グリッドは次年度以降の調査も予定されていたため、遺跡全体を覆うように設計した。グリッド



第5図 周辺の遺跡



第6図 グリッド配置図

北西隅を起点とし、座標はX=-103100、Y=26300とした。このグリッドは2次調査、3次調査共通である。設定に際し、次数ごとに、以下の基準点を打設し（委託）、それを基準として発掘調査の測量を行っている。なお、平面直角座標系（第X系）を使用している。

[2次調査]

Nº 1	X=-103226.729	Y=26927.020	H=31.929
Nº 2	X=-103256.215	Y=26917.226	H=32.465
Nº 3	X=-103278.31	Y=26963.125	H=32.301
Nº 4	X=-103294.54	Y=26969.624	H=32.278
Nº 5	X=-103406.298	Y=26982.145	H=32.438
Nº 6	X=-103435.586	Y=26965.872	H=32.416
Nº 7	X=-103465.664	Y=26945.340	H=31.984
Nº 8	X=-103479.053	Y=26933.779	H=31.568
Nº 9	X=-103451.831	Y=26904.733	H=31.694
Nº 10	X=-103457.099	Y=26968.477	H=31.999
Nº 11	X=-103456.002	Y=27012.095	H=31.094
Nº 12	X=-103424.437	Y=27016.858	H=31.081
Nº 13	X=-103528.485	Y=26972.564	H=32.033
Nº 14	X=-103557.295	Y=26973.402	H=32.936
Nº 15	X=-103354.339	Y=26986.039	H=32.507
Nº 16	X=-103310.293	Y=26988.99	H=31.689

[3次調査] *震災後の変更数値

Nº 1	X=-103351.588	Y=26932.481	H=32.282
Nº 2	X=-103297.464	Y=26948.892	H=32.159
Nº 3	X=-103272.214	Y=26942.239	H=32.144
Nº 4	X=-103273.104	Y=26957.401	H=32.049
Nº 5	X=-103247.279	Y=26943.697	H=32.018

グリッドは100m四方の大グリッドを座標系に対応させて設定し、それを東西25、南北25個の小グリッド（4m四方）に分割して使用している。グリッド名称は大グリッド（100m四方）の東西を西からA・B・・・、南北を北からI・II・・・とし各グリッドの北西隅をそのグリッド名称とした。小グリッドは東西を西からa・b・・・tまで、南北を北から1・2・・・25とし、大小グリッドの名称を組み合わせて使用している（例.I A 1aなど）。グリッドはおもに野外調査時の遺物の取り上げに際し使用しており、適宜細分して使用した。室内整理作業段階ではそれを座標に置き換えて使用することが多く、本書でも同様に扱った。

震災による影響 平成23年3月11日の東日本大震災の影響により、遺跡周辺の基準点に大幅なずれが生じている。震災は2次調査と3次調査のあいだに起こったため、使用する基準の座標がそれそれ異なっている。2次調査時の基準杭等は工事ですでに失われてあり、3次調査の基準点と整合させることはできなかった。そのため、本書では、座標や水準値は無理に整合させず、それぞれ別に扱っている。したがって、とくに2次調査では、現在の座標や水準値とは若干異なる。

表土掘削・遺構検出 調査区は水田や畑作地、道路であったため、すぐに試掘トレンチを設置できた。調査区内にトレンチを数本入れ、遺構検出面までの深さを確認する作業を行った。それにより、

調査区のうち比較的標高の高い範囲は大きく削平されていることがわかり、地形が下がった標高の低い部分は黒褐色土が薄く残存しており、遺構の存在が予想された。そのため、この高さを基準にして、それより上位層を重機によって除去した。表土の除去にあたっては、バックホウを使用し、調査員の指示のもと掘削を行っている。表土の除去後は、作業員によって鏝簾（ジョレン）などの道具を使用して遺構確認（検出作業）を行い、遺構を検出した。

遺構精査・記録 検出作業によって確認された遺構については、半截や土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しながら掘削をおこなった。実測図や写真などの記録を行った後に完掘を行い、記録を追加した。記録作業のうち、平面図の実測は電子平板システム（「遺構くん」（株）キューピック製）を基本に、簡易造り方法による実測を併用しながら行っている。写真については6×7判カメラ（モノクロ）とデジタルカメラ（キャノン EOS5D）を中心に撮影を行った。調査区全景写真撮影に際してはセスナ機による撮影を委託している。6×7判フィルムについては現像して、アルバムに保管し、デジタル写真についてはRAW画像を当センターの写真専用HDDに保管している。

遺構名称 野外調査時には、検出した順に、1号掘立柱建物跡、1号土坑など番号と遺構の種類の組み合わせで呼称し、遺物の取り上げを行っている遺構もあったが（とくに2次調査）。本書では遺構の種類ごとに下記の略称を使用することに統一し、遺構名称としている。例えば、1号溝跡はS D 01に、1号掘立柱建物跡はS B 01のように振りかえている。

S B 掘立柱建物跡、S I 竪穴建物跡、S K 土坑、S D 溝跡

S E 井戸跡、S X 焼土・炭化物集積、S T 墓壙、P 柱穴

その他 本書は複数年度の調査をまとめて報告している。なお、奥州市教育委員会との協議により平成22年度（2010年度）調査を2次調査、平成23年度（2011年度）調査を3次調査とした。

（2）調査経過

[2次調査]

10月15日 調査開始。器材搬入、現場設営を行う。

10月18日 試掘トレーニングで土層・遺構の確認を行う。A区中心にトレーニングを入れたが、大部分は表土直下が検出面であり、疊層が露出していることが判明。北側の比較的低い部分はII層が残存していることがわかり、遺構確認ができそうと判断する。

10月19日 重機による表土掘削を開始する

10月20日 重機により表土除去と人力による遺構検出作業を開始する。

10月27日 A区の遺構検出作業がほぼ終わり、柱穴を中心とする遺構が広く存在することがわかった。以降、遺構の精査を開始する。

11月2日 A区の遺構精査作業と並行して、C・D・E・F区の重機による表土除去を開始する。

11月10日 C・D・E区の検出作業を開始する。あわせて、B区の表土除去を行う。

11月11日 C区の検出の結果、溝跡がさらに調査区外に延長することが判明する。この範囲も工事予定範囲であるため、調査区を拡張して調査することになった。他の調査区では、溝跡や柱穴が中心に検出されていることがわかり、この頃にはほぼ遺構数が把握できた。また、C区では、当初カクランと判断していたものが、近世墓と判明した。20基相当が重複している。

11月16日 各地区で検出作業が終わり、遺構精査作業中心となる。先に始めたA区では図面作業に移

行している。

11月22日 各地区で、精査が進み、並行して、平面図や断面図の作成が行っている。おもに、近世墓の精査と、A区の掘立柱建物跡の精査に分かれて調査を行っている。気温の低下もあり、作業環境が徐々に悪化していく。

12月2日 県教育委員会による終了確認が行われる。

12月7日 一部埋め戻しを行い、野外調査を終了する。

[3 次調査]

震災の影響もあり、当初予定よりも約1ヶ月遅れで調査を開始した。昨年度調査区の隣接地点を中心に今年度の調査区が設定される。

4月25日 器材搬入、現場設営を行う。

4月26日 昨年度の隣接地点であるため、試掘トレンチ調査を省略し、重機による表土除去を行った。震災の影響で、バックホウが足りないため、周辺の調査班と協議しながら少ない重機を運用した。

5月6日 重機による表土除去がほぼ終了し、作業員による遺構検出作業を開始する。調査区周辺は本体工事が行われてあり、今回の調査区も、表土がすでに大部分が失われていた。

5月9日 遺構検出が進むが、昨年度と同様に、削平が大きく行われていることが判明する。北側に比較的の遺構が集中することが合わせて判明する。

5月13日 遺構検出作業と並行して、一部遺構精査を開始する。以降、掘立柱建物跡の調査を中心となる。

5月17日 この頃より図面作業も遺構精査と並行して開始する。掘立柱建物跡の柱穴より手づくねかわらけが出土する。12世紀代の建物跡も存在することが判明する。

5月26日 県教育委員会による終了確認が行われる。一部調査区が追加される。

5月31日 現地公開を調査と並行して行う。付近の住民の方6名が参加。

6月1日 セスナ機による航空写真撮影を行う。

6月3日 図面作業を行い、器材を搬出する。調査終了。

2 室内整理

室内整理作業は、野外調査終了年と次年度に都合3回に分けて行った。2次調査の室内整理は平成23年3月1日から平成23年3月31日までと、平成23年8月22日～平成23年10月31日まで、3次調査の室内整理は、平成23年12月1日から平成24年1月31日まで行った。

遺構 平面図を中心に電子平板で作成したため、コンピューター上で合成・修正・図版組を行った。全体図を作成したのち、各遺構図を切り抜いて図版作成を行っている。

遺物 水洗後に注記→接合→実測→トレース→写真撮影→図版作成の順で作業を行った。土器・陶磁器類は破片が多く、実測可能な遺物の割合は少ない。これらは、反転復元不可能な遺物については実測を行っていない。ただし、いわゆる中世陶器や輸入陶磁器については出土事例が少ないため、反転復元が不可であっても、可能な限り掲載している。

石器については、トゥール類を中心に掲載している。金属製品は、今回の遺物のうち量的に多数を占める。金属製品についても固化可能な遺物については極力固化を行っている。なお、遺物の実測については、従来通り、室内作業員による実測→ロットリングペンによるトレース→台紙上での図版組という方法で行っている。

写真撮影 遺物の撮影は、当センターの写真技師により、デジタル画像を中心として撮影を行っている。本書で使用するほか、保管用ディスクに保存している。

3 基本層序

調査区は平坦な微高地上にあるため、基本層序は単純である。しかしながら、農地として利用されていたため、度重なる土地改良が行われ、本来の土層堆積が確認できる地点は少なかった。以下は、比較的良好な地点での層序であり、これを基本層序としている。

I 層 灰黄褐色シルト (10YR4/4) 締まり、粘性ともに弱い。表土（現耕作土）である。

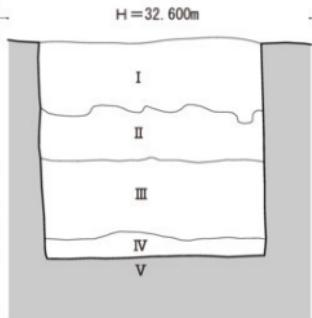
II 層 暗褐色シルト (10YR3/3) 締まり、粘性ともに中程度である。旧耕作土である。

III 層 暗褐色シルト (10YR2/3) 締まりがやや強く、粘性が中程度である。直径が2~3mmの炭化物粒を少量含んでいる。残存していれば、遺構確認面となる

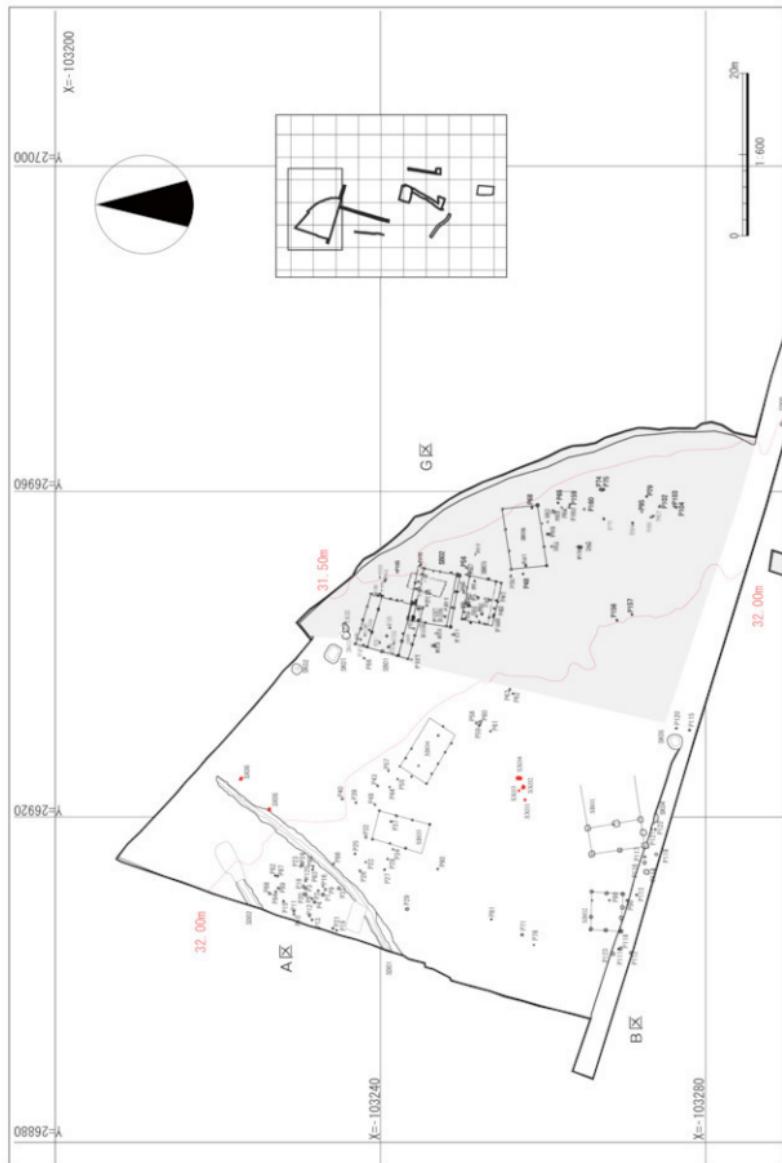
IV 層 黒褐色シルト (10YR2/2) 締まりがやや強く、粘性が中程度である。明黄褐色土（V層）との混合土である。

V 層 明黄褐色シルト (10YR7/6) 締まり、粘性ともにやや強い。いわゆる地山である。多くの地点ではここを遺構確認面とした。

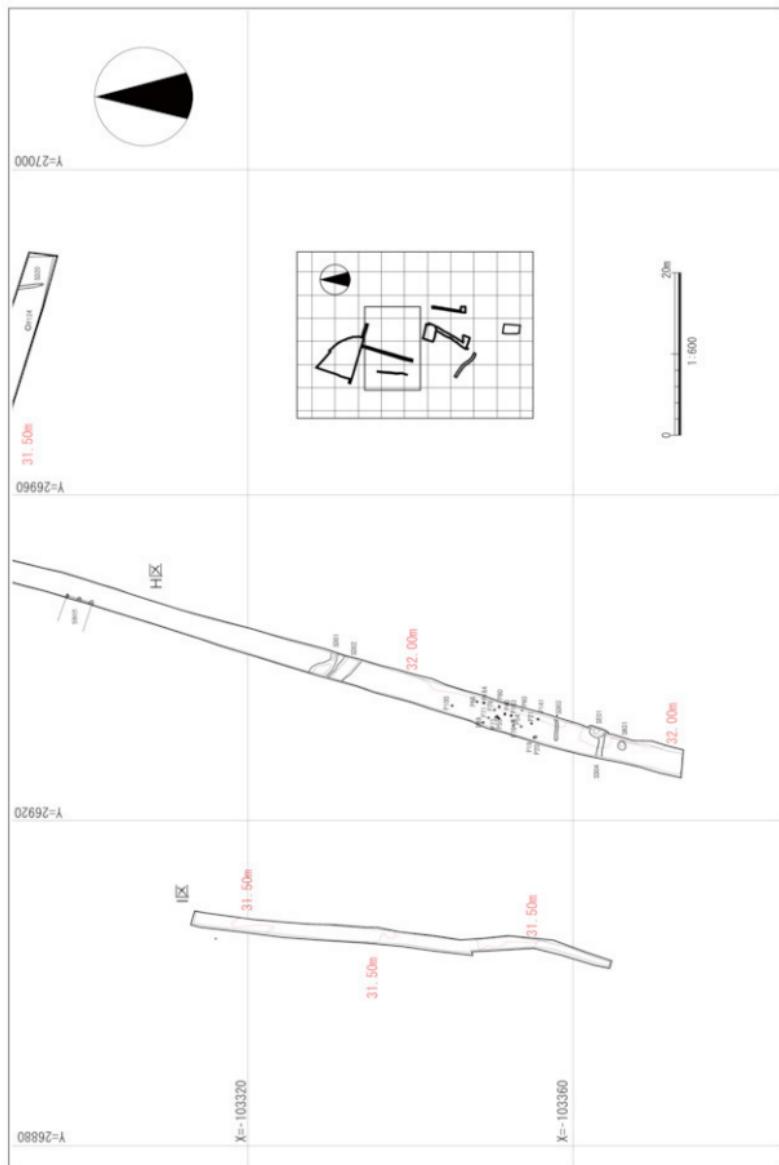
I・II層は表土や旧表土となり、重機によって表土除去した部分である。III層以下が、本来の堆積状況を示していると考えられるが、多くの地点ではI・II層によって壊されている。したがって、表土直下がV層となり、この層自体もかなりの部分が削平を受けている。とくにA区では、検出面には礫層が表出してあり、V層でもかなり下位の部分と想定される。かなりの高さで削平が及んだと考えられる。



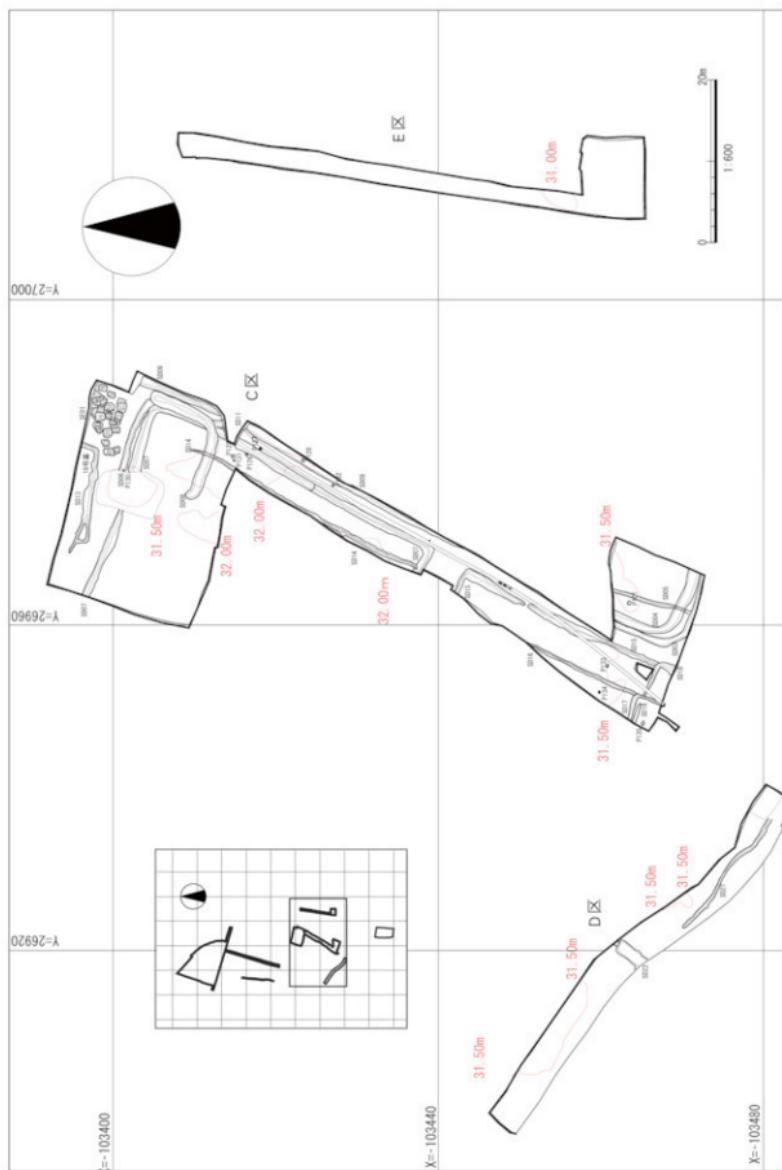
第7図 基本土層



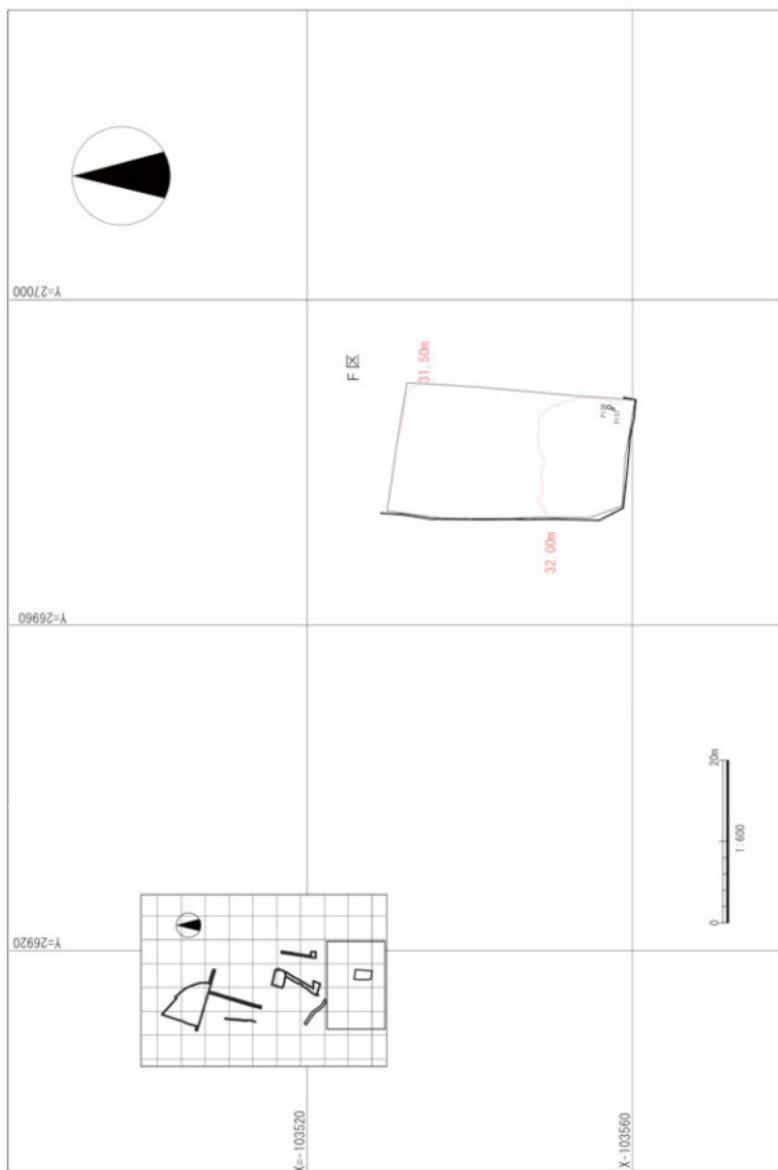
第8図 遺構配置図1



第9図 遺構配置図2



第10図 遺構配置図 3



第11図 遺構配置図 4

IV 2次調査の成果

1 概 要

概要 調査は、2カ年にわたって行った（2次・3次調査）。2次調査は経営体育成基盤事業に伴う4,380m²を対象としている。遺跡は、ほぼ南北約1.25km、東西600mの範囲で推定されており、周囲よりやや高い微高地上に立地している。周囲との比高は1mである。この微高地全体が遺跡推定範囲として現在認定されている。今回の調査区は、この遺跡推定範囲の北東端付近に設定されている。ほ場整備工事によって道路や水路となる範囲が多く、一部に切土後田面となる。そのため、ほとんどが細長い調査区となっており、また、点在している。便宜的に各調査区を、北から順にA～F区と呼称している。A・B区は一体的なまとまりだが両者の境には段差があり、A区が畑、B区が農道部分と区別している。A区はその段差の分が他よりも余計に削平されていたことがわかる。面として調査できたのはA区とC区の一部であるため、今回検出した遺構もこの区域に集中する。そのほかの調査区からは、いくつか遺構は検出されているが、調査区外に広がっており、調査区内で完結する遺構は少ない。

遺構 今回の調査区では、A区から掘立柱建物を中心とした遺構が、C区からは溝跡や近世墓を中心とした遺構が検出されている。その他の調査区では、溝跡や柱穴、土坑などがあるが、範囲が狭いこともあり、詳細はよくわからない。また、後世による地形変更が大きく影響し、かなりの部分が削平されていたことにもよる。この結果は、岩手県教育委員会が行った試掘調査（岩手県教育委員会2011）の成果とも整合し、広大な遺跡範囲であるが、一部の範囲でその内容を明らかにすることことができた。また、12世紀の平泉藤原氏関連の伝承が残る神社があり、その隣接地点から当該時期の遺構や遺物が発見されたことも重要な成果のひとつである。12世紀のおけるこの地域の在り方を示す資料となる。今回の調査で検出した遺構をまとめると第1表の通りである

遺物 遺物は総計201kg出土している（第2表）。土師器・須恵器などの古代の土器類が1.9kg（10%）、国産陶器類が1.9kg、繩文土器が0.238kg、石器・石製品が13.5kgである。出土量は多くないが、12世紀に間連する遺物が出土していることは注目できる。

第1表 検出遺構一覧表

遺構名	数量	時期
掘立柱建物跡	5	平安2、不明3
土坑	5	平安3、12世紀2
焼土・炭化物集積	6	平安4、不明2
溝跡	20	平安3、不明17
井戸跡	1	江戸23
墓壙	23	

第2表 出土遺物総重量・内訳

種別	縄文土器	土師器	須恵器	国産陶器	かわらけ	石器・石製品	近世陶器	近代磁器	金属製品	その他	合計(g)
重量	238.3	1498.0	428.7	1856.5	97.4	13456.4	134.2	53.3	2342.9	3.4	20109.0

<文献> 岩手県教育委員会2011『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成21年度）』、岩手県文化財調査報告書第132集

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡

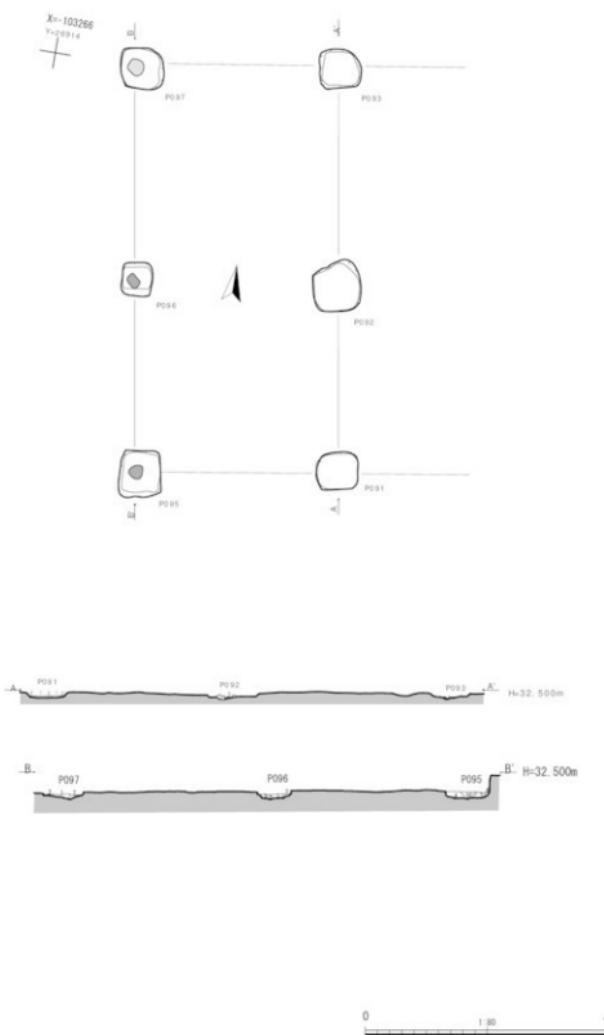
A区に集中して存在する。柱穴はA区のほかC区にも若干検出されることから、C区北半にも建物があった可能性がある。全体的な傾向からすると、建物はA区周辺に集中している。建物の時期は古代のものと近世のものに大別できそうであるが、遺物があまり明確に伴わないことから時期不明としたものが多い。なお、建物方位の共通性が、各建物が同時期に併存した根拠の一つとなるため、南北棟、東西棟に問わらず、北に対する東西南北方向への振れ幅を建物方位として示す。

S B01 A区南からB区にかけての範囲に位置する。桁行1間以上×梁行2間の掘立柱建物跡と復元した。遺構の確認は表土(Ⅰ層)除去後のV層で行っている。A区側(北側)はB区側に比べて削平の度が大きいため、各柱穴はわずかに残存するのみであり、とくに桁行東側の柱穴は失われたと想定している。他遺構との重複はないが、西5mのところにS B02がある。規模は、桁行が現状で1間分の3.3m、梁行方向は6.66mである。方位はN-10°-Wの東西棟である。南北間を梁行とし、東方向に桁行が延びる建物として復元している。検出した桁行1間×梁行2間の部分は、内部にも柱穴が存在することから、庇部分に相当すると考えた。したがって、身舎部分は削平されており、庇部のみ残存している。柱間寸法は、桁行が不明であり、梁行は3.33m等間である。庇の出は3.33mである。各柱掘方(以下柱穴とする)の平面形は隅丸方形、隅丸方形形状を呈し、規模は一辺が80cm程度のものが多い。深さは確認面から10cm前後と非常に浅く、北側の柱穴にいたってはほぼ窪んでいるのみである。柱痕跡がわずかに残る柱穴もある。遺物はP095から土師器片が出土している。削平が大きく、不明な点が多いが、西庇をもつ建物跡と復元している。桁行が不明であるが、柱間寸法が10尺もあり、規模の大きな建物であった可能性が高い。時期は遺物や方形掘方をもつことから平安時代に所属する建物と考えられる。

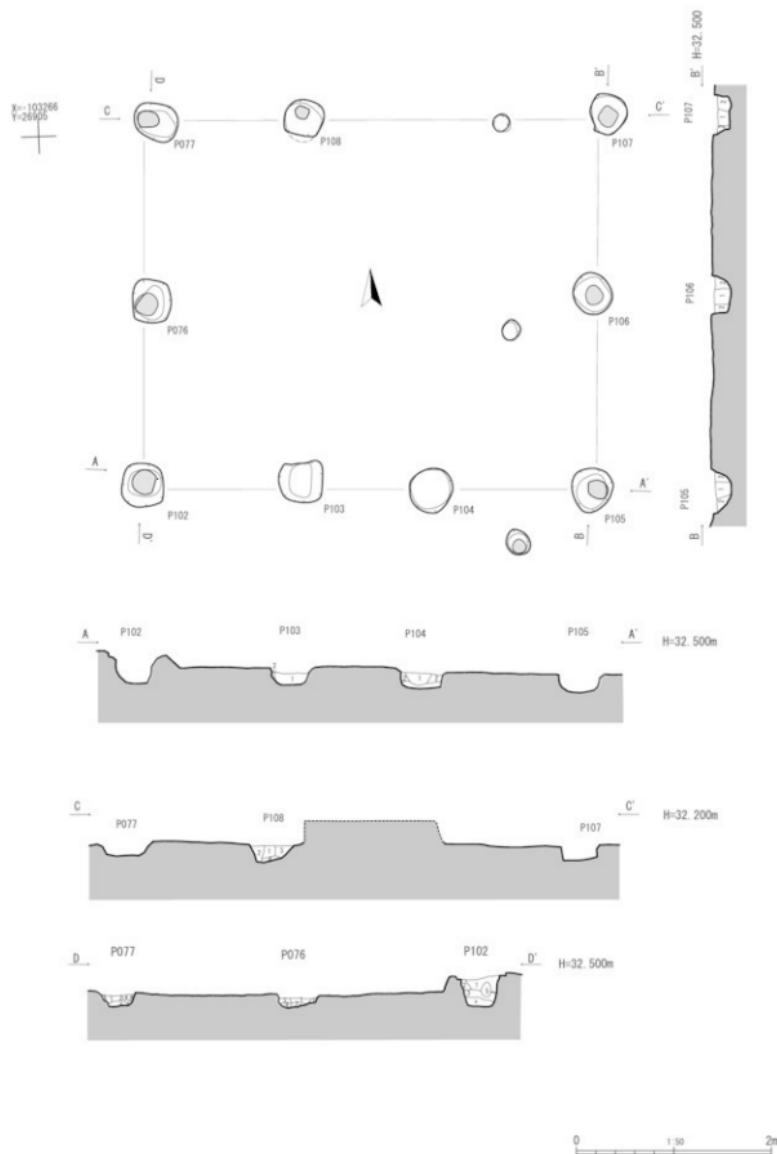
S B02 A区の南端、B区とまたがって位置する。桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡と復元した。遺構の確認は表土(Ⅰ層)除去後のV層で行っている。A区側(北側)はB区側に比べて削平の度が大きいが、S B01よりは残存状態はよい。他遺構との重複はないが、東5mのところにS B01がある。規模は、桁行が現状で1間分の3.3m、梁行方向は6.66mである。方位はN-2°-Eの東西棟である。柱間寸法は、桁行が西から1.6m、1.4m、1.6mであり、梁行が1.9mの等間である。各柱穴の平面形は隅丸方形から梢円形形状を呈し、規模は一辺あるいは両軸は40~50cm程度のものが多い。深さはB区側では確認面から30cm前後あるが、A区側は10~20cmと浅くなっている。7個の柱穴で柱痕跡を確認している。北側柱列では柱穴1個が失われている。遺物はP105から土師器片が出土している。時期は出土遺物や方形の掘方をもつことから平安時代に所属する建物と考えられる。

S B03 A区の中央部に位置する。桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡と復元した。遺構の確認は表土(Ⅰ層)除去後のV層で行っている。他遺構との重複はないが、東5mのところにS B04がある。規模は、桁行が6.3m、梁行が3.6mである。床面積は22.7m²である。方位はN-14°-Eの南北棟である。柱間寸法は、桁行が2.1mの等間に、梁行は3.6mに復元した。各柱穴の平面形は円形~梢円形を呈し、規模は長軸が25~34cm、短軸が17~28cmである。深さは確認面から10~24cm前後である。遺物の出土はなく、時期も不明である。

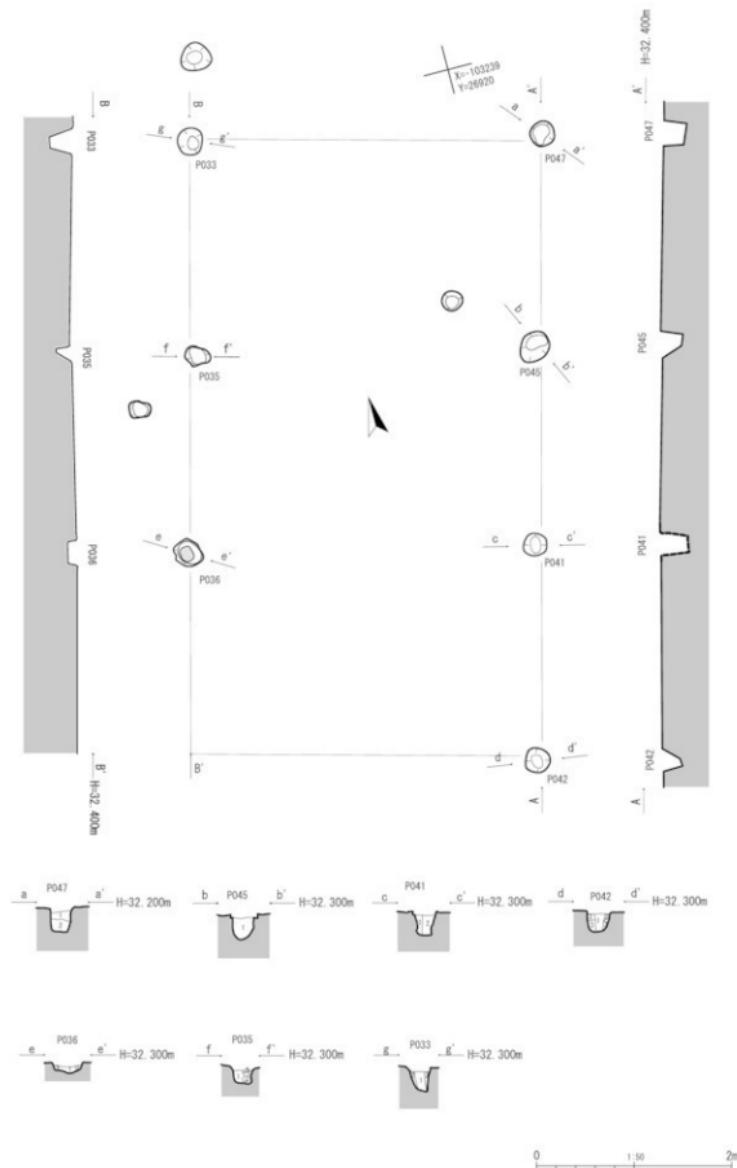
S B04 A区の中央部に位置する。失われた柱穴も多いが、桁行5間×梁行2間の掘立柱建物跡に復元している。遺構の確認は表土(Ⅰ層)除去後のV層で行っている。他遺構との重複はないが、西5mのところにS B03がある。規模は、桁行が7.1m、梁行が3.8mである。床面積は27m²である。



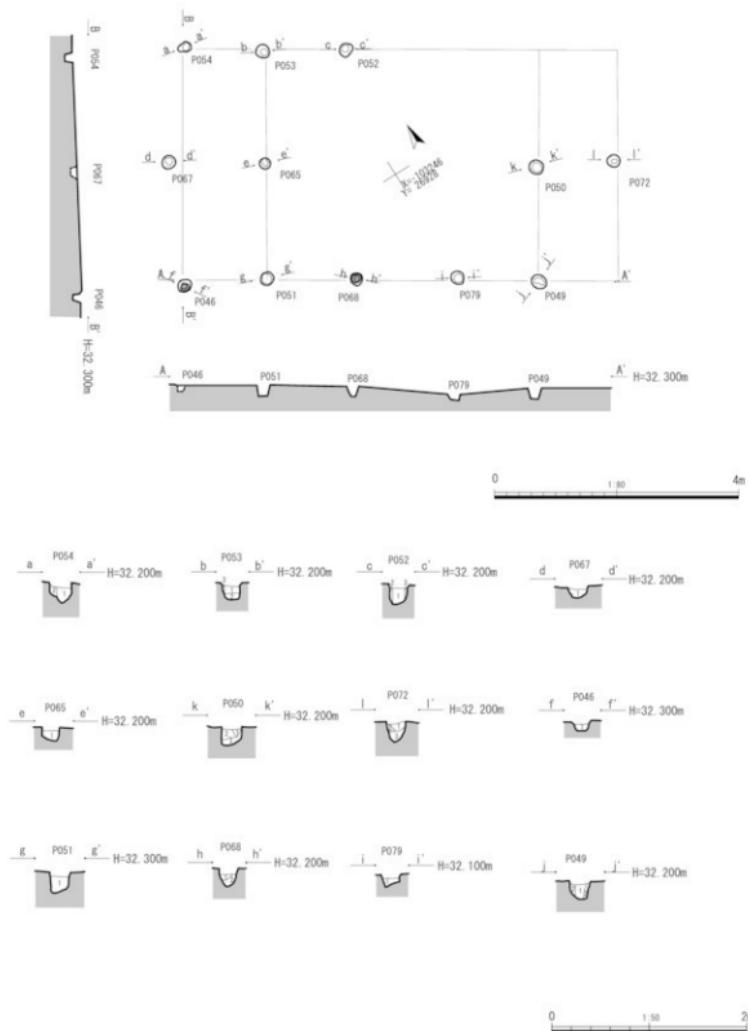
第12図 SB01平・断面図



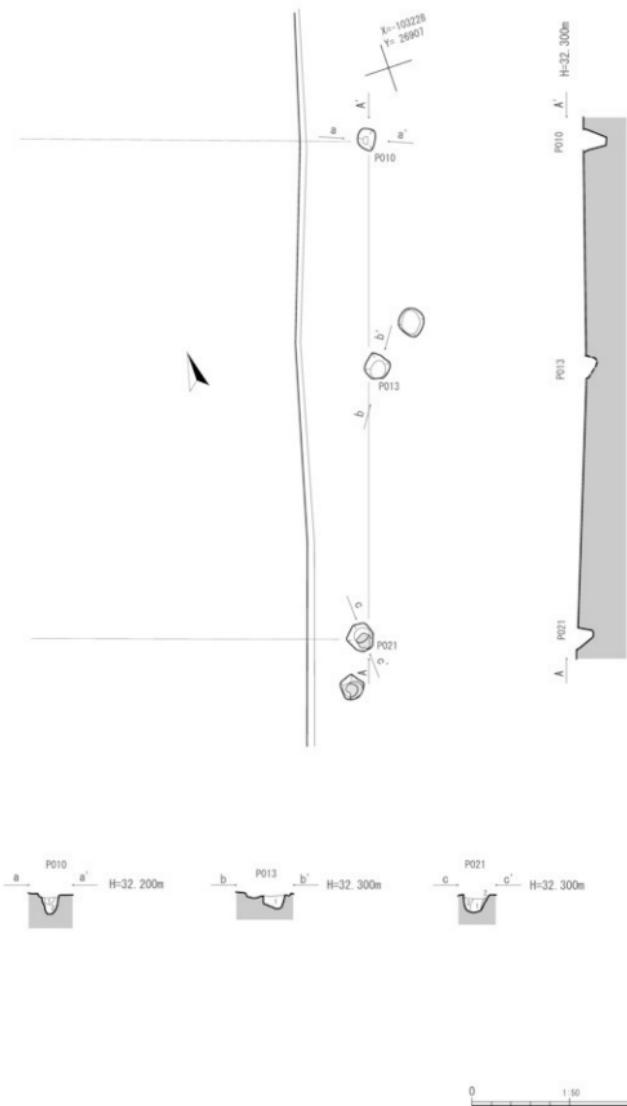
第13図 SB02平・断面図



第14図 S B03平・断面図



第15図 S B04平・断面図



第16図 S B05平・断面図

[SB01]	P091 (A- A')	1 黒褐色シルト10YR2/2 明黄褐色シルト (10YR7/6) 10~20%混入 2 褐色砂質シルト10YR4
P097 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 5%含む 2 黒褐色シルト10YR2/3 径 5 の炭化物 1%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 30%含む	
P096 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3/3 径 7 の炭化物 1%未満、明黄褐色シルト (10YR7/6) 1%含む 2 明黄褐色シルト (10YR3/3) 70%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 30%の混合土層 3 明褐色粘土質シルト7.5YR5/6 (増山)	
P095 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3/4 粘性・しまりあり 2 黄褐色粘土10YR5/6 明黄褐色シルト (10YR3/4) 構状に10%混入。 3 明黄褐色シルト10YR3/3 粘性・しまりあり 4 褐色シルト10YR4/6 粘性 やや弱り しまりあり	
[SB02]	P103 (A- A')	1 にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR4/3) 50%、にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 50%の混合土層 2 にぶい黄褐色シルト10YR4/3 粘性なし しまりあり
P104 (A- A')	1 黑褐色シルト10YR2/2 粘性なし しまりあり 2 黑褐色シルト (10YR3/2) 50%、にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 50%の混合土層 3 にぶい黄褐色シルト10YR4/4 粘性・しまりあり	
P105 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3/3 粘性やあり しまりあり 明黄褐色シルト (10YR7/6) 1~2%含む。 2 明黄褐色シルト (10YR7/6) 70%、暗褐色シルト (10YR3/3) 30%の混合土層。粘性なし しまりあり	
P106 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 1~2%含む 2 明黄褐色シルト (10YR7/6) 70%、暗褐色シルト (10YR3/3) 30%の混合土層	
P107 (B- B')	1 明黄褐色シルト10YR3/3 粘性ややあり しまりあり 明黄褐色シルト (10YR7/6) 1~2%含む。 2 明黄褐色シルト (10YR7/6) 70%、暗褐色シルト (10YR3/3) 30%の混合土層	
P108 (C- C')	1 明黄褐色シルト (10YR7/6) 50%、暗褐色シルト (10YR3/3) 50%の混合土層 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性・しまりあり 明黄褐色シルト (10YR7/6) 1%含む。 3 明黄褐色シルト (10YR3/3) 60%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 40%の混合土層 4 明黄褐色シルト (10YR3/3) 60%、明黄褐色砂質シルト (10YR7/6) 40%の混合土層	
P077 (D- D')	1 黑褐色シルト10YR2/3 粘性なし しまりあり 明黄褐色シルト (10YR7/6) 径 7) 2~3%含む。 2 明黄褐色シルト10YR3/3 粘性やあり しまりあり 3 黑褐色シルト (10YR2/3) 50%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 50%の混合土層。粘性なし しまりあり 4 黑褐色シルト (10YR2/3) 50%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 20%の混合土層。赤褐色燒土 (2.5YR4/8 径 5~7) 1%未満含む。	
P076 (D- D')	1 明黄褐色シルト (10YR3/3) 80%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 20%の混合土層。赤褐色燒土 (2.5YR4/8 径 2~3) 1%未満含む。 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 20%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 80%の混合土層、赤褐色燒土 (2.5YR4/8 径 2~3) 1%未満含む。	
P102 (D- D')	1 明黄褐色シルト (10YR3/2) 80%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 20%の混合土層、赤褐色燒土 (2.5YR4/8 径 5~7) 1%未満含む。 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 20%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 80%の混合土層 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 20%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 80%の混合土層 1%未満含む。 4 明黄褐色燒土質シルト (10YR7/6) しまりあり	
[SB03]	P047 (a- a')	1 黑褐色シルト10YR3/2 褐色シルト (10YR4/6) 5%含む。 2 黑褐色シルト10YR3/2 褐色シルト (10YR4/6) 5%含む。
P048 (b- b')	1 明褐色粘土質シルト10YR3/3 しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 3%含む。	
P041 (c- c')	1 明褐色砂質シルト (10YR3/3) 50%、10YR5/4 にぶい黄褐色シルト50%の混合土層	
P042 (d- d')	1 明褐色シルト (10YR3/3) 50%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 10%混合。 2 明褐色粘土質シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR5/6) 10%混合。 3 明褐色粘土質シルト10YR3/3 しまりあり	
P036 (e- e')	1 明褐色シルト10YR3/3 にぶい黄褐色シルト (10YR7/4) 15%混入。 2 明褐色シルト (10YR3/3) 60%、にぶい黄褐色シルト (10YR7/4) 40%の混合土層	
P035 (f- f')	1 明褐色シルト10YR3/3 にぶい黄褐色シルト (10YR7/4) 1~2%含む。	
P033 (g- g')	1 黑褐色シルト10YR2/3 粘性・しまりあり 2 明褐色シルト (10YR3/3) 50%、にぶい黄褐色シルト (10YR7/6) 50%の混合土層	
[SB04]	P054 (a- a')	1 明褐色シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 5~7%含む。 2 明褐色シルト (10YR3/3) 50%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 50%の混合土層
P053 (b- b')	1 明褐色シルト10YR3/3 粘性・しまりあり 2 黑褐色シルト10YR3/2 粘性・しまりあり 3 明褐色シルト (10YR7/6) 7%含む。	
P052 (c- c')	1 明褐色シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 10%含む。 2 明褐色シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 30%含む。 3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 7%含む。	
P067 (d- d')	1 黑褐色シルト10YR3/3 明黄褐色シルト (10YR7/6) 1%含む。	
P065 (e- e')	1 明褐色砂質シルト10YR3/2 粘性・しまりあり	
P046 (f- f')	1 明褐色砂質シルト10YR7/6 明黄褐色シルト (10YR6/6) 1~2%含む。	
P051 (g- g')	1 明褐色砂質シルト10YR3/3 粘性・しまりあり	
P068 (h- h')	1 黑褐色シルト10YR3/2 粘性・しまりあり 2 黑褐色シルト (10YR3/3) 50%、明黄褐色シルト (10YR7/6) 50%の混合土層	
P079 (i- i')	1 黑褐色シルト (10YR3/3) 粘性・しまりややあり	
P049 (j- j')	1 明褐色砂質シルト10YR3/3 粘性なし しまりあり 2 黑褐色シルト10YR3/2 粘性・しまりあり	
[SB05]	P010 (a- a')	1 黑褐色粘土質シルト10YR4/1 しまりあり 2 黑褐色粘土質シルト10YR4/1 褐色シルト (10YR4/4) 1~2%含む。
P013 (b- b')	1 暗褐色シルト (10YR3/3) 80%、にぶい黄褐色シルト (10YR7/4) 20%の混合土層	
P021 (c- c')	1 暗褐色シルト10YR3/3 粘性・しまりあり 2 明褐色シルト (10YR3/3) 40%、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 60%の混合土層	

方位はN- 32° - Eの東西棟である。柱間寸法は、桁行が西から1.4m、1.4m、1.6m、1.4m、1.3m、梁行は1.9mの等間である。北側柱列では3個の柱穴が、南側柱列では1個の柱穴が失われていると想定している。内部には左右の妻側から1間分柱穴がある。東西に庇が付設されるか、あるいは総柱になるかは柱穴が残存していないため不明である。各柱穴の平面形は円形～楕円形を呈し、規模は長軸が18～23cm、短軸が14～20cmである。深さは確認面から10～20cm前後である。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S B 05 A区の東端に位置する。大部分が調査区外へ続くため全容は不明である。調査区内では梁行2間分のみ確認している。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。他遺構との重複はないが、北4mのところにS D 02、南5mのところにS D 01がある。規模は、桁行が不明、梁行が5.1mである。方位はN- 19° - Eの東西棟と想定される。柱間寸法は、梁行が北から2.4m、2.7mである。東側に柱穴列が続かないことから、西側の調査区外の方向に延びることが想定される。各柱穴の平面形は円形～楕円形を呈し、規模は長軸が22～28cm、短軸が18～25cmである。深さは確認面から14～20cm前後である。遺物の出土はなく、時期も不明である。

（2）上 坑

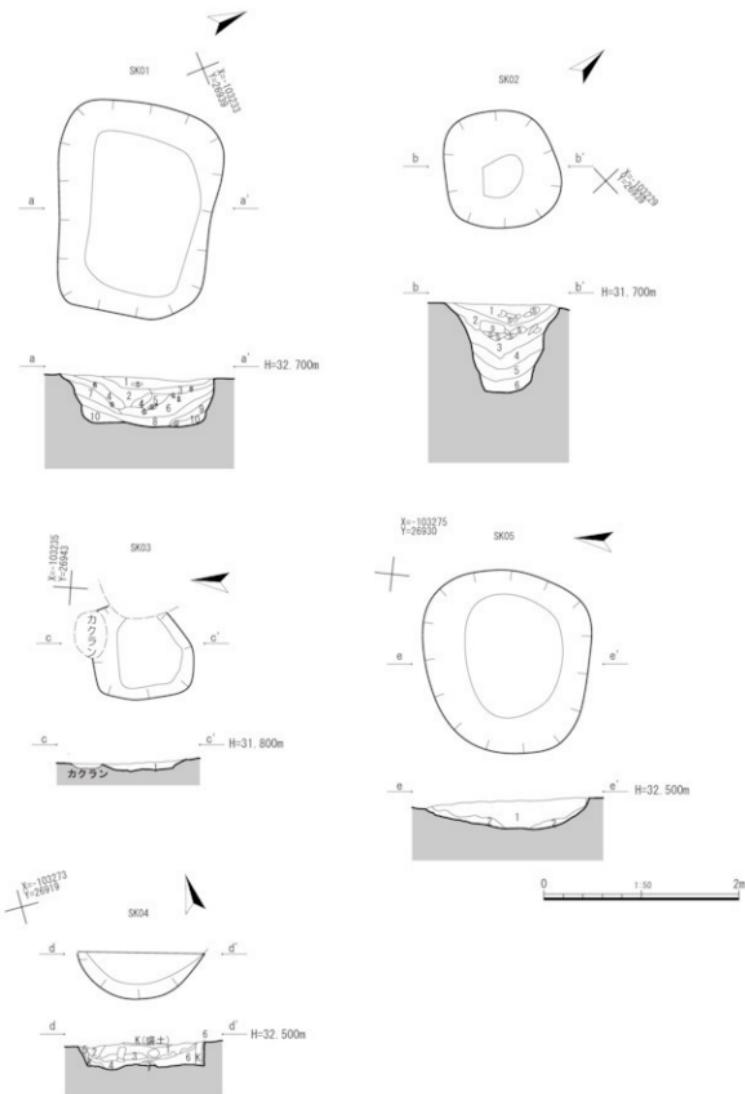
A区から5基検出している。

S K 01 A区北東部に位置する。他遺構との重複はないが、東1mのところにS K 03が、北西約3mにS K 02がある。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は、隅丸方形を呈し、規模は長軸が2.15m、短軸が1.7mである。深さは確認面から50cmである。断面型は逆台形状を呈しており、底面は比較的平らである。堆積土は、10層を確認した。1～6層は黒褐色を呈する粘土質シルトであり、7層は灰黄褐色を呈する粘土質シルト、8～10層は褐灰色を呈する、粘土あるいはシルトである。最初にいわゆる三角堆積後、レンズ状堆積が続くことから自然堆積と考えられる。遺物は渥美産などの国産陶器やかわらけが中心に出土している。遺構の時期はこれらの遺物から12世紀後半頃と推定される。

S K 02 A区北東部に位置する。他遺構との重複はないが、南東約3mにS K 01がある。遺構の確認は表土と黒色土層（I・II・IV層）直下のV層で行っている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径が1.2m程度である。深さは確認面から90cmであり、やや深い。堆積土は6層が確認でき。1～3層は黒褐色を呈する粘土質シルト、4・5層は黒褐色を呈するが粘土となる。6層は褐灰色を呈する粘土である。平面形状や深さ堆積土の状況などから井戸跡の可能性がある。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、付近の遺構と同時期の可能性がある。

S K 03 A区北東部に位置する。他遺構との重複はないが、西1mのところにS K 01がある。また、カクランによって一部が破壊されている。遺構の確認は表土と黒色土（I・II・IV層）直下のV層で行った。平面形はいびつな楕円形を呈し、規模は長軸1m、短軸0.8mである。深さは浅く、確認面から10cm程度である。削平がかなり及んでいると推定される。堆積土は単層で、黒褐色を呈する粘土質シルトが堆積する。遺物は渥美産陶器片やかわらけ片が合計65.8g出土する。時期はこれらの遺物から12世紀後半頃と考えられる。

S K 04 B区西側に位置する。他遺構との重複はないが、北50cmのところにS B 01がある。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層で行っている。B区とA区の境には高さ30cm程度の段差があり、本遺構はその境に位置するため、A区側の約半分が壊されている。平面形は削平のため不明であるが、楕円形を呈すると推定される。規模は、現状で長軸1.3m、短軸0.5mである。深さは確認面から20cm



第17図 土坑

[SK01] a - a'

- 黒褐色粘土質シルト10YR3/2 しまりあり 黄橙色粘土 (10YR8/8) 1%含む。
- 黒褐色粘土質シルト10YR3/2 しまりあり 黄橙色粘土 (10YR8/8) 層全体に20~25%含む。
- 黒褐色粘土質シルト10YR3/2 しまりあり 黄橙色粘土 (10YR8/8) 微量 (1%未満) 含む。
- 黒褐色粘土質シルト10YR2/2 粘性・しまりあり 黄橙色粘土 (10YR8/8) 1~2%含む。
- 4層に類似。4層よりやや濃色。
- 黒褐色粘土質シルト10YR3/2 しまりあり 炭化物 (径1~2) 1%未満含む。
- 灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2 しまりあり 黄橙色粘土 (10YR8/8) 1%含む。
- 褐灰色粘土10YR4/1 径5 の炭化物 1%含む。(6層との間に炭化物層あり)
- 褐灰色粘土10YR4/1 黄橙色粘土 (10YR8/8) 5~7%含む。
- 褐灰色シルト (10YR4/1) 70%、黒褐色シルト (10YR3/1) 10%、黄橙色粘土 (10YR8/8) 20%の混合土層

[SK02] b - b'

- 黒褐色粘土質シルト10YR2/3 明黃褐色シルト粒 (10YR6/6) 1%含む。
- 黒褐色粘土質シルト10YR2/3 明黃褐色シルト粒 (10YR6/6) 15~20%含む。
- 黒褐色粘土質シルト10YR2/2 明黃褐色シルト粒 (10YR6/6) 微量 (1%未満) 含む。
- 黒褐色粘土10YR2/2 明黃褐色シルト (10YR6/6) 20%混入。
- 黒褐色粘土 10YR3/1 明黃褐色シルト (10YR6/6) 1%混入。
- 褐灰色粘土 10YR4/1 にぶい黄橙色粘土質シルト (10YR7/2) 10~15%混入。

[SK03] c - c'

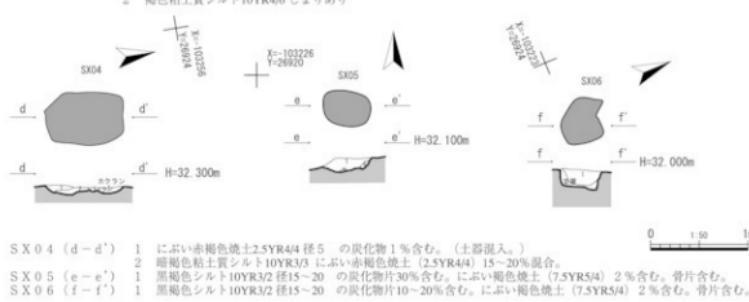
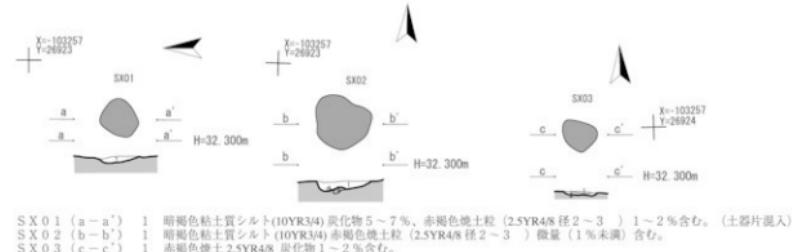
- 黒褐色粘土質シルト10YR3/2 しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 1~2%含む。
- 暗褐色シルト10YR3/3 粘性・しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 1~2%含む。

[SK04] d - d'

- 暗褐色埴土7.5YR3/3にぶい黄褐色シルト粒 (10YR5/4径7~10) 1~2%、径3~7 の炭化物片 1%混入。
- 暗褐色シルト10YR3/3にぶい黄褐色シルト粒 (10YR5/4径7~10) 5%混入。
- 黒褐色シルト10YR2/3にぶい黄褐色シルト (10YR3/3) 3%混入。
- にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 60%、暗褐色シルト (10YR3/3) 30%の混合土層
- にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 60%、暗褐色シルト (10YR3/3) 40%の混合土層
- 暗褐色シルト10YR2/2にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 10~15%、暗赤褐色埴土 (5YR3/2) 1~2%含む。
- にぶい黄褐色シルト10YR4/4粘性・しまりあり

[SK05] e - e'

- 黒褐色シルト10YR2/3 明赤褐色埴土粒 (5YR5/6径5~7) 1%、径5~10 の炭化物片 1%含む。
- 黒褐色シルト (10YR2/3) 60%、にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 40%の混合土層



第18図 塗土・炭化物

である。堆積土は7層が確認でき、1・2層は暗褐色を呈するシルトで、1層は焼土を伴う。3層は黒褐色シルト、4・5・7層にはぶい黄褐色シルト、6層は暗褐色シルトである。遺物は、土師器片が少量出土するのみであり、これを考慮すると時期は平安時代に位置づけられる。

S K05 B区西側に位置する。他遺構との重複はない。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は梢円形状を呈し、規模は長径1.9m、短径1.7mである。深さは確認面から30cmである。堆積土は2層が確認できる。いずれも黒褐色を呈するシルトである。遺物は、土師器を中心に出土している（土師器309.6g、須恵器24.5g）。これらを考慮すると時期は平安期に位置づけられる。

（3）焼土・炭化物集積

焼土は合計4基、炭化物の集積が2箇所確認している。いずれもA区からの検出である。これらは単独の焼土というよりは、本来竪穴建物に伴うもので、削平を受けた残りを焼土として確認している可能性がある。炭化物の集積についてもこの焼土などと同様と考えることができるが、確実な証拠はなく性格不明とした。これらは焼土とあわせて、すべて不明遺構（S X）として登録している。

S X01焼土遺構 A区南東部に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。他遺構との重複はないが、付近に隣接して、S X02・04がある。平面形は梢円形状を呈し、規模は40×35cmである。堆積土は暗褐色を呈する粘土質シルトであり、炭化物や焼土粒を含んでいる。遺物は土師器を中心に少量（210.1g）出土する。出土遺物から平安時代に属する遺構と考えられる。

S X02焼土遺構 A区南東部に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。他遺構との重複はないが、付近に隣接して、S X01、S X03・04がある。平面形はいびつな梢円形状を呈し、規模は60×50cmである。堆積土は暗褐色を呈する粘土質シルトであり、焼土粒を含んでいる。出土遺物はないが、S X01と同様の時期に属すると考えられる。

S X03焼土遺構 A区南東部に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。他遺構との重複はないが、付近に隣接して、S X01・02・04がある。平面形は梢円形状を呈し、規模は40×30cmである。焼土は比較的明瞭であり、赤褐色を呈する。遺物の出土はないが、隣接するS X01などと同様の時期の遺構と考えられる。

S X04焼土遺構 A区南東部に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。他遺構との重複はないが、付近に隣接して、S X01・03がある。平面形は梢円形状を呈し、規模は80×50cmである。焼土は比較的明瞭であり、にぶい赤褐色を呈する。遺物は土師器が少量（101g）出土する。出土遺物や、隣接する類似遺構と同じく平安時代に属すると考えられる。

S X05炭化物集積 A区北側に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。平面形は梢円形を呈し、規模は50×40cmである。黒褐色を呈するシルトが堆積し、焼土や骨片を含んでいる。骨片は細片で採取できなかった。遺物の出土はなく、時期は不明である。

S X06炭化物集積 A区北側に位置する。遺構の確認は表土（I・II層）直下のV層面である。平面形はいびつな梢円形を呈し、50×40cmの範囲で広がる。黒褐色を呈するシルトに炭化物が含まれ、焼土、骨片を包含する。遺物の出土はなく時期は不明である。

（4）井戸跡

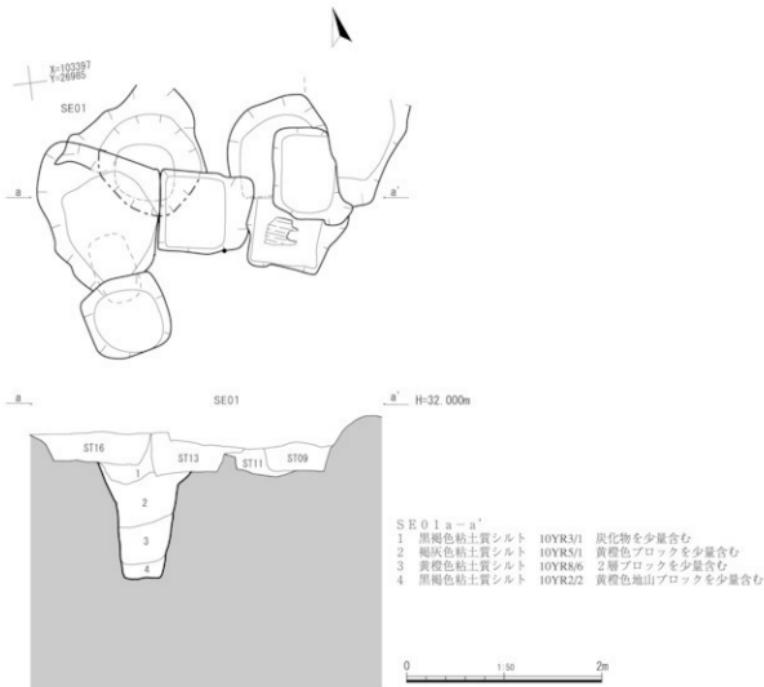
井戸跡として登録したのは1基のみであるが、土坑としたS K02は井戸跡と考えており、合計2基が今回の調査で確認された。ここでは、先に触れた以外について説明する。

SE01 C区北側の近世墓群のなかに位置する。ST16・13と重複しており、新旧関係はいずれの墓壙よりも本遺構の方が古い。平面形は上部がかなり墓壙の影響を受けいびつであるが、上部以外はほぼ円形を呈している。規模は最大で径1.5m、中位で1.0m、底面付近では0.6mである。深さは墓壙確認面から1.5mである。堆積土は4層に区分される。1・4層は黒褐色を、2層は褐灰色を、3層は黄橙色を呈する粘土質シルトである。遺物の出土はないが、重複関係から、墓壙と近い時期のものと考えられる。

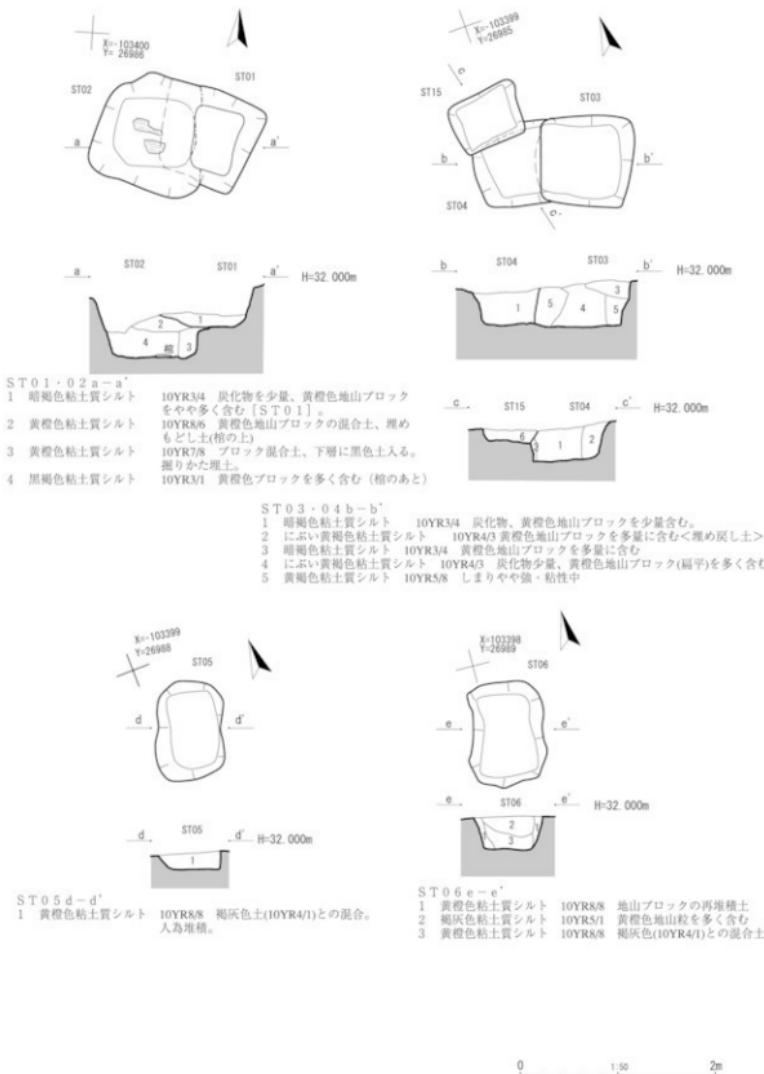
(5) 墓 塙

墓壙はすべて近世墓であり、C区の北側で1箇所に集中して確認されている。合計23基を検出している。一定の範囲内で、多数の重複が認められるため、墓域としてこの範囲が認識されていたと考えられる。

ST01 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。ST02と重複しており、新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形は正方形状を呈するが、重複のため一部が壊されて不明である。規模は一辺が1.0m程度である。深さは確認面から40cmである。堆積土は1層のみを確認



第19図 井戸跡



第20図 土壌墓 1

した。暗褐色を呈する粘土質シルトで、地山ブロックを多く含んでいる。遺物は、鉄釘や鉄釘などの鉄製品が出土している。

S T02 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。S T01と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は隅丸方形状を呈するが、重複のため一部が壊されて不明である。規模は一辺が1.2m程度である。深さは確認面から60cmである。堆積土は3層に区分できる。2・3層は黄橙色を呈する粘土質シルトで、地山ブロックを多く含む埋め戻し土と考えられる。4層は黒褐色を呈する粘土質シルトであり、棺内が腐食した層と考えられる。遺物は、鉄釘、鉄や銅の錢類、キセル、火打金などの金属製品が中心であるが、火打金に伴って火打ち石も出土している。なお、底面には腐食した棺の底板が残存していた。

S T03 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。S T04と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は正方形状を呈し、一辺が0.9mである。深さは確認面から50cm程度である。堆積土は3つの層が確認できる。5層は、地山ブロックを多量に含む埋め戻し土であり、にぶい黄褐色を呈する4層は棺の痕跡に由来すると考えられる。3層は埋め戻し土と考えたが、別墓壙の可能性もある。遺物は鉄釘・鉄錢のほかに肥前産磁器碗が1点出土している。

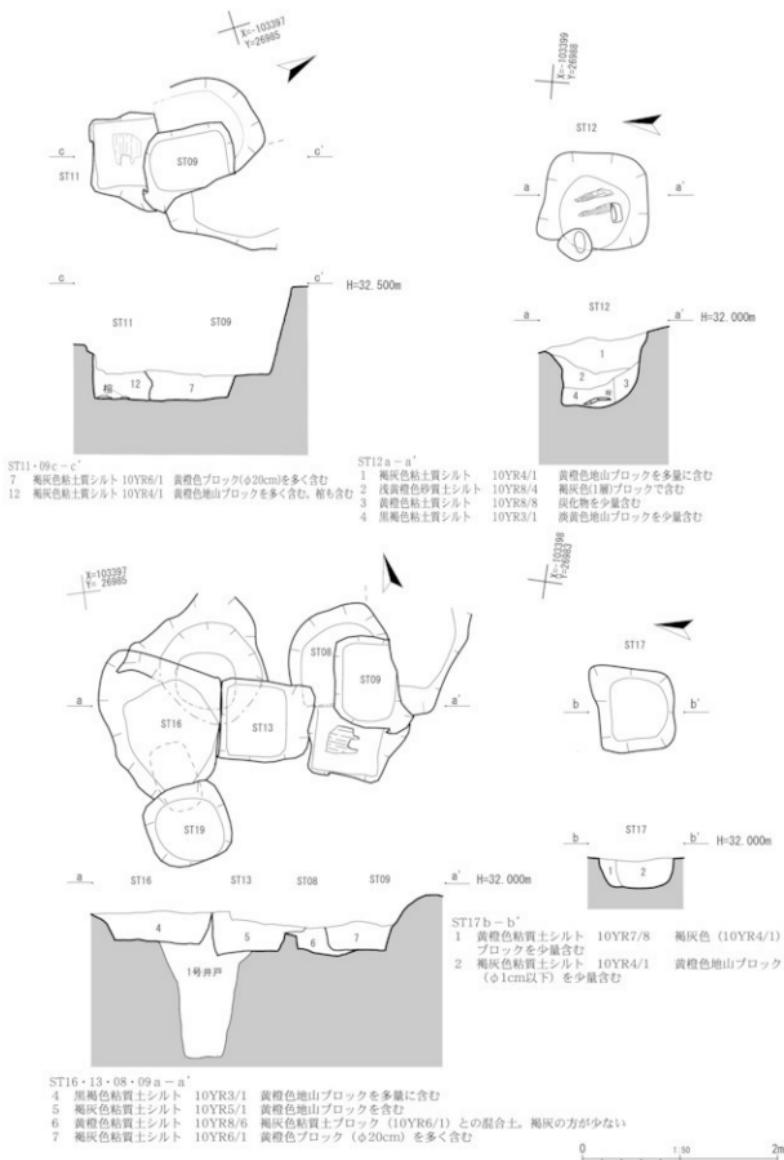
S T04 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。S T03、S T15と重複しており、新旧関係は両者よりも本遺構の方が古い。平面形は正方形状を呈すると推定されるが、両側が他遺構と重複しているため詳細は不明である。残存する規模は断面でみると70cmであり、深さは確認面から30cmである。堆積土は棺に由来する暗褐色粘土質シルト層と埋め戻し土のにぶい黄褐色粘土質シルト層の2つに区分できる。遺物は、キセル、鉄釘、鉄錢が中心に出土している。

S T05 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。他遺構との重複はなく単独で存在する。北川に隣接してS T06がある。平面形は長方形状を呈し、長軸1.0m、短軸0.7mである。深さは確認面から18cmである。堆積土は黄褐色を呈する粘土質シルトの単層である。遺物は銅錢が中心に出土している。

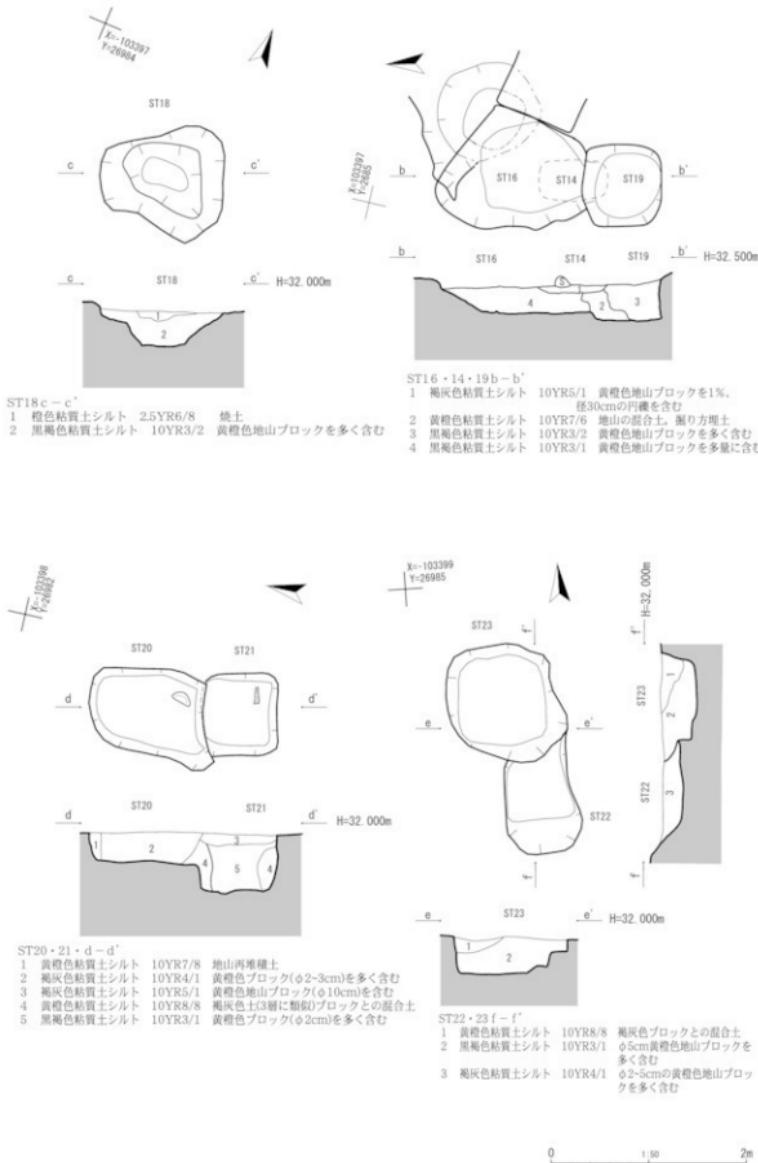
S T06 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。他遺構との重複はなく単独で存在している。南に隣接してS T05がある。平面形は長方形状を呈し、規模は長軸が1.0m、短軸が0.7mである。深さは確認面から32cmである。堆積土は3層が確認でき、埋め戻し土(堀方堆積土)である1層は地山ブロックを混合する黄橙色の粘土質シルトで、2・3層は棺の痕跡を示すであろう。遺物は銅錢が中心に出土している。

S T07 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。S T08とS T09と重複している。新旧関係は、S T08・09調査後に残った部分がS T07としたため、判断がつかなかつた。上下の位置が、S T09やS T08よりも高いことからあるいは、本遺構が一番新しい時期かもしれない。確認できた平面規模は、長軸が1.2m、短軸が1m程度であり、北側に続いている。深さは確認面から30cmほどである。遺物はS T07単独では不明であるが、S T07～S T09、S T11の4遺構一括で銅錢や鉄釘、鉄錢などが出土している。

S T08 C区北側に位置する。表土(Ⅰ・Ⅱ層)直下のV層面で確認している。S T07、S T09、S T11、S T13と重複している。S T07、S T09、S T13より古く、S T11とは検出時では本遺構の方が新しい。平面形は、他遺構との重複が多く、判然としないが、正方形状ないし方形基調の楕円形を呈する。規模は、1辺が1m程度である。深さは確認面から30cm程度である。遺物の多くは重複遺構と一緒に取り上げた。そのため本来の所属は不明であるが、S T07～09・S T11から銅錢や鉄釘、鉄錢などが出土している。単独では、キセル、火打金、火打石が出土している。



第21図 土壌墓2



第22図 土壌墓3

S T09 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T07、S T08、S T11と重複しており、新旧関係はS T07より古く、S T07・08よりは新しい。平面形は一部崩れているものの長方形形状を呈し、規模は長軸が0.95m、短軸が0.8mである。深さは確認面から25cmである。堆積土は褐灰色を呈する粘質土のみ残存する。遺物は単独では銅錢が少量と銅鏡が1点出土している。このほか、多くは重複遺構と一緒に取り上げてあり、S T07～S T09、S T11の4遺構一括で銅錢や鉄釘、銅鏡、刀子などが出土する。

S T10 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T12と重複しており、新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形は梢円形を呈し、規模は34×30cmと、周囲のものよりも小さい。深さは確認面から約10cmほどである。遺物は明確なものは出土していないが、碟が1点出土している。銘文等はないものの墓標の可能性がある。

S T11 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T08、S T09と重複しており、新旧関係はS T08・09よりも古い。平面形は一部崩れているものの正方形形状を呈する。規模は1辺が0.8m前後である。深さは確認面より55cmである。底面には腐食した棺が残存している。堆積土は褐灰色を呈する粘土質シルトのみ残存する。遺物は多量の銅錢が出土するほかキセルや布片出土している。また、重複遺構（S T07～S T09、S T11の4遺構）と一緒に取り上げた銅錢や鉄釘、銅鏡、刀子なども出土している。

S T12 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T10、S T11と重複しており、新旧関係はS T10よりも古く、S T11よりも新しい。ただし、S T11とは平面でのみ観察しているため、確定ではない。平面形は隅丸方形形状を呈し、規模は、長軸1.05m、短軸1.0mである。深さは確認面から70cmである。堆積土は4層が確認できる。1層が褐灰色を、2層が淡黄橙色を、3層が黄橙色を、4層が黒褐色を呈する粘土質シルトである。4層は層中に棺片を含むことや、黒褐色を基調とすることから、棺の痕跡に由来すると考えられる。遺物は墓標と考えられる円碟、銅錢が出土している。円碟は埋土中からであり、本遺構に伴うかは不明である。

S T13 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T08、S T11、S T16、S E01と重複している。新旧関係は、S T08・11、S E01とでは本遺構の方が新しく、S T16とは検出位置が低かったため不明である。平面形はほぼ正方形形状を呈しており、規模は、一辺が0.8mである。東辺は重複遺構の影響か崩れて広がっている。深さは確認面から40cmである。堆積土は褐灰色を呈する粘土質シルトのみ残存している。遺物はキセル片のほか鉄釘、銅鏡、銅錢が出土している。

S T14 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T16、S T19と重複しており、新旧関係は両者よりも新しい。平面で検出することができず、断面でのみ確認した。したがって、平面形は不明であるが、断面の形状や周囲の状況から長方形形状を呈すると想定している。規模は、断面図では、長さが0.7m、深さが確認面から10cmが確認できる。堆積土は褐灰色を呈する粘土質シルトのみ残存している。遺物は、地蔵尊を陰刻した墓標が出土したのみである。

S T15 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T04と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は長方形形状を呈し、規模は長軸70cm、短軸55cmである。深さは確認面から10cm程度である。堆積土は1層のみ残存し、黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は銅錢が中心に、キセル等も出土している。

S T16 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T14、S T19と重複しており、両者よりも古い遺構である。また、S T13とも重複しているものの、掘り込み面が削

平されていることから、新旧の判断がつかない。平面形は重複が激しいため判然としないが、いびつな長楕円形を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.3mである。深さは確認面から25cmであり、黒褐色を呈する粘土質シルトが堆積する。遺物は、鉄釘や鉄銭が中心に出土している。

S T17 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。単独で他遺構との重複はないが、西にS T20が、東にS T23がすぐ隣接して存在する。平面形はいびつな正方形状を呈し、規模は一辺が0.7~0.8mである。深さは確認面から28cmである。堆積土は2層が確認でき、1層は黄橙色を呈する粘土質シルトで、地山由来層である。埋め戻し土と推定される。2層は褐灰色の粘土質土で、棺の痕跡に相当するであろう。遺物は土師器の混入のほか、鉄釘、鉄銭が中心に出土している。

S T18 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。単独で他遺構との重複はないが、南にS T23が、東にS T16がすぐ隣接して存在する。平面形はいびつであり、本来は方形を意識した可能性があるが、かなり崩れている。規模は、長軸が1.3m、短軸が0.7~1.2mである。深さは確認面から36cmである。堆積土は2層が確認できる。1層は橙色を呈する粘土質シルトで、焼土塊と推定される。2層は黒褐色を呈する粘土質シルトである。この堆積層や堆積状況から、他の墓壙と様相が異なっており、また、遺物の出土もない。そのため他遺構の可能性があるが、ここでは一連の墓壙として認識している。

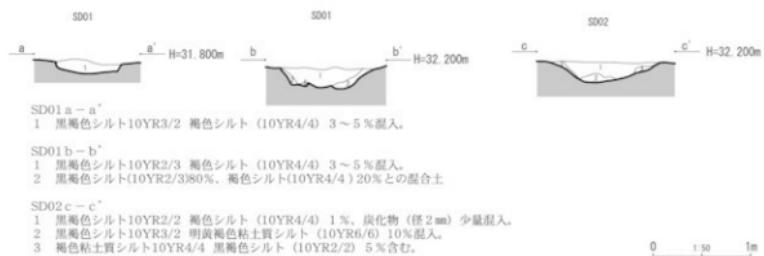
S T19 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T14、S T16と重複している。新旧関係は、S T14よりも古く、S T16よりも新しい。平面形は正方形状を呈し、規模は一辺が0.8mである。深さは確認面から38cmである。堆積土は2層に分けられ、黄橙色を呈する埋め戻し土と棺の痕跡由来の黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物は、鉄釘、鉄銭、銅銭が出土している。

S T20 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。墓壙群の西端にあり、S T21と重複している。新旧関係は、S T21よりも新しい。平面形は長方形状を呈しており、規模は、長軸が1.2m、短軸が0.9mである。深さは確認面から30cmである。堆積土は2層に分けられる。埋め戻し土と考えられる黄橙色を呈する粘土質シルトと、棺の痕跡に由来する褐灰色を呈する粘土質シルトである。遺物は、鉄釘、鉄銭のほか銅銭、キセルが出土している。

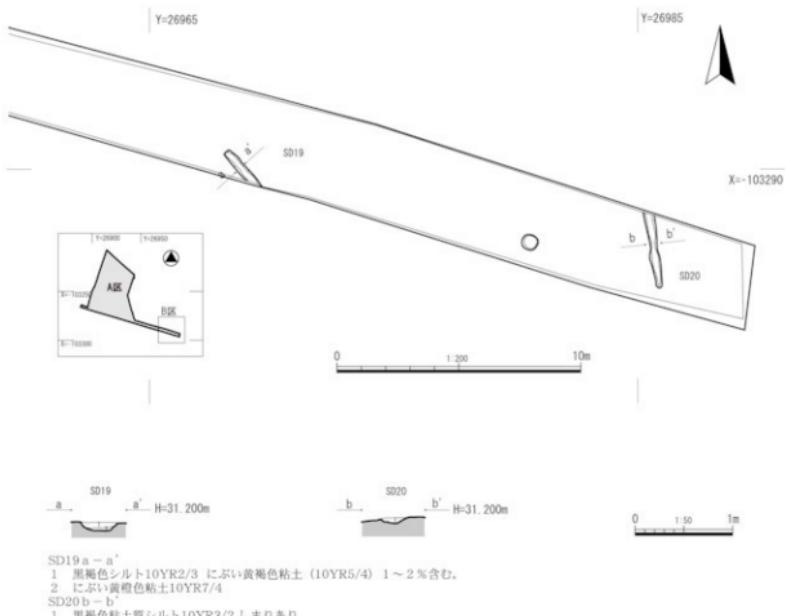
S T21 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。墓壙群の西端にあり、S T20と重複している。新旧関係は、S T20よりも古い。平面形は正方形状を呈し、規模は一辺が0.8mである。深さは確認面から55cmであり、堆積土は3層に分けられる。3・4層は褐灰色や黄橙色を呈する粘土質シルトで、地山由來のブロックを多く含む。埋め戻し土と考えられる。5層は黒褐色を呈する粘土質シルトであり、棺の痕跡に由来すると考えられる。遺物は、磁器片のほか、鉄釘、鉄銭、銅銭、キセルが出土している。

S T22 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T23と重複しており、新旧関係はS T23よりも古い。平面形は長方形状を呈しているが、重複により北側は不明である。規模は、長軸が現存で1.2m、短軸が0.8mである。深さは確認面から20cmである。堆積土は褐灰色を呈する粘土質シルトのみ残存する。遺物は、墓石と思われる自然礫や鉄釘、鉄銭、銅銭、キセルが出土している。

S T23 C区北側に位置する。表土（I・II層）直下のV層面で確認している。S T22と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形はくずれた正方形状を呈し、規模は一辺が1.1~1.2mである。深さは、確認面から36cmである。堆積土は2層に分けられ、黄橙色を呈する粘土質シルトと黒褐色を呈



第23図 溝跡 1



第24図 溝跡2

する粘土質シルトである。遺物は、銅錢、火打金、火打石（燧石）、キセル、鉄釘、鉄錢が出土している。

(6) 溝 跡

溝跡は各調査区から20条を検出している。とくにC区に集中する。これらは、調査区外に続くものが多く全容は不明なものが多い。時期不明のものが多く、性格を判断することは難しいが、直角に屈曲するものが多いことから、施設を区画する溝の可能性もある。

S D 01 A区北西部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。炭化物の集積(S X02)と重複しており、本遺構の方が古い。北7mにS D 02がある。遺構の確認は表土(I・II層)除去後のV層で行っている。調査区内における長さは、直線距離で約30m、上幅は最大で1.8mである。深さは、確認面から20cmである。堆積土は2層が確認できる。いずれも黒褐色を呈するシルトである。溝跡の方向は、南東から北東方向にほぼ直線的に延びている。南東端はさらに調査区外に続き、北西端は底面が徐々に浅くなっていることから削平されたと考えられる。遺物は縄文土器が28.3g出土するのみであるが、数か少ないこともあり混入の可能性も否定できないため、時期は不明と言わざるを得ない。

S D 02 A区北西部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はないが、南約7mにS D 01がある。南西端は調査区外へとつづき、北東端はカクランにより破壊されているため

全容は不明である。確認できる規模は、長さが3.7m、上幅が1.4mである。深さは確認面から20cmである。堆積土は3つに分層でき、1・2層が黒褐色を呈するシルト、3層が褐色を呈する粘土質のシルトである。溝跡の方向はS D 01と同様に、南西から北東方向にはほぼ直線的に延びているが、多くが調査区外やカクランのため不明の点が多い。S D 01とともに北側にある低地に向かって構築されている。出土遺物はなく、時期は不明である。

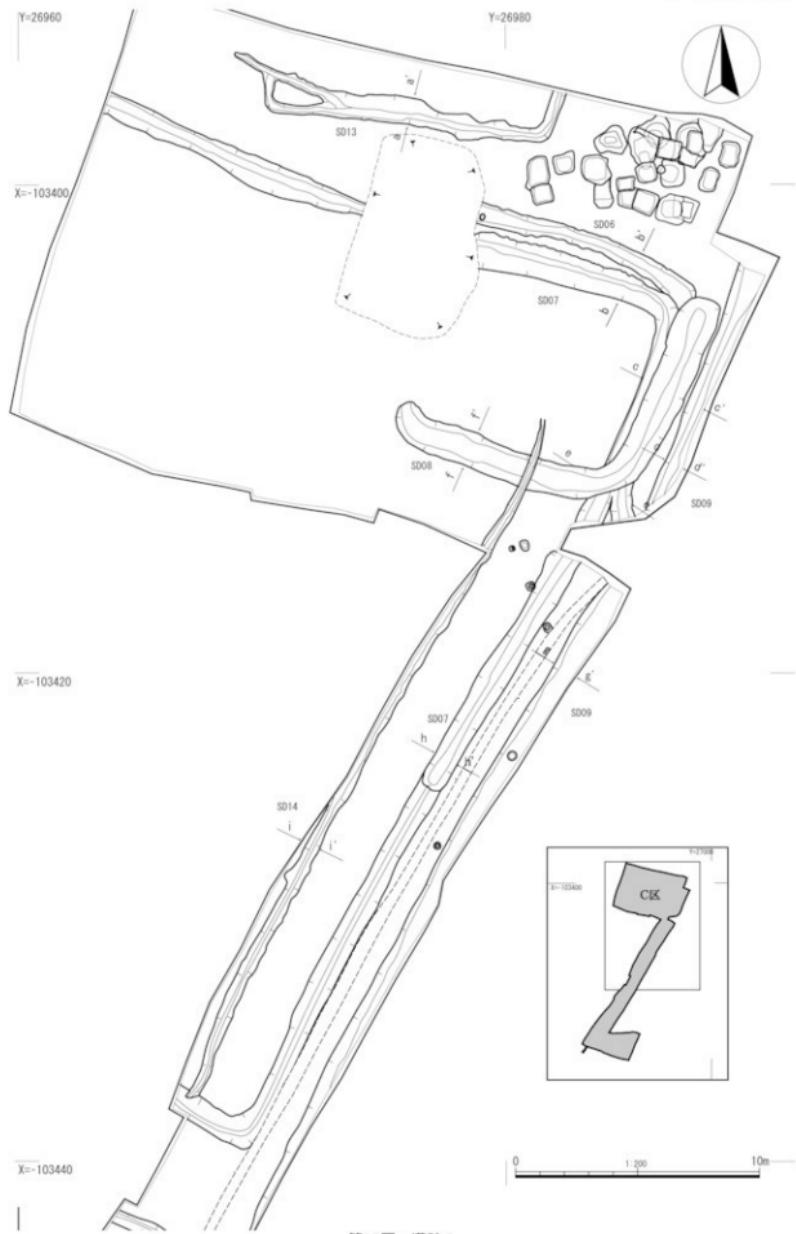
S D 03 C区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。S D 04と重複しており、新旧関係はS D 04よりも新しい。S D 05とは重複していると推定されるが、削平のため判別できない。北端と南端は調査区外へつづくため詳細は不明である。溝跡の方向は北からであり、南に延びた後に東に直角に曲がる。確認できる規模は、約17m、上幅が最大で1.2mである。深さは確認面から18cmである。堆積土は3層が確認でき、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルトである。1層が単独で溝の断面を示すことから、浚渫あるいは掘り直しの可能性がある。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S D 04 C区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。S D 03、S D 05と重複しており、新旧関係は、両者よりも古い。溝跡の方向はS D 03と同様に、北からであり、南に延びた後、東に直角に曲がり、そのまま東方向に続く。隅角部分は緩やかである。北端と東端は調査区外へつづくため詳細は不明である。確認できる規模は、長さが約14m、上幅が最大で1.4mである。深さは確認面から20cmである。堆積土は4層が確認でき、いずれも黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物の出土はなく、したがって時期も不明である。北側を延長すると、S D 09と同一遺構となるかもしれない。

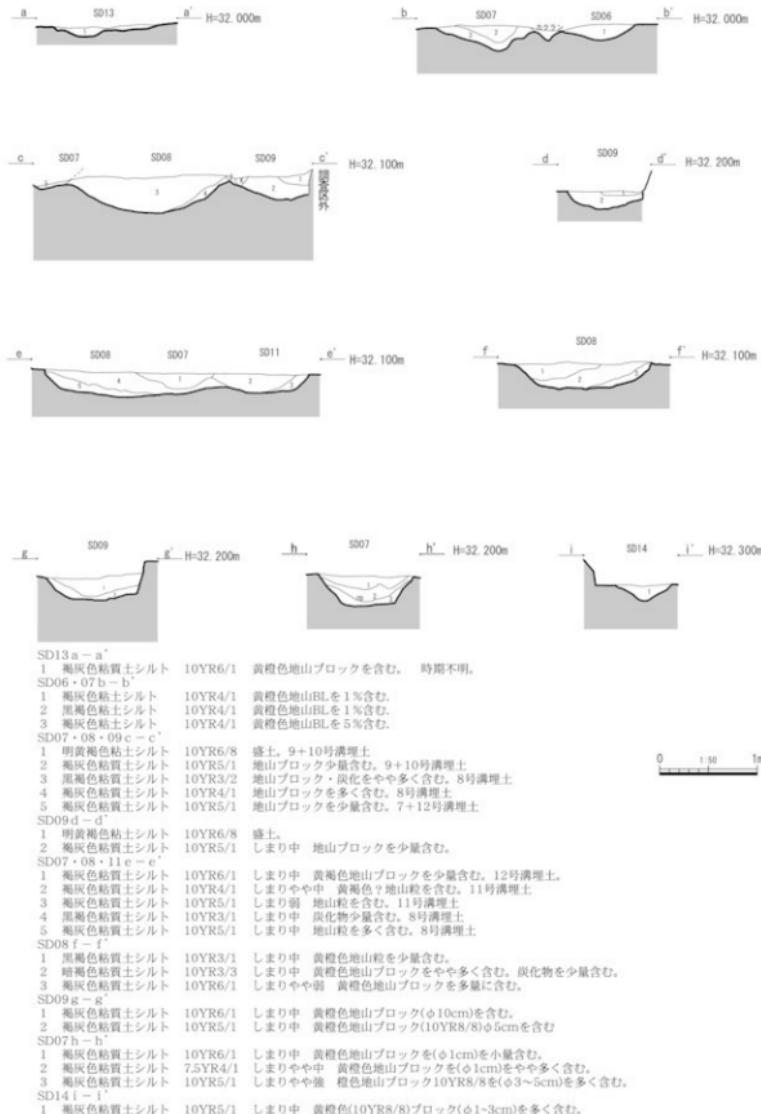
S D 05 C区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。S D 04と重複しており、本遺構の方が新しい。S D 03とは重複すると推定されるが、削平により判断できなくなっている。溝跡の方向は北からであり、南に向かってほぼ直線的に延びる。北端は調査区外へ続き、南端は削平により途切れている。確認できる規模は、長さが10m、上幅が最大で0.6mである。深さは確認面から10cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトである。遺物の出土はないことから、時期も不明である。

S D 06 C区北側に位置する。遺構の確認はV層で行っている。S D 08とS D 07、P 130と重複しており、新旧関係は両溝跡よりも古く、P 130よりは新しい。また、西端をカクランによって破壊されており、さらにその先では確認できない。確認できた範囲は少ないが、規模は長さが9.5m、上幅が0.9mである。深さは確認面から16cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトである。溝跡の方向は西から南東方向にほぼ直線的に延びているが、S D 08と重複する付近で直角に南に屈曲するようである。出土遺物はなく、したがって時期は不明である。

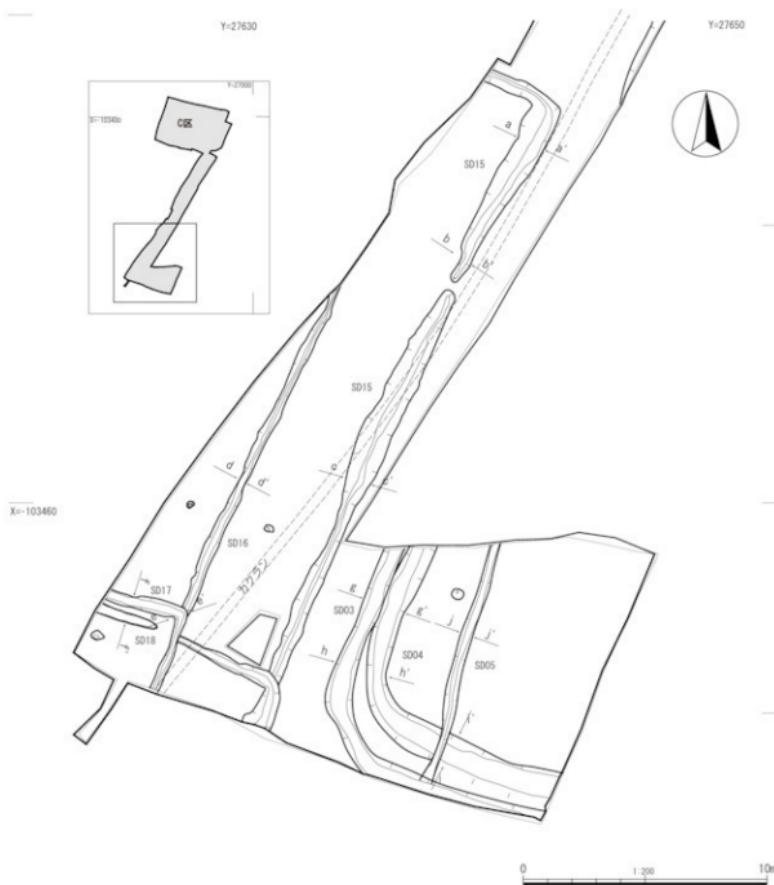
S D 07 C区北半に位置する。遺構の確認はV層で行っている。S D 06、S D 08、S D 11、S D 14、P 126と重複し、新旧関係はS D 06・S D 11よりも新しく、S D 08・S D 14・P 126よりは古い。ただし、S D 11とは重複部分がわずかであるため、不明な点も残る。現在の水道管により南側の一部が、カクランにより北側の一部が破壊されていることや、北西端、南西端は調査区外に続くため全容は不明である。確認できる規模は、調査区内で確認できる規模は、長さが直線距離の合計が、約65m、上幅が最大で1.5mである。深さは確認面から最大で30cmで、断面形は北側の断面b-b'付近では「V」字形に近く、断面h-h'付近では、逆台形状を呈する。堆積土は3層が確認でき、いずれも褐灰色を呈する粘性シルトである。溝跡の平面形は「コ」の字形を呈すると想定され、溝跡の方向は、北西端から、東に約25m、南に直南37m、西に3mの順となる。後述するS D 15とは対照的な平面形であり、両者が同一時期であれば、S D 07とS D 15との間は入り口もしくは道路（通路）となるであろう。また、断面h-h'付近では北側が改修あるいは浚渫されたため再度掘り込まれている。



第25図 溝跡3



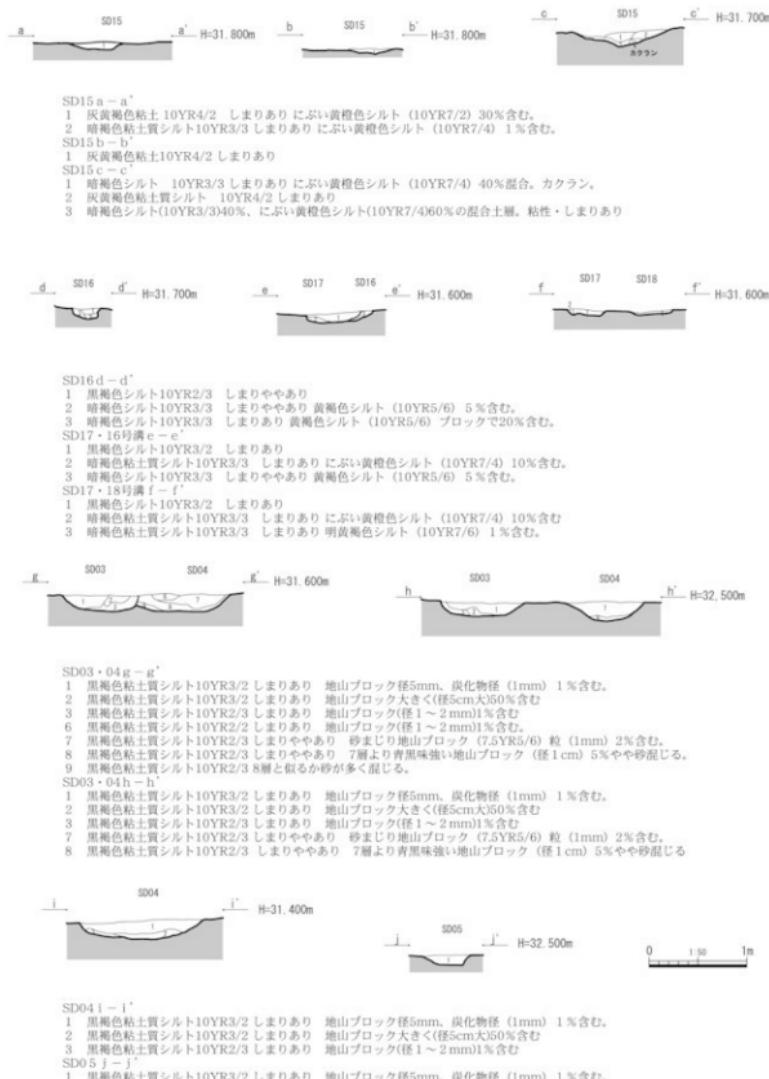
第26図 溝跡4



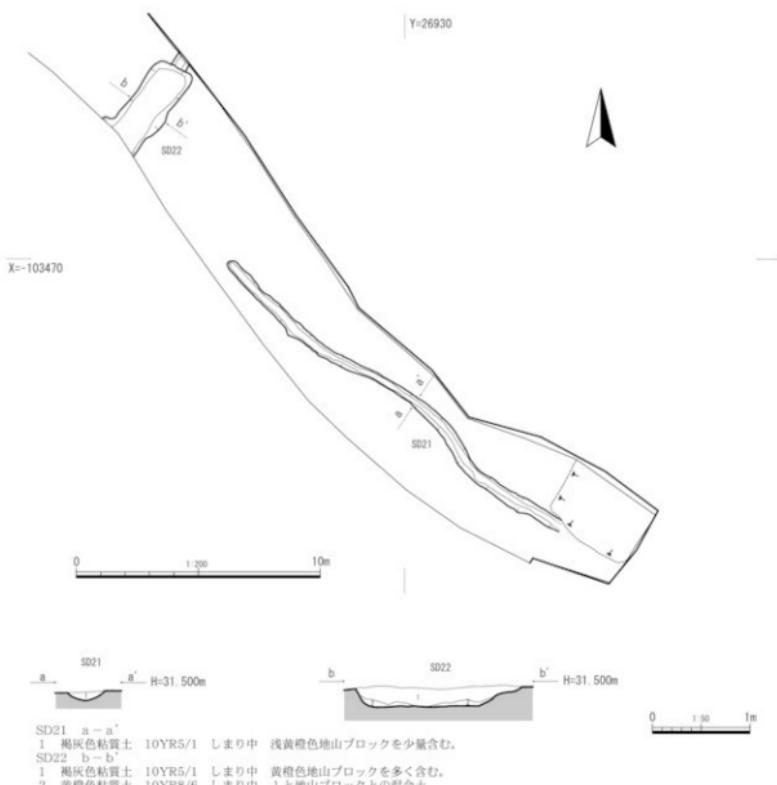
第27図 溝跡5

遺物は、土師器が71.6g、石器が125.8g、金属製品が25.1g、その他近代の陶磁器が出土している。近代遺物は上層など盛土に近い部分からの出土であるため混入と考えられる。したがって、時期は平安時代に属する可能性が高いと推定できる。

S D 08 C区北部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。S D 06、S D 07、S D 11、S D 14と重複しており、新旧関係は、前3者よりは新しく、後1者よりは古い。平面形は逆L字形を呈しており、北東端と西端は削平のためか途中で止まっている。規模は、長さが14.5m、上幅が最大で17mである。深さは確認面から26cmである。堆積土は3つ確認でき、上層から黒褐色、暗褐色、褐灰色を呈するシルト層である。溝跡の方向は西からであり、北東に向かって屈曲して延びる。遺物は土師



第28図 溝跡 6



第29図 溝跡 7

器・須恵器が693.4g、常滑窯産の穢片が17.4g、石器が15.0g出土している。主体は土師器や須恵器であるため、平安時代の後半までの時期に位置づけられるであろう。

S D 09 C 区北部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はないが、北と南側は調査区外へ続くため、全容は不明である。確認できる長さが、一部調査していない範囲も含めて、45m、幅は東肩部が調査区内にあるため、不明である。深さは、確認面から22cmである。堆積土は盛土以外に2つに区分できる。北半の範囲では盛土がのるが、基本的には褐灰色を呈するシルトが堆積している。溝跡の方向は、北東から南北方向で、ほぼ直線的に延びている。底面標高は中央部で高く、南北に低くなっている。遺物は、土師器が8.5gと石器が32.2g出土しているのみである。遺物が少なく時期を判断することは難しい。

S D 10 S D 09と同一遺構と判断したため欠番とする。

S D 11 C 区北側に位置する。遺構の確認はV層上面で行っている。S D 07、S D 08と重複して

あり、新旧関係は両者よりも古いと判断しているが、S D 07とは重複部がわずかであるため難しい。南東端は調査区外につづき、確認された範囲もわずか1.5mほどであるため、全容は不明である。遺物は須恵器が77.3g出土しており、古代に位置づけられる可能性があるが、調査した範囲がせまいため断定できない。

S D 12 S D 07と同一遺構と判断したため欠番とする。

S D 13 C 区北端に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はないが、溝跡の一端が調査区外へとつづくため、全容は不明である。東西方向の溝であるが、東端で北に直角に向きを変えて調査区外へ延びている。西端は途切れしており、削平によるものと推定される。また、西端付近では、流路が二又に分かれすぐに合流する部分がある。調査区内で確認できる規模は、長さが直線距離で約17m、上幅が最大で1.2m、深さが確認面から0.1mである。堆積土は単層であり、褐灰色を呈する粘土質シルトである。遺物は出土しておらず、したがって時期も不明である。

S D 14 C 区北半部の西側に位置する。検出はV層で行っている。北側でS D 08と、南側でS D 07と重複しており、新旧関係は両者よりも新しい。溝跡の方向は、南北方向であり、北端・南端ともに途切れている。断面の浅いとともに考慮すると削平された可能性がある。底面標高は北側の方が高い。規模は、長さが31m、上幅が0.8mである。深さは確認面から16cmである。堆積土は単層で褐灰色を呈する粘質土である。遺物は石器が14.2g出土するが混入であろう。したがって、時期は不明である。

S D 15 C 区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。南側でS D 18と重複しており、新旧関係は、本遺構の方が古い。また、中央部付近は水道管によって部分的に破壊されている。溝跡の方向は南北方向にほぼ直線的であるが、北端付近で西に直角に曲がっている。北半分のところで、途切れるところがあるが、削平によるものと推定される。底面標高をみると、基本的には北側が高く、南側が低くなっている。規模は、調査区内における長さは29m、上幅は最大で1.3mである。深さは確認面から15cm程度と浅い。堆積土は3層に分層でき、1層は暗褐色粘土であり、カクランと考えている。2層は灰黄褐色を呈する粘土質シルト、3層は暗褐色を呈するシルトである。遺物は出土しておらず、したがって時期は不明であるが、S D 07と対照的な溝跡であるため、これと同時期と考えられる。

S D 16 C 区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。南端でS D 17と重複し、それよりも古い。また、北端部は調査区外へ続いたため全容は不明である。確認できる規模は、長さが14.5m、幅が0.6mである。深さは確認面から10cm程度と極めて浅い。堆積土は3層が確認でき、黒褐色や暗褐色を呈するシルト層が堆積している。溝跡の方向は南北方向であり、直線的に延びている。底面標高は、北側が高く、南側が低くなっている。遺物の出土はなく、時期は不明である。S D 05と平行し、規模等も類似することから、あるいは同時期かもしれない。

S D 17 C 区南端に位置する。検出はV層上面で行っている。S D 16、S D 18と重複しており、新旧関係は両者よりも新しい。溝跡の方向は東西から南北方向へ直角に屈曲して延びてあり、西端と南端が調査区外へ続く。底面標高は西側が高く、南側が低くなっている。確認できる範囲は少なく、長さが6m程度である。上幅は最大で60cm、深さは確認面から6cmとかなり浅く、削平が大きく及んでいたと考えられる。堆積土は単層で、黒褐色を呈する粘土質シルトである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

S D 18 C 区南部に位置する。検出はV層上面で行っている。S D 15、S D 18と重複し、新旧関係はS D 15よりも新しく、S D 18よりも古い。溝跡の方向は、S D 17と同様で、東西方向に延び、その

後直角に南へ屈曲するものである。西端と南端は、調査区外へ続いている。一部途切れている範囲があるが、直線的に並ぶことから同一遺構とした。また、一部を水道管の掘方によって破壊されている。確認できる規模は、長さが9m、上幅が最大で2.5mである。深さは確認面から数cm程度とかなり浅い。遺物の出土はなく、時期は不明である。

S D19 B区東部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はなく、南東端は調査区外へ続いている。そのため、遺構の一部しか調査していないため、全容は不明である。確認できる規模は、長さが2m、上幅が0.5mである。深さは確認面から10cmと非常に浅い。堆積土は2層あり、1層は黒褐色を呈するシルト、2層は、にぶい黄橙色の粘土質シルトである。溝跡の方向は北西から南東方向である。出土遺物はなく、したがって時期は不明である。

S D20 B区東端部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はなく、北端は調査区外へ続いている。そのため遺構の一部しか調査していないため、全容は不明である。確認できる規模は、長さが3m、上幅が0.5mである。深さは確認面から5cm程度とかなり浅い。堆積土は単層であり、黒褐色を呈する粘土質シルトが堆積している。溝跡の方向は、北から南方向であり、ほぼ直線的に延びている。出土遺物はなく、時期は不明である。

S D21 D区東部に位置する。検出はV層上面で行っている。他遺構との重複は確認できないが、東端付近でカクランにより壊されている。溝跡の方向は北西からであり、多少彎曲しながらも、南東方向に延びている。北西端で途切れしており、さらに北西に続くかは不明である。確認できる規模は、長さが直線距離で18m、上幅が0.7mである。深さは確認面から10cmである。遺物の出土はなく、したがって時期も不明である。

S D22 区中央部に位置する。検出はV層上面で行っている。他遺構との重複はないが、北端、南端とも調査区外へつづくため全容は不明である。平面形はやや異質で、4.7m以上×1.7mの長方形状を呈する土坑状の遺構に幅70cmの溝が北側に付設される形となる。そのため、溝跡ではない可能性もあるが、ここでは溝跡に含めている。堆積土は2層が確認でき、それぞれ褐灰色、黄橙色を呈する粘土質シルトである。遺物の出土はなく、したがって時期も不明である。

(7) ピット・柱穴

建物跡に復元できなかった柱穴やピット（小穴）と想定される遺構である。柱穴の多くは、建物跡があるA区で検出したものである。A区以外の各調査区にも少数ながら検出しているが、建物跡が存在するような分布ではない。ピットは明確に柱穴跡が確認できないものや、断面の様相が土坑に類似するものである。これら柱穴やピットの詳細については第9表にまとめた。

3 出土遺物

2次調査では、縄文時代、平安時代、平安時代末（12世紀代）、江戸時代の遺物が出土した。遺物の大半は、江戸時代の墓から出土した銭などの金属製品である。また、12世紀代のかわらけや国産陶器類が一定量出土したことには注目される。

縄文時代の遺物としては、土器類や石器がある。いずれも各調査区に散在しており、細片が多く図化できたものは少ない。確実に縄文時代に位置づけられる遺構もない。

平安時代の遺物は、土器類を中心とする。柱穴や溝跡からの出土が多く、包含層からの出土もある。

12世紀の遺物には、かわらけなどの土器や渥美や常滑産の陶器類がある。遺構からの出土であり、平泉の最盛期にこの遺跡の利用があったことが窺い知れる遺物である。

江戸時代の遺物は、大半が墓壙からの出土である。陶磁類は少数であったが、鉄・銅銭やキセル、鏡、火打金などの金属製品が多い。また、燧石も火打金と癒着して出土することから、比較的認識しやすく、一定数出土している。その他人骨や布片など腐食が著しく、同定不能のものがある。

以下では、遺構からまとめて遺物が出土する例が少ないと見られ、種別ごとに一括して記述していく。遺構ごとの遺物出土量については、第3表に記した。

（1）平安時代の土器類

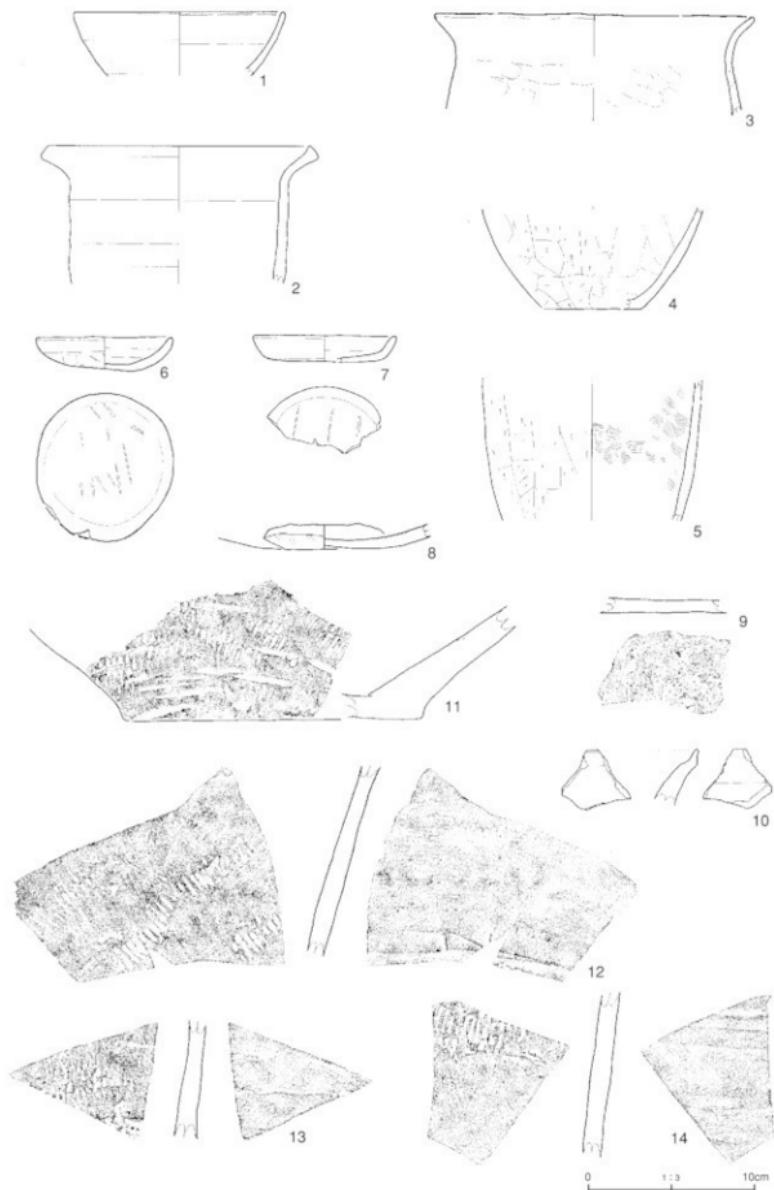
1～5は平安時代の土師器類である。1はロクロ調整の杯で、底部付近を欠損する破片である。ゆるやかに内弯する口縁部をもち、内面に黒色処理は施されない。口径は13cmに復元した。柱穴P105からの出土である。2～5は土師器裏である。2・3は、それぞれロクロ調整、非ロクロ調整の口縁部～体部上半の破片である。4は底部の、5は胴部の破片であり、外面には継ぎのヘラケズリ痕が残る。2～4はSK05から、5は柱穴P123からの出土である。

6～8は、手づくねかわらけである。6・7は小皿、8は大皿で、6のみ完形である。前者は口径が8cm前後であり、ほぼ同じ大きさで、外面に指頭圧痕が、底面にはスノコ痕が残る。8は残存部の大きさから、大皿の底部片と考えられる。底部にはスノコ痕が残される。6はSK01から、7・8はSK03からの出土である。

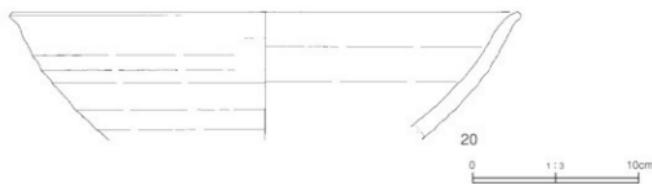
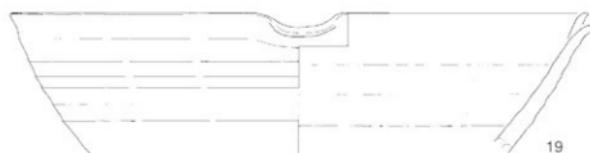
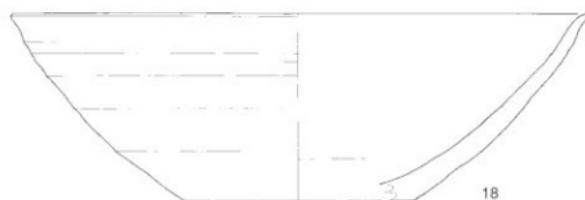
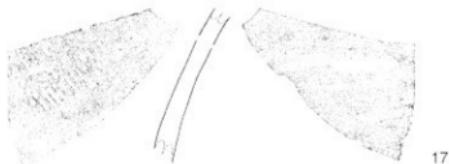
9～20は、国産陶器類である。いずれも破片資料であり、完形のものは無い。図上復元できる個体もすくないが、12世紀代に位置づけられる資料であるため、細片でも掲載している。

9・10は渥美産の壺である。9は底部片、10は口縁部片である。9は砂粒を含まない緻密な胎土で、やや焼きがあまく、軟質である。破片の厚さ等から壺の底部と考えられる。SK01からの出土である。10は、壺の口縁端部片である。器壁はよく焼成されており、端部から内面にかけて自然釉が薄くかかる。SK03からの出土である。11～14は、渥美窯産の大甕である。11は底部片で、外面には格子状文の押印が散在的に施される。12～14は大甕の胴部片である。12も縦長格子状文の押印が3列施されている。13・14にも同様の押印が施されているが、方向は不明である。いずれもSK01からの出土である。15・16は常滑窯産大甕の胴部片である。いずれも細片であり、詳細は不明であるが、両者とも外面に自然釉がかかる。16の自然釉は濃緑色を呈しており、比較的厚くかかる。15はSD08から、16はA区のIII層からの出土である。この層からはほかに、17の渥美の大甕片が出土している。他と同様に格子状文が施される。

18～20は、渥美窯産の片口鉢である。18は、口縁部から底部までの破片である。砂粒を含まない緻密な胎土であり、やや軟質の焼成である。釉薬は施されていない。内底面付近は強く摩耗しており、



第30図 土器類1



第31図 土器類2

捏ね鉢として利用されていたと推定される。また、外面にはススが付着している。19は口縁部から胴上位の破片である。内面の下位はよく摩耗している。外面にはススが付着している。20も胴上位の破片である。これらは接合箇所がないものの同一個体の可能性があるが、個別に図示した。いずれもS K01からの出土である。国産陶器類は、すべて12世紀に位置づけられ、かわらけの出土とあわせて、遺跡の使用年代の一端を表している。

21・22は近世の磁器類である。21は肥前産染付の小碗で、ほぼ完形である。口径が7.8cm、器高が4.4cmである。高台置付けは露胎している。文様は外面にのみ染付で草花文が施される。S T03からの出土である。22は肥前産染付の皿である。小破片のため詳細は不明であるが、外面には唐草文が施され、内面にも文様が見えるが詳細は不明である。S D03からの出土である。いずれも18世紀～19世紀にかけて（大橋編年IV～V期）に位置づけられる。

（2）金属製品

金属製品はほとんどが近世墓から出土している。そのうち、大半を占めるのは、銅錢や鉄錢などの錢貨類、棺に使用したと考えられる鉄釘である。そのほかの鉄製品には、刀子、縁金具、火打金があり、銅製品には、キセル、鏡があるが少数である。

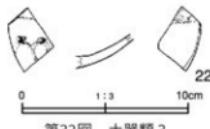
刃物類 23～28は、刀子や剃刀（髪剃）などの刃物類である。23は茎部片、24・25は刃部片である。いずれも刀子片と考えられるが、破片が小さいため、他の刃物類かもしれない。26・27は剃刀と考えられる。関部が大きく、茎が細いため剃刀と判断している。これらは、同時に精査したため、S T07～09、11からの出土遺物を一括して取り上げている。28は刀子片と想定しているが、刃部長が長く他の部品の可能性がある。S T12からも出土である。

縁金具 29は縁金具とした。大半を欠損しているが、幅のうち上から1/3のあたりで鈍角に屈曲していることから、縁にあてた金具と想定した。S T12からの出土である。

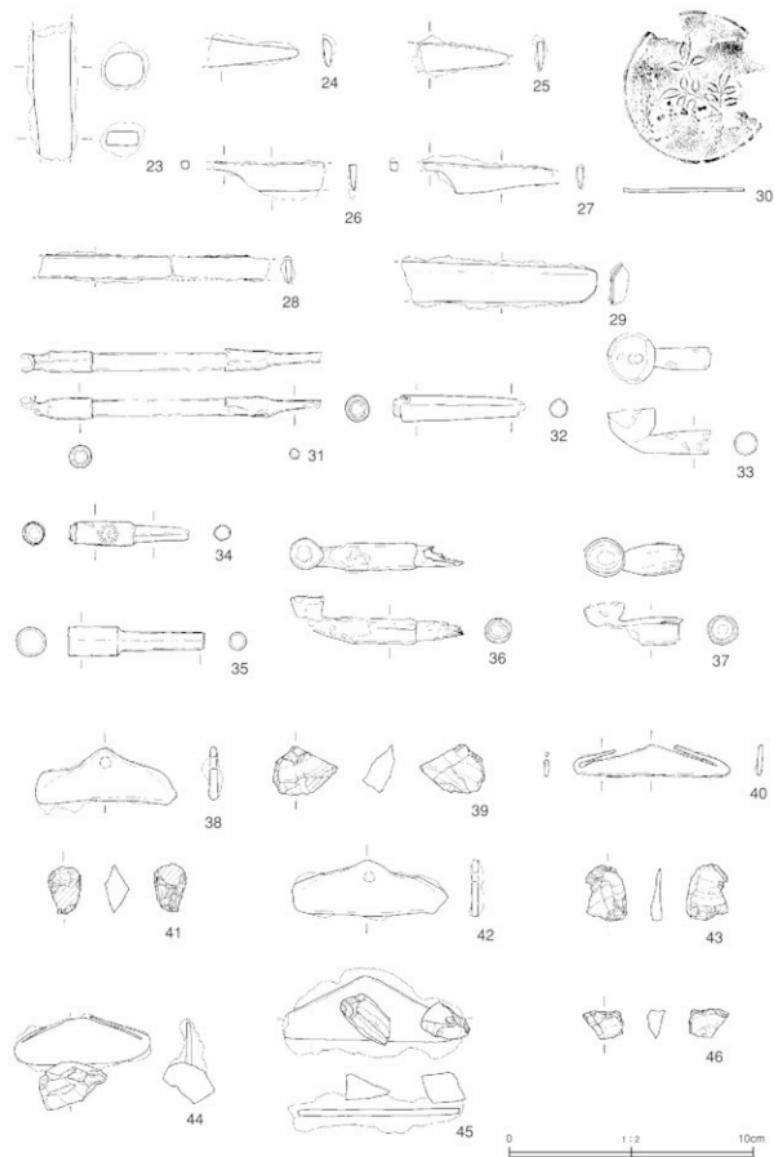
鏡 30は銅鏡である。柄はつかないので、直径6.3cmの小型品である。大きさから懐中鏡と考えられる。背面には南天（あるいは千両か）文が施され、「人見藤原重次」と銘がある。S D09からの出土である。

キセル 31～37は、キセルである。キセルは墓壙から破片も含めて15点出土している。そのうち図化したのが7点である。31は、雁首から羅宇、吸口まで揃っている唯一のもので、羅宇は竹製である。雁首の一部は欠損している。S T11からの出土である。32は吸口のみで、一部羅宇が残存している。S T15からの出土である。33は雁首のみであり、残存状況は悪い。S T20からの出土である。34・35は吸口部、36は雁首部である。いずれも銅製である。34は吸口部には文様が施されている。36の雁首は破損箇所が多いが、羅宇が一部に残存している。S T21からの出土である。すくなくとも2本のキセルが副葬されている。37も雁首である。内部に羅宇が一部残存している。S T23からの出土である。これらは雁首の形状からみるとすべて同時期であり、18～19世紀に位置づけられる形態である。

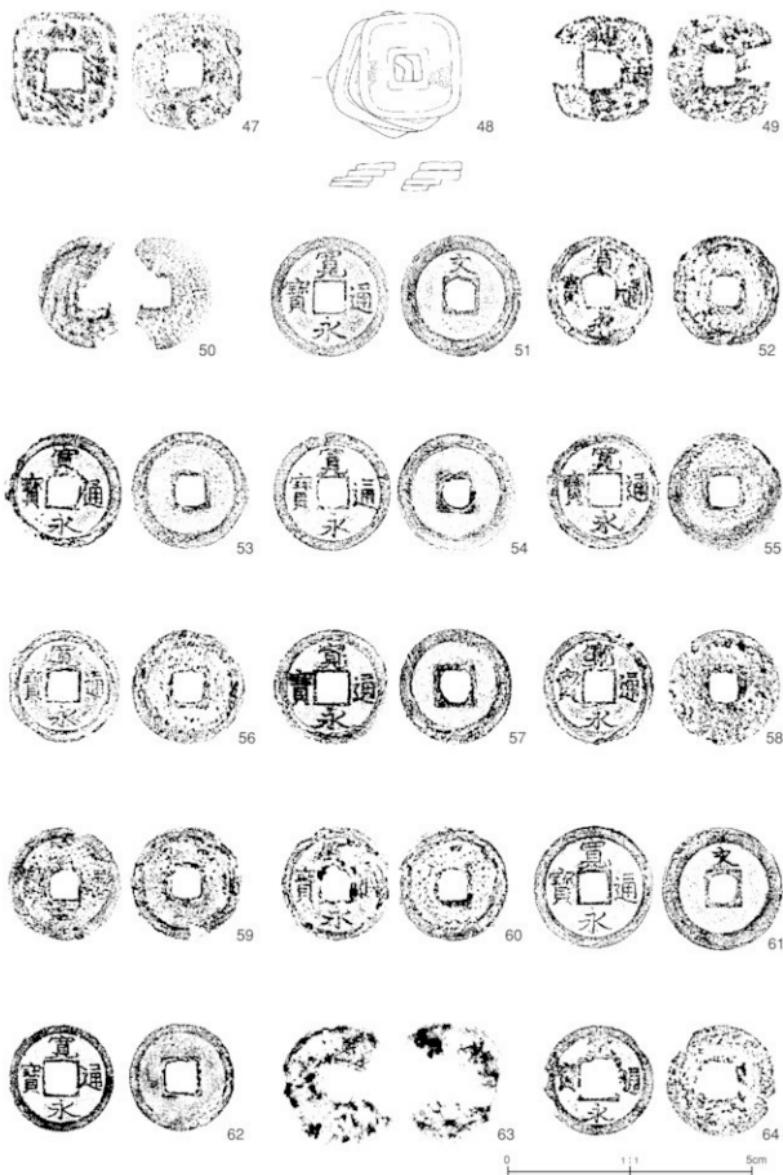
火打石・火打金 30～46は、火打金および火打石である。前者は5点が、後者は8点が出土している（うち7点を図化）。火打石のうち2点は火打金に付着して出土している。38・40・42・44・45は火打金である。形態はいずれも三角形型を呈している。鋭脛が激しい個体が多いため、正確な形状は不明な点が残るが、おおむね縁（火打石に打ち付ける側）は直線的であり、根本の方に折り曲げら



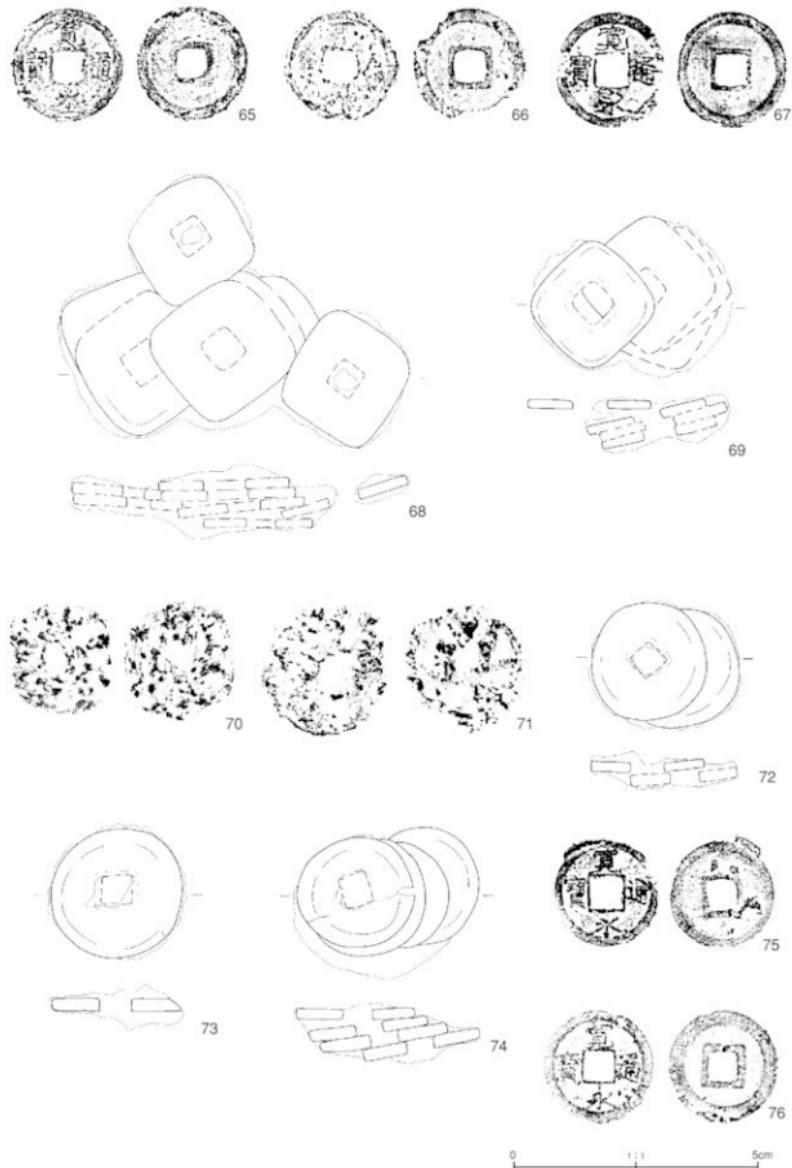
第32図 土器類3



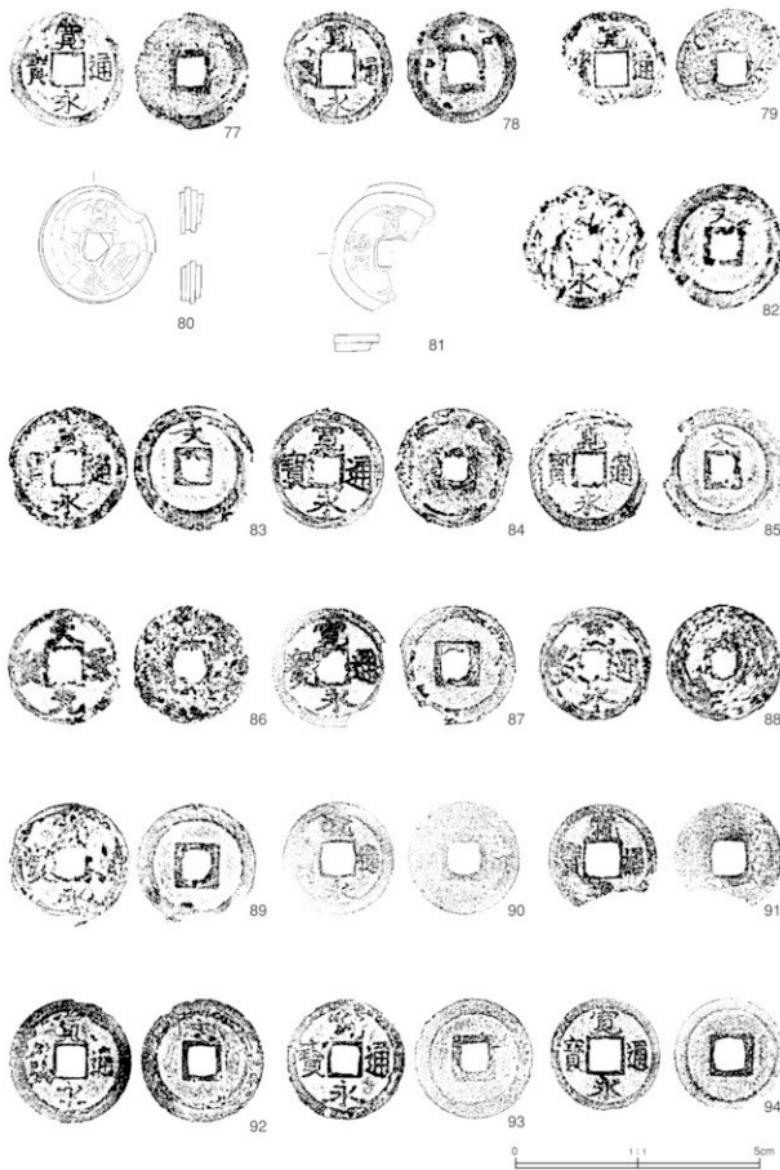
第33図 金属製品 1



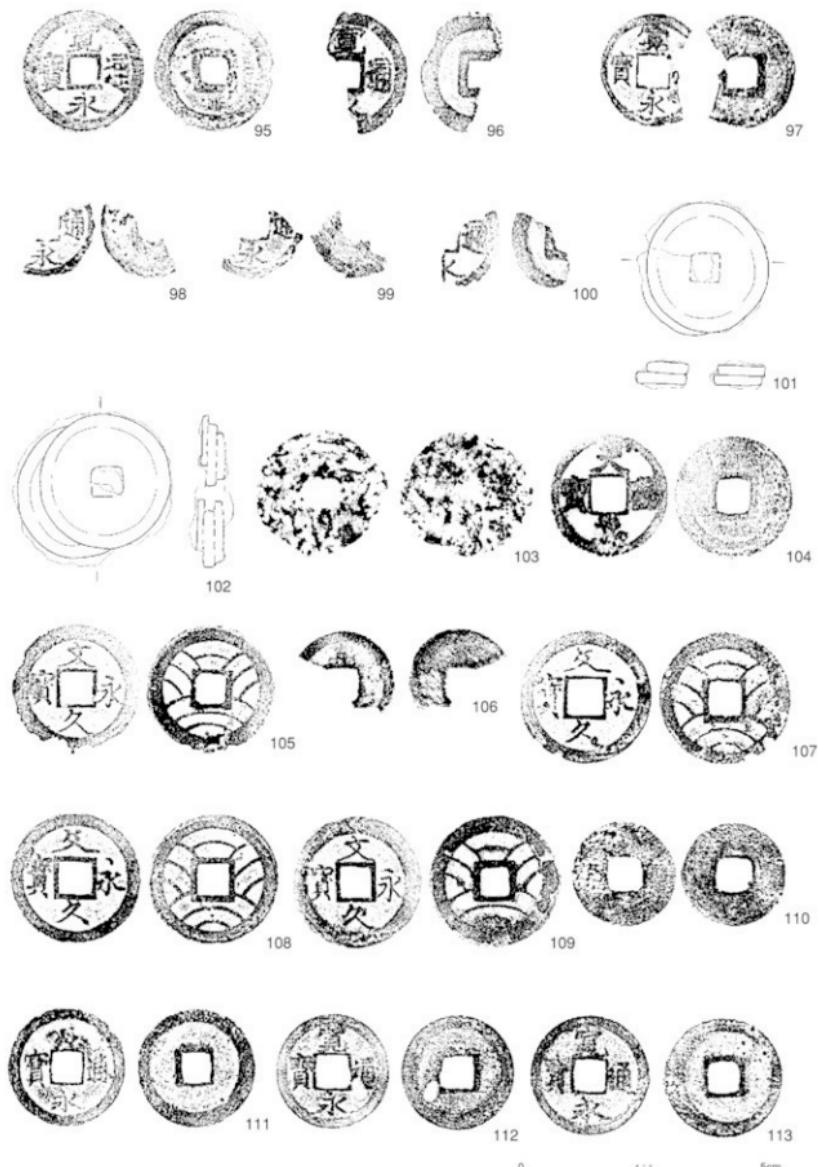
第34図 金属製品 2



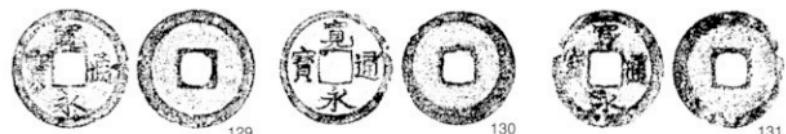
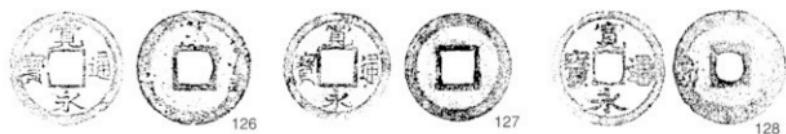
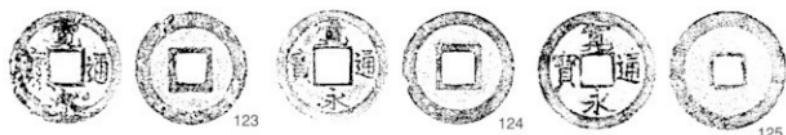
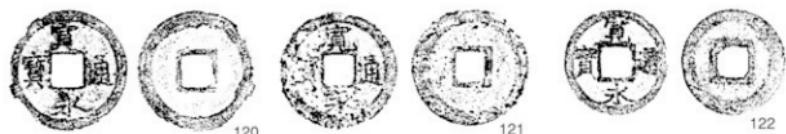
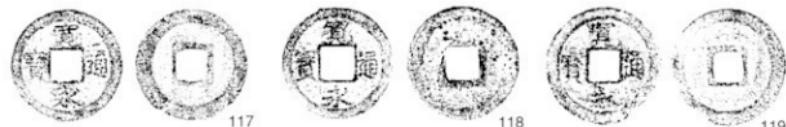
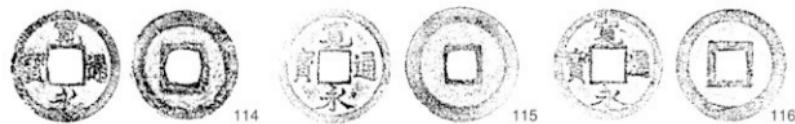
第35図 金属製品 3



第36図 金属製品4

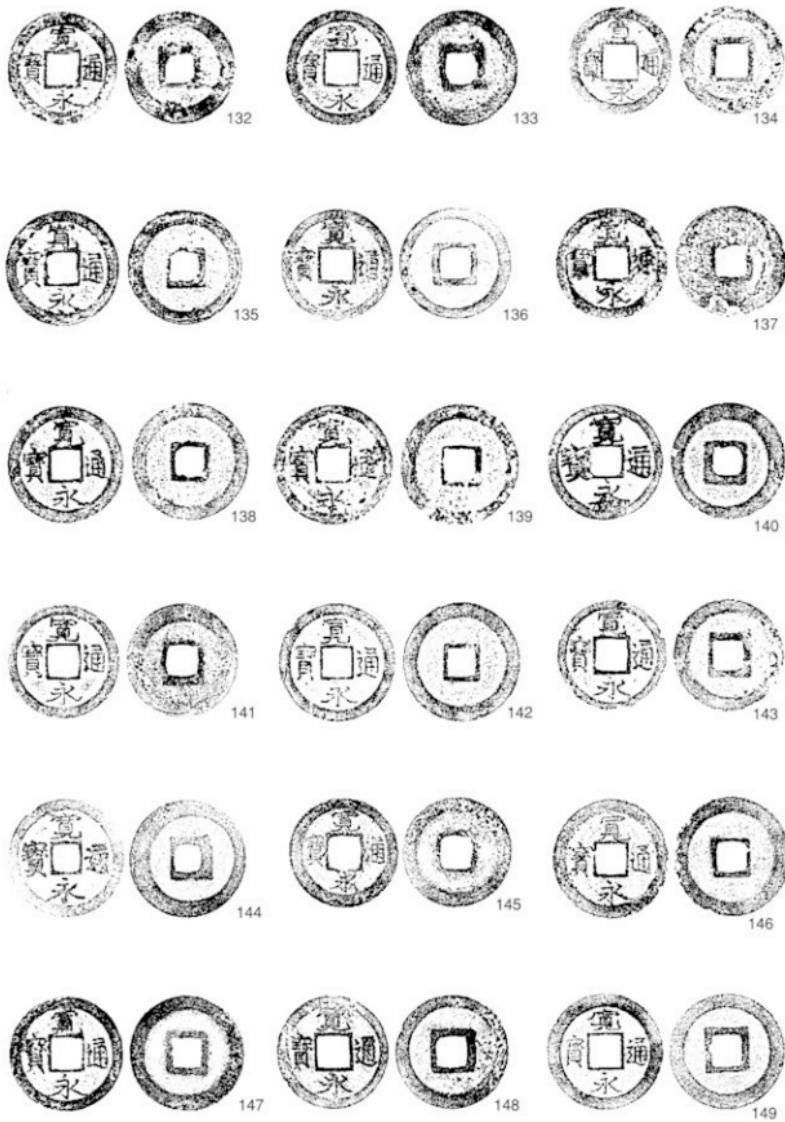


第37図 金属製品 5



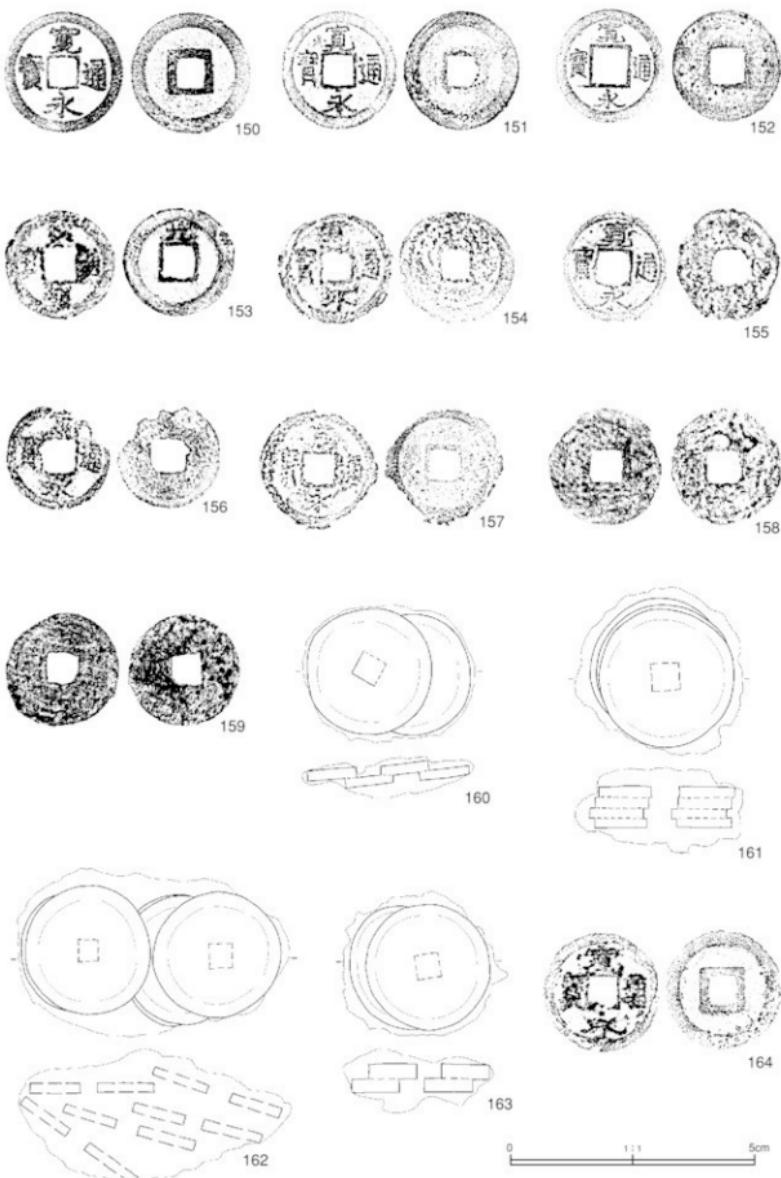
0 1cm 5cm

第38図 金属製品 6

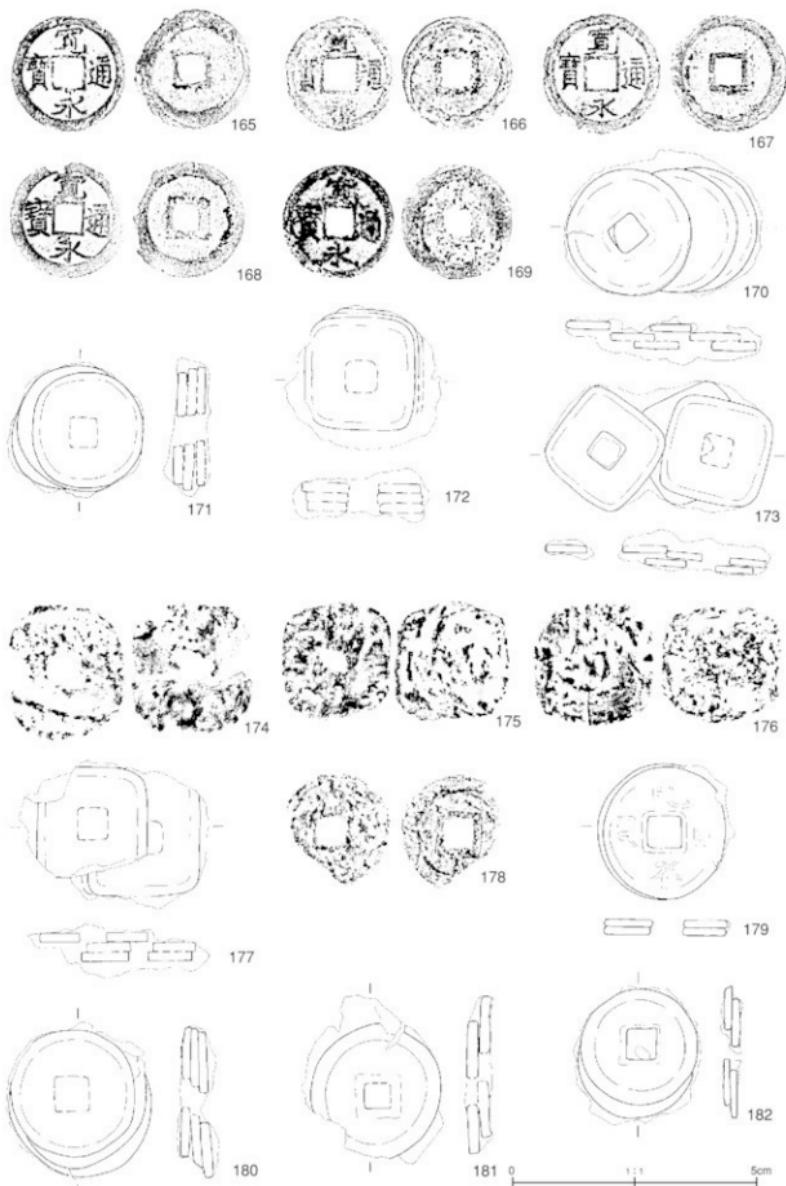


0 1cm 5cm

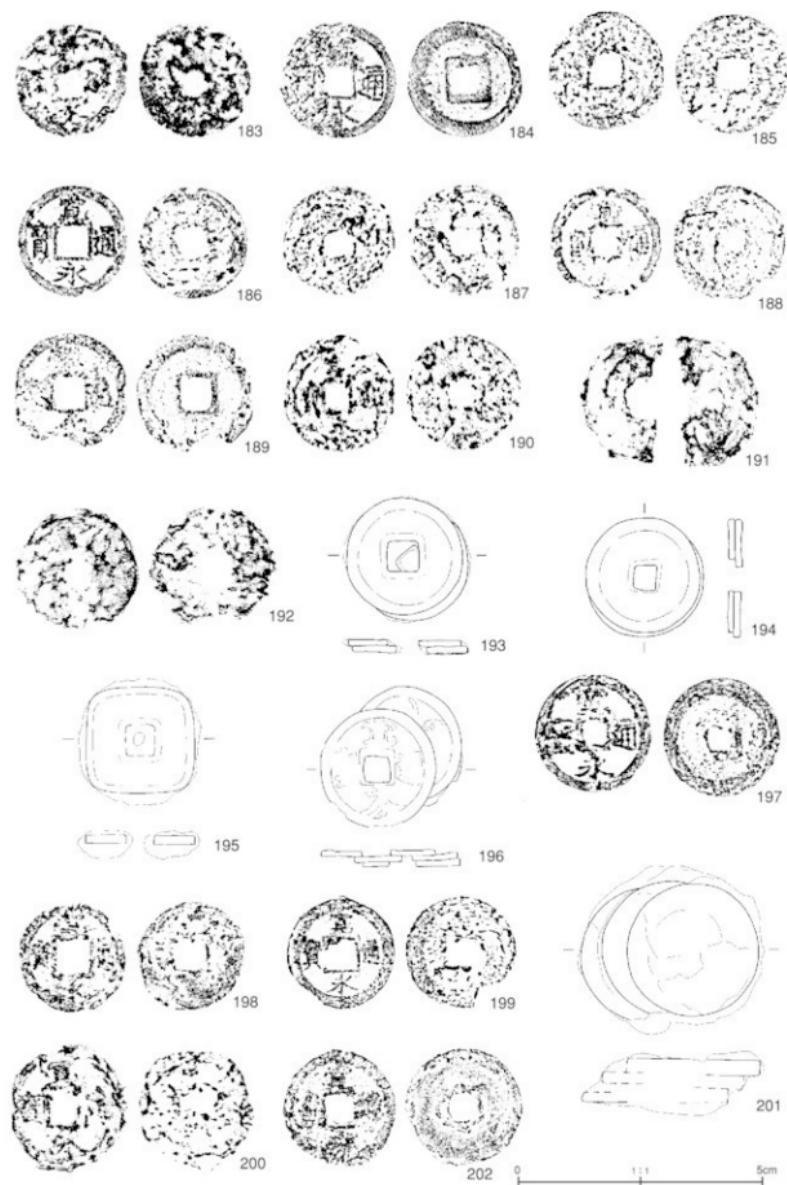
第39図 金属製品 7



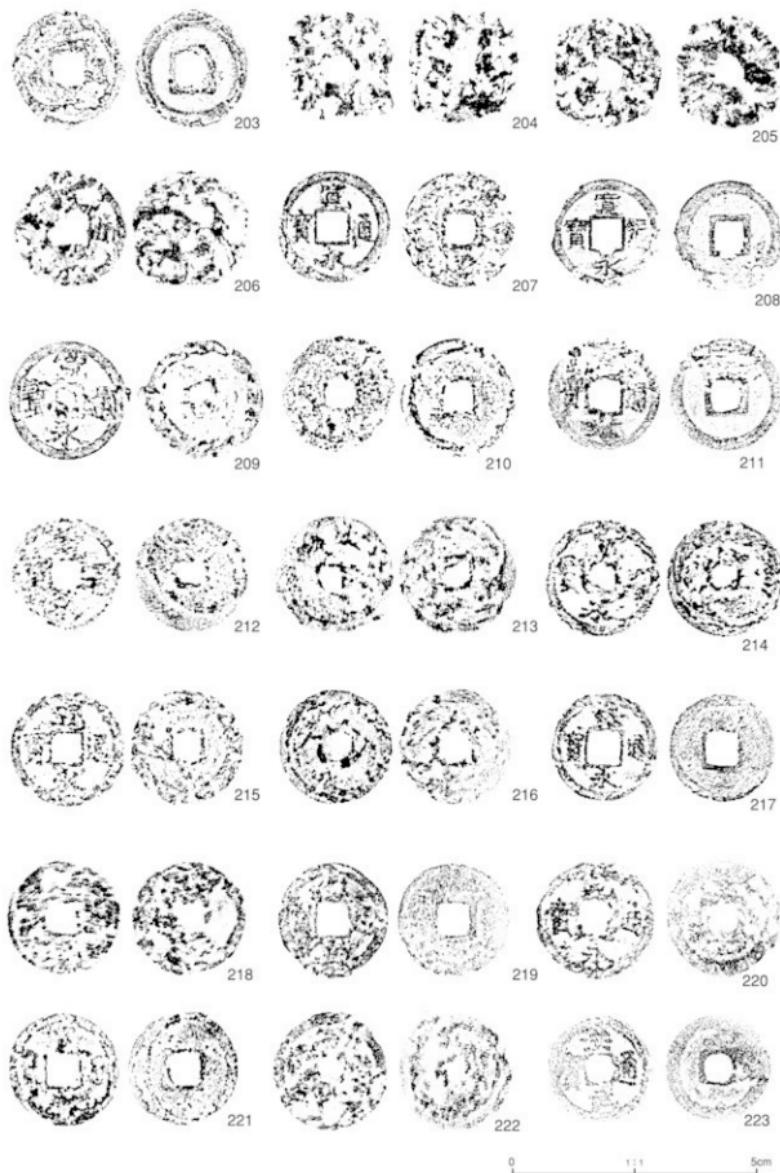
第40図 金属製品 8



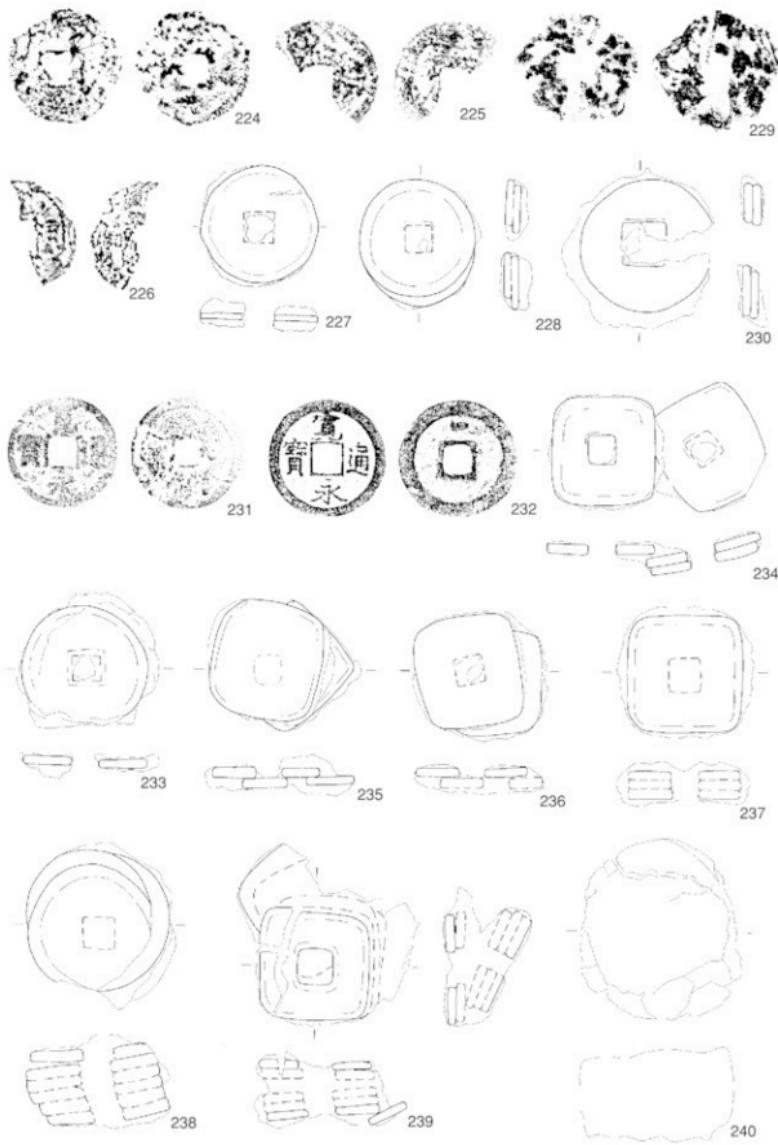
第41図 金属製品 9



第42図 金属製品10

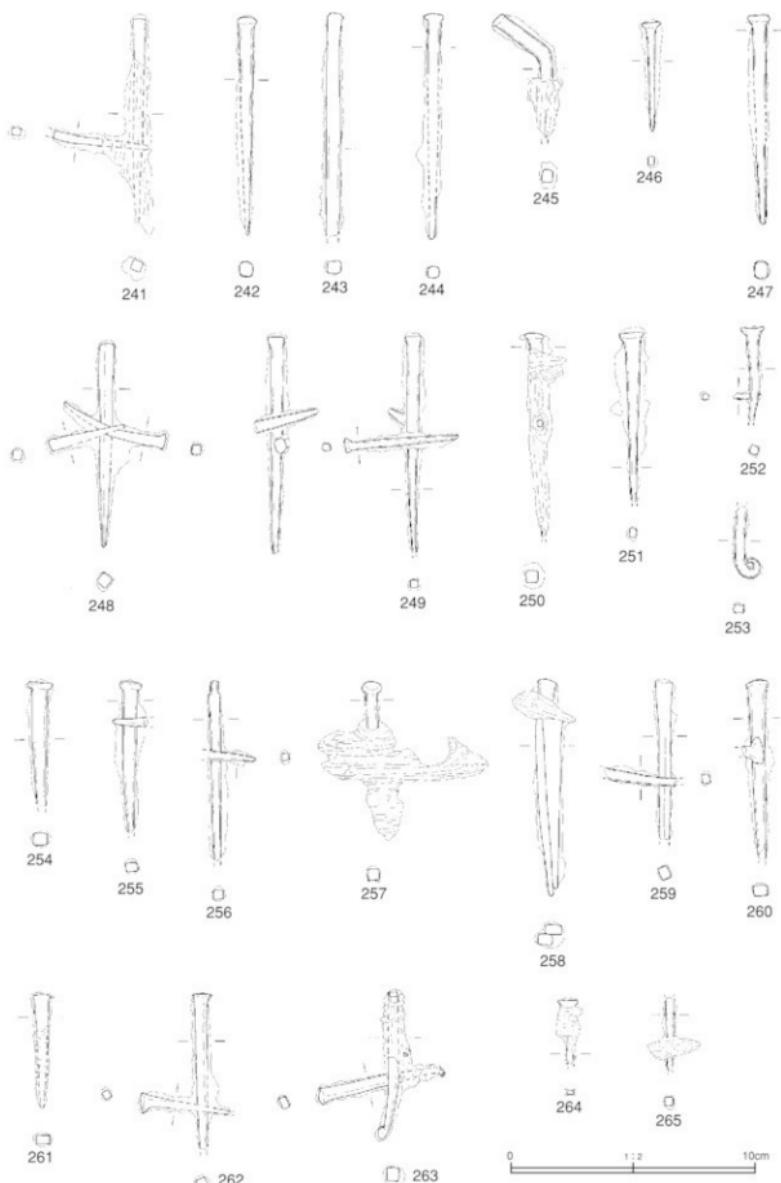


第43図 金属製品11

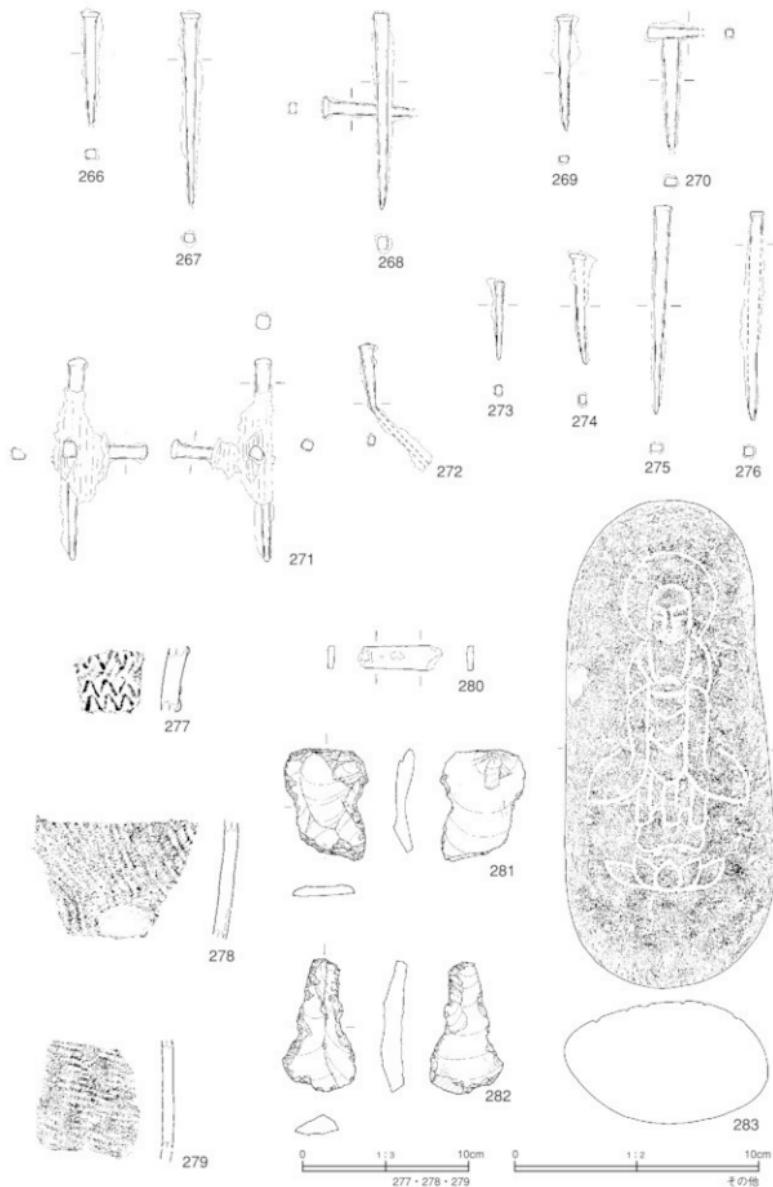


第44図 金属製品12

0 1:1 5cm



第45図 金属製品13



第46図 金属製品14・縄文土器・石器・石製品

れている。頂点の位置に穴が穿たれているものもある（38・42）。39・41・43・46は火打ち石であり、44・45の火打金に付着している3点も石も火打ち石である。これらは単独の出土では火打ち石と認定することは難しいが、火打金に付着して出土することや、墓壙内から出土することとあわせて、単独出土でも火打ち石と推定している。石質を鑑定したものは4点であるが、珪質頁岩と玉隨（赤メノウ）であり、他の火打ち石も同様と考えられる。いずれも火打ち石に適した素材である。

銭貨 銭貨には、大きく鉄銭と銅銭の2種類がある。複数が固着しているものは可能な限り剥離を試みたが、固まりのまま残るものが多く、とくに鉄銭の場合は原型をとどめず誘膨れが激しいもののが多かった。そのため枚数は正確には不明である。鉄銭は、49枚以上が、銅銭は146枚以上が出土している。いずれも墓壙からの出土で、最多はS T11で、銅銭が49点出土している。鉄銭は、銭名を読み取れる個体が非常に少なく、不明な点も多い。外形の違いのみある程度判明し、撫角形と円形の2種類が確認できる。このうち前者は、地域性から仙臺通寶と推定できる。後者は179や200などからわずかに寛永通宝の可能性がある。すべての鉄銭の銭種が判別できるわけではないが、撫角形は仙臺通寶に、円形のものは寛永通寶に同定できる可能性がある。

銅銭の銭種には、寛永通寶が、文久永寶、洪武通宝、天聖元寶、無文銭がある。銅貨の寛永通宝は12枚が確認でき、銅銭のうち88%以上を占める。寛永通寶はさらに、いわゆる古寛永が12枚、「文錢」が5枚に分けられる。残りがいわゆる3期の寛永通寶となる。S T08やS T11には古寛永が比較的多く副葬される傾向にある。とくに前者には文錢や天聖元寶も共伴し、3期以降の寛永通寶が共伴しないことから、墓壙群のなかでも比較的古い段階（17世紀代）に位置づけられよう。銭貨でみると、墓壙群の下限は、文久永寶（初鑄1863～1865カ）の19世紀後半頃であろう。また、渡来銭には、洪武通宝、天聖元寶などあるが、模製銭や長崎貿易銭の可能性がある。

鉄釘 合計で459本以上が出土している。そのうち依存状態の良いものを中心図化し、掲載している。いずれも断面が四角形を呈するもので、丸釘はない。先端は尖り、頭部はL字形に折れ曲がっている。木質が付着するものが多く、墓壙内からの出土ということもあり、棺を固定するために使用されていたと推定される。ひとつの墓壙から85点も出土することがあるなど、棺は釘を多用するような構造であったと想定される。

（3）繩文土器

繩文土器は、土坑や遺構外を中心に出土するが非常に少ない。合計で238.2g程度である。確実に繩文時代に位置づけられる遺構も少ないこともあり、今回の調査区では稀少な遺物となる。

277は深鉢胴部片であり、細粘土紐を鋸歯状に添付している。大木5式に相当するかもしれない。S D01からの出土である。278・279はA区からの出土である。地文のみであり、型式は不明である。

（4）石器・石製品

石器や石製品も少なく、4点のみ図化し、掲載している。

281・282はスクレイバー類である。281はS D07溝から、282は遺構外からの出土である。繩文土器と同様に石器の出土も少ない。280はS T21からの出土で、石製の飾り具の一部と想定されるが、詳細は不明である。青銅製品の可能性もあるが、デイサイトであるとの鑑定をうけたため石製品に含めている。283は、墓標と考えられるものである。S T21から出土しており、地蔵尊が陰刻されている。蓮形の台座の上に立つ立像である。光背も描かれている。墓壙自体も小型であり、あるいは小児が埋葬されていた可能性がある。そのほか、墓石としたものが数点ある。いずれも、墓壙上や埋土に含ま

れていた長さ20cm～40cm程度の楕円形状の礫である。283を除き、加工痕が認められなかったため、図化していない。

V 3次調査の成果

1 概 要

概要 調査は、2カ年にわたって行われた（2次・3次調査）。3次調査は経営体育成基盤事業に伴う1,260m²を対象としている。東日本大震災後に調査は行われたため、基準杭が2次調査とずれてしまっている。そのため隣接地点にもかかわらず、整合性はとれていない。

調査区は2次調査区の隣接地点を中心であり、これをG区とした（調査時にはA区と呼称）。さらに、南側に2箇所の細長い調査区がある（H・I区：調査時はB・C区と呼称）。3次調査も、ほ場整備工事によって道路や水路となる範囲が多く、一部に切土後田面（G区）となる。そのため、ほとんどが細長い調査区となっている。今回検出した遺構もこの区域に集中する。そのほかの調査区からは、いくつか遺構は検出されているが、調査区外に広がっており、調査区内で完結する遺構は少ない。

遺構 3次調査では、G区から掘立柱建物を中心とした遺構が、H区から井戸や溝跡が発見されている。I区からは遺構の発見はみられなかった。

G区の掘立柱建物は2次調査からの続きであり、この範囲からはあわせて10棟前後の建物跡が存在することになる。また、今回調査を行った建物跡は12世紀に位置づけられるものも含まれている。2次調査とあわせて、12世紀の平泉藤原氏の時代の痕跡が発見されたことは大きな成果のひとつといえる。3次調査で検出した遺構をまとめると第10表の通りである。

遺物 遺物は総計0.36kgのみ出土している（第11表）。土師器、須恵器、かわらけ、縄文土器、近世・近代陶磁器、石器・石製品などが少量出土しているのみである。

第10表 検出遺構一覧表

遺構名	数量	時期
掘立柱建物跡	5	12世紀 5、不明 1
土坑	2	不明 2
溝跡	4	不明 4
井戸跡	1	江戸 1

第11表 出土遺物総重量・内訳

種別	縄文土器	土師器	須恵器	国産陶器	かわらけ	石器・石製品	近世陶器	近代磁器	金属製品	その他	合計(g)
重量	3.3	8.2	35.3	0.0	48.9	22.4	15.7	91.3	0.0	138.6	363.5

2 遺構

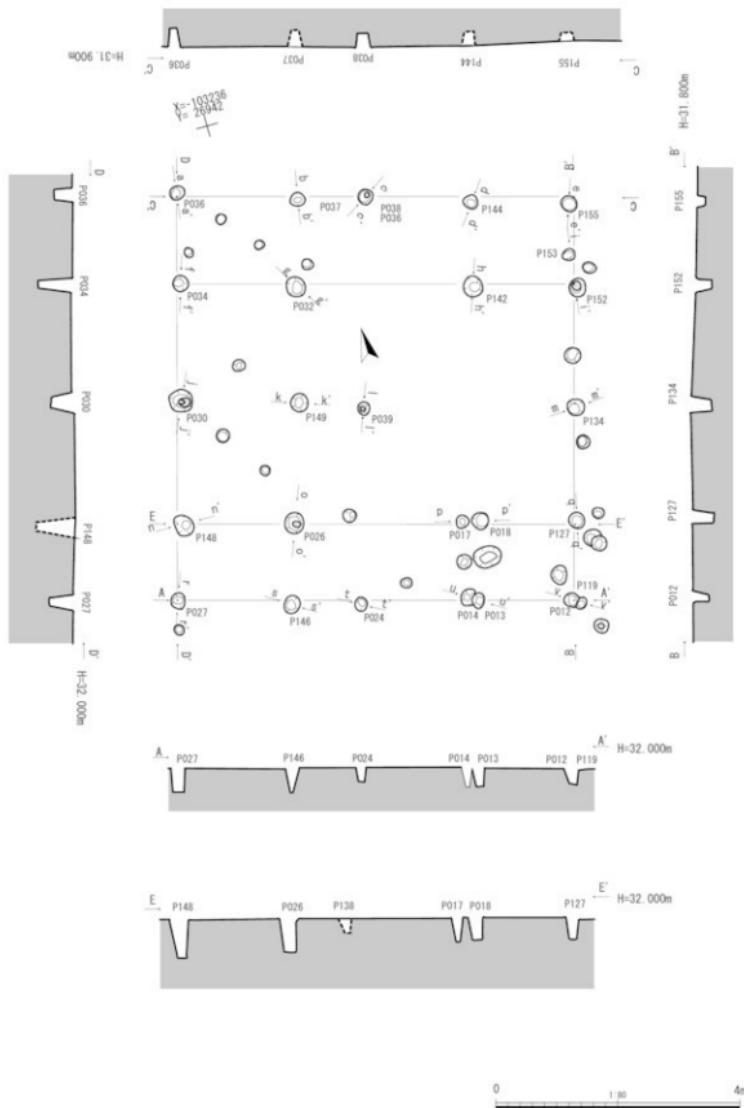
(1) 掘立柱建物跡

G～H区にかけて存在する。柱穴はG区のほかH区にも若干検出されることから、この範囲にも建物があった可能性がある。建物の時期は、2次調査と同様に、古代のものと近世のものに大別できそうであるが、遺物があまり明確に伴わないので時期不明としたものが多い。なお、建物方位の共通性が、各建物が同時期に併存した根拠の一つとなるため、南北棟、東西棟に問わらず、北に対する東西方向への振れ幅を建物方位として示す。

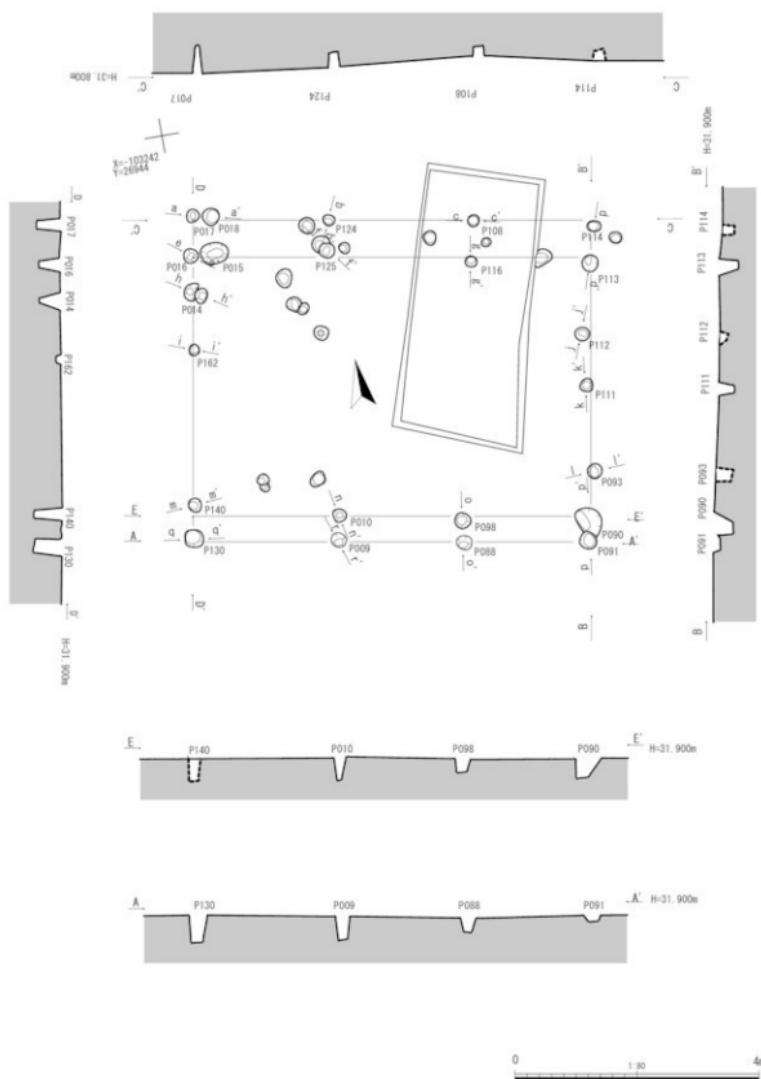
S B01 G区北側に位置する。桁行4間×梁行4間の掘立柱建物跡と復元した。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。S B02と構成する柱穴（P013とP014）が重複している。新旧関係は断面図からは判断が難しいが、本遺構（P013）の方が新しい可能性がある。平面規模は、桁行が6.5m、梁行が6.5mと桁行と梁行が同じである。したがって、平面形は正方形を呈する。そのため、平面形式の復元は難しいが、柱の配置や柱間寸法を勘案し、南北方向を梁行とし、桁行3間×梁行2間の身舎に、庇が南北2面付設される構造を想定している。ただし、身舎内部には、梁方向、桁方向に柱筋が一応通る柱穴が2個あることから、1個の柱穴を確認できないものの総柱構造となる可能性もある。床面積は、42.25m²である。方位はN-16°～Eの東西棟である。柱間寸法は、桁行が西から1.9m、1.2m、1.8m、1.6m、梁行が、北から1.96m、1.96mである。おおむね近似値であるが、寸法は揃っていない。庇の出は北庇が1.42m、南庇が1.2mである。各柱堀方（以下柱穴とする）の平面形は円形～橢円形状を呈する。柱穴掘り方の規模は、身舎と庇で異なっている。身舎柱穴の長軸は26～40cm、短軸が22～36cmであり、庇柱穴では、長軸23～30cm、短軸18～25cmとなり、庇柱穴の方がやや小さい。身舎柱穴の深さは確認面から30～60cm前後とやや深く、庇柱穴の深さは8～42cmとやや浅い。深さにおいても両者で異なっている。柱穴の深さ、ひいては柱の高さの違いが看取できる。遺物はP148からかわらけ片が出土しているのみである。遺物から判断すると、この建物の時期は12世紀後半を中心とするであろう。

S B02 G区北側に位置する。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。桁行3間×梁行4間の掘立柱建物跡と復元した。S B01を構成する柱穴（P013とP014）が重複している。新旧関係は断面図からは判断が難しいが、本遺構（P014）の方が古い可能性がある。平面規模は、桁行が6.5m、梁行が5.3mであり、床面積は34.5m²である。平面形式は、桁行3間×梁行2間の身舎に、庇（あるいは下屋状の施設）が南北2面付設される構造を想定している。梁行には半間ずつ柱穴があり、見かけ上4間となる。方位はN-10°～Eの東西棟である。柱間寸法は、桁行が西から2.2m、2.4m、1.9m、梁行が、北から2.1m（1.3m+0.8m）、2.2m（1.4m+0.8m）である。おおむね近似値であるが、寸法は揃っていない。庇の出は北庇が0.6m、南庇が東側で0.4m、西側で0.6mである。柱筋は梁行桁行が直交しないものが多く、通りも悪い。柱間寸法にもばらつきが見られるなど規格性に乏しい建物である。各柱穴の平面形は円形～橢円形状を呈する。柱穴の規模は、長軸は20～53cm、短軸が17～35cmであり、庇と身舎で規模の違いはない。柱穴の深さは確認面から10～42cm前後である。柱穴の底面標高もほぼ揃っているが、梁行の半間ずつにある柱穴についてはやや浅い。遺物はP090から土師器片が出土しているのみである。遺物や重複から判断すると、遺構の時期は平安時代（12世紀後半まで含む）の間にあさまるであろう。

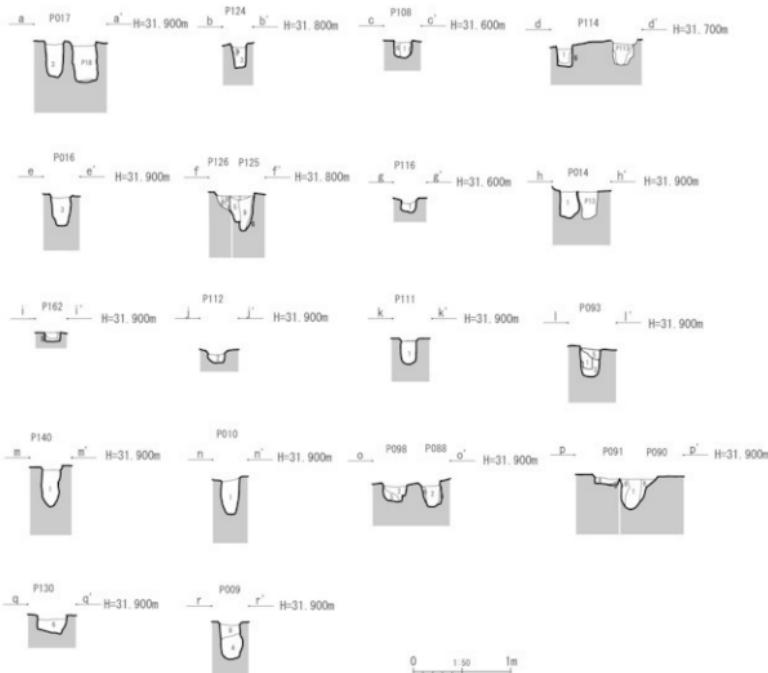
S B03 G区北側に位置する。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。桁行4間×梁行4間の掘立柱建物跡と復元した。他遺構との重複はないが、北側に隣接してS B02がある。



第47図 SB01平面図

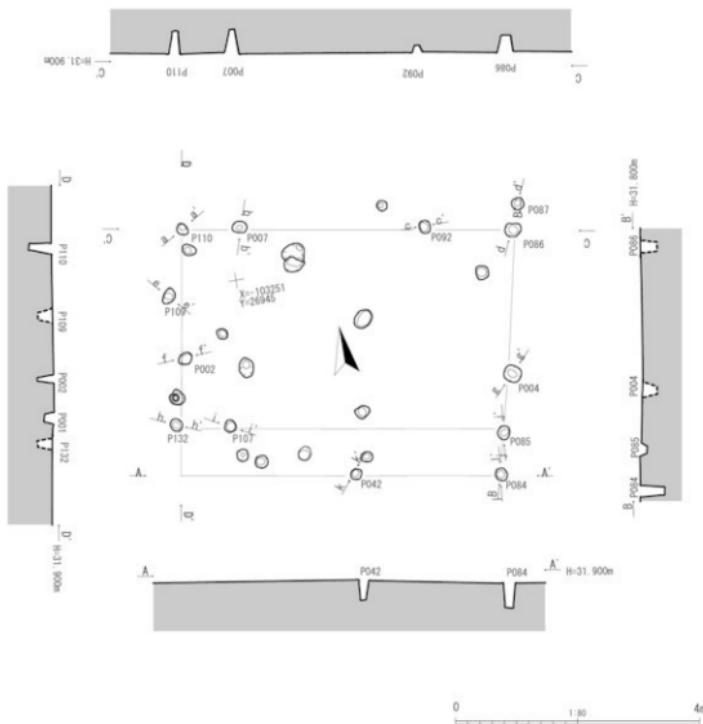


第49図 S B02平面図



[SB02]

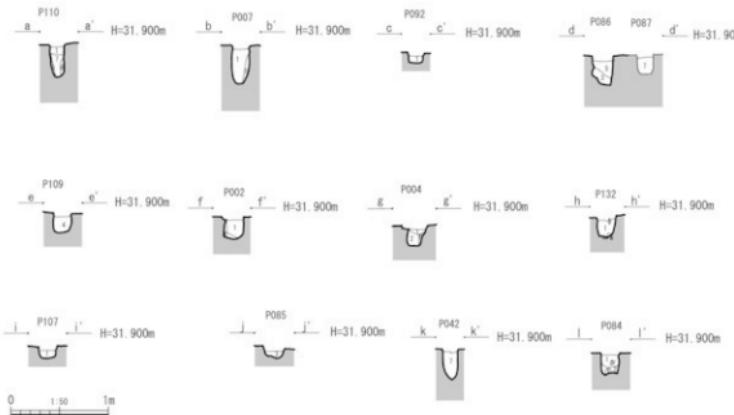
- | | | | | | |
|-------|--------------|---|--------|---------|---|
| P017 | (a - a') | 3 | 褐色シルト | 10YR4/4 | 明黄褐色(10YR6/6)ブロック(φ5cm幅)を含む |
| P124 | (b - b') | 3 | 褐色シルト | 10YR4/4 | 明黄褐色(10YR6/6)ブロック(φ5cm幅)を含む |
| P108 | (c - c') | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 暗褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む |
| | | 6 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色シルトの混土 |
| P114 | P113(d - d') | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む |
| | | 6 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色シルトの混土 |
| | | 7 | 黒褐色シルト | 10YR2/3 | 柱状痕跡 |
| P016 | e - e' | 3 | 褐色シルト | 10YR4/4 | 明黄褐色(10YR6/6)ブロック(φ5cm幅)を含む。 |
| P125 | f - f' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 暗褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| | | 5 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色(10YR4/1)シルトブロック(φ1cm以下)との混土。 |
| | | 6 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色シルトの混土。 |
| | | 9 | 暗褐色シルト | 10YR3/4 | 褐色シルト(10YR4/4)シルトブロック(φ5cm)を少量含む。 |
| P116 | g - g' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| P014h | - h' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| P111k | - k' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| P140m | - m' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| P010 | n - n' | 1 | 黑褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| P098 | - P088o - o' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| | | 2 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| | | 5 | 黃褐色シルト | 10YR4/1 | 黃褐色(10YR7/8)シルトブロック(φ5~10cm)との混土。 |
| | | 6 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐灰色(10YR4/8)暗褐色シルトの混土。 |
| P090 | P091p - p' | 1 | 黒褐色シルト | 10YR3/1 | 黃褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。 |
| | | 6 | 黃褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色シルトの混土。 |
| | | 4 | 暗褐色シルト | 10YR3/5 | 褐色シルト(10YR4/3)シルトブロック(φ1cm以下)との混土。 |
| | | 5 | 暗褐色シルト | 10YR7/8 | 暗褐色シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトブロック(φ1cm以下)との混土。 |
| P130 | q - q' | 6 | 暗褐色シルト | 10YR7/8 | 褐色シルトと黄褐色シルトの混土。 |
| P009 | r - r' | 4 | 暗褐色シルト | 10YR2/4 | 褐色シルト(10YR6/6)ブロックとの混土。 |
| | | 8 | 暗褐色シルト | 10YR4/6 | 褐色(10YR2/3)ワッカ(φ5cm幅)を含む。 |



第51図 SB03平面図

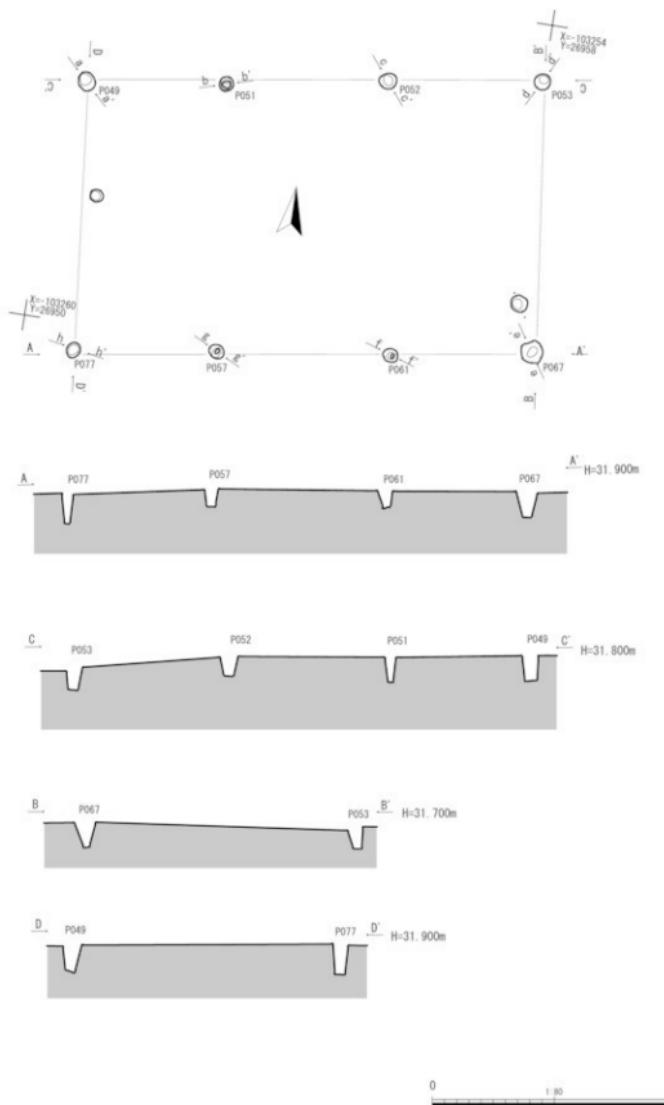
平面規模は、桁行が5.3m、梁行が4.0mであり、床面積は21.2m²である。平面形式は、桁行4間×梁行3間の身舎に、南に庇（あるいは下屋状の施設）がつく構造を想定している。梁行は西に3間、東に2間とばらつきがある。北や南側柱列においても失われた柱穴がいくつがあるため、異なる復元も可能となろう。方位は西侧柱列を基準にするとN-10°-Eの東西棟となり、SB02と同一方向である。柱間寸法は、桁行が北側柱列を基準とすると、西から1.0m、1.9m、1.1m、1.5m、梁行が、西側柱列を基準とすると、北から1.1mの等間である。ただし、桁行の南側柱列や、梁行の東側柱列では対応する寸法にはならない。庇の出は0.7mである。柱間寸法のばらつきや、柱筋の通りの悪さなど規格性に乏しい建物である。各柱穴の平面形は円形～梢円形状を呈する。柱穴の規模は、長軸は20~32cm、短軸が15~26cmであり、庇と身舎で規模の違いはない。柱穴の深さは確認面から10~34cm前後である。柱穴の底面標高も部分的に浅いものがあるものの、ほぼ一定の高さである。遺物の出土はないが、建物方位からみるとSB02と近い時期の可能性がある。

SB04 G区北側に位置する。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。桁行3

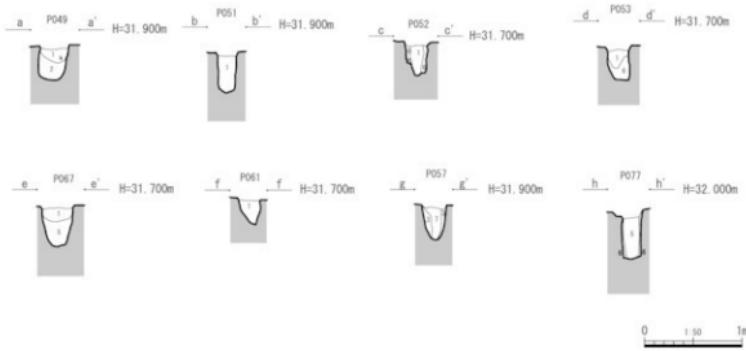


[SB03]	
P110 a - a'	
1 黒褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
6 黄褐色シルト	10YR7/8 褐灰色シルトと黄褐色シルトの混合土
7 黒褐色シルト	10YR2/3 柱痕跡
P007 b - b'	1 黑褐色シルト
5 黄褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
P086 c - c'	1 黑褐色シルト
1 黑褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
P086, P087 d - d'	3 褐色シルト
5 黄褐色シルト	10YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ブロック(φ5cm程)を含む。
7 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトブロック(φ1cm以下)との混和土。
P109 e - e'	10YR2/3 柱痕跡
4 單純色シルト	10YR3/4 褐色(10YR4/6)ブロックとの混和土。ブロックの方が多い。
P002 f - f'	1 黑褐色シルト
6 黄褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
P004 g - g'	10YR7/8 褐灰色シルトと黄褐色シルトの混合土であり、φ1~3cmのブロック状で含まれる。密度は高い。
1 黄褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
2 褐灰色粘性シルト	10YR4/1 黄褐色(10YR7/8)シルトブロック(φ5~10cm)との混和土
P132 i - i'	1 黑褐色シルト
1 黑褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
P107 j - j'	1 黑褐色シルト
1 黑褐色シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
P085 k - k'	3 褐色シルト
7 黑褐色シルト	10YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ブロック(φ5cm程)を含む。
P084 m - m'	1 黑褐色シルト
2 褐灰色粘性シルト	10YR3/1 黄褐色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。
	10YR4/1 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR7/8)シルトブロック(φ5~10cm)との混和土。

第52図 SB03断面図



第53図 SB04平面図



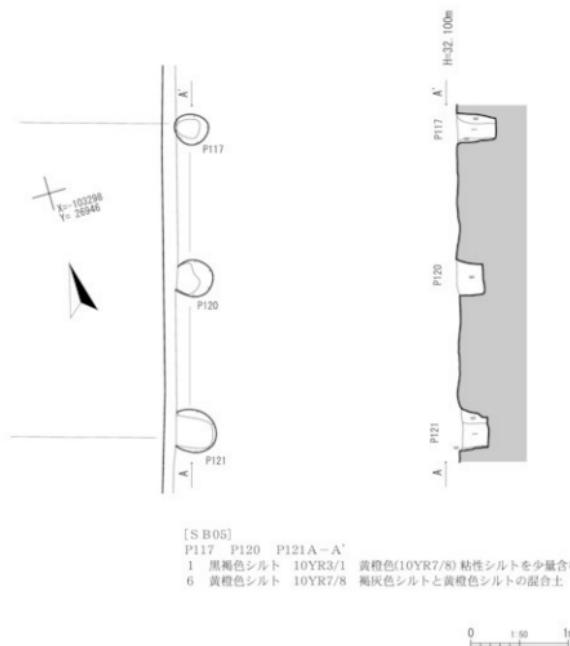
[S B04]

P049 a - a'			
1 黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
2 褐灰色粘性シルト	10YR4/1	黄橙色(10YR7/8)シルトブロック(Φ5~10cm)との混合土。柱痕跡。	
P051 b - b'			
1 黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
P052 c - c'			
1 黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
6 黄褐色シルト	10YR7/8	褐灰色シルトと黄褐色シルトの混合土。	
P053 d - d'			
1 黒褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
6 黄褐色シルト	10YR7/8	褐灰色シルトと黄褐色シルトの混合土。	
P067 e - e'			
1 黑褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
5 黄褐色シルト	10YR7/8	黄褐色シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトブロック(Φ1cm以下)との混合土。	
P061 f - f'			
1 黑褐色シルト	10YR3/1	黄橙色(10YR7/8)粘性シルトを少量含む。	
P057 g - g'			
3 棕褐色シルト	10YR4/4	明黄褐色(10YR6/6)ブロック(Φ5cm程)を含む。	
7 黑褐色シルト	10YR2/3	柱痕跡	
P077 h - h'			
5 黄褐色シルト	10YR7/8	黄橙色シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトブロック(Φ1cm以下)との混合土。	
6 黄褐色シルト	10YR7/8	黄褐色シルトと黄褐色シルトの混合土。	

第54図 S B04断面図

間× 梁行1間の掘立柱建物跡と復元した。他遺構との重複はないが、北西2mにS B03が位置している。平面規模は、桁行が7.5m、梁行が4.5mであり、床面積は33.75m²である。平面形式は、桁行3間×梁行1間の建物と想定している。方位はN-6°-Wの東西棟であり、他の建物とは方位が異なる。柱間寸法は、北側柱列を基準とすると、桁行が西から2.3m、2.7m、2.5m、梁行が、4.5mである。桁行の柱間寸法は北側と南側で若干数値が異なっている。そのため平面形は台形状を呈する。各柱穴の平面形は円形～橢円形状を呈する。柱穴の規模は、長軸は25~40cm、短軸が20~35cmである。柱穴の深さは確認面から22~50cm前後である。柱穴の底面標高もほぼ一定の高さで掘っている。遺物の出土はなく、建物方位も異なることから時期は不明である。

S B05 H区北側に位置する。遺構の確認は表土(I層)除去後のV層で行っている。桁行不明、梁行2間の掘立柱建物跡と復元した。他遺構との重複はなく、大部分が西側の調査区外へ続いている。平面規模は、梁行のみ計測でき、3.2mである。平面形式は、桁行不明×梁行2間である。方位はN-17°-Eの東西棟となろう。柱間寸法は、梁行が、1.6mの等間である。各柱穴の平面形は円形～橢円形状を呈する。柱穴の規模は、長軸は35~50cm、短軸が30~42cmである。柱穴の深さは確認面から28~40cm前後である。遺物の出土はなく時期は決定しがたいが、現状での建物方位からみるとS



第55図 SB05平・断面図

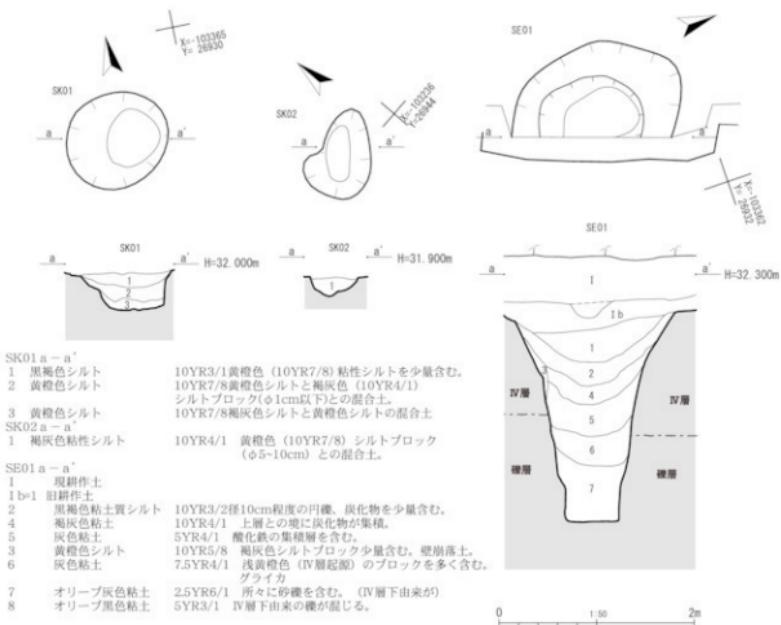
B01と同様な時期かもしれない。

(2) 土 坑

計2基のみ検出している。G区、H区にそれぞれ各1個ある。遺物の出土もなく時期不明であり、遺構の性格もよくわからっていない。

S K01 H区南部に位置する。遺構の確認は表土(I・II層)直下のV層で行っている。他遺構との重複はないが、北2mにS E01、S D04がある。平面形は、楕円形状を呈し、規模は長軸が1.05m、短軸が0.96mである。深さは確認面から40cmである。断面は逆台形序を呈し、底面は平らな部分もある。堆積土は、3層に区分でき、黒褐色を呈するシルト(1層)と、黄橙色を呈するシルト(2・3層)に2分される。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S K02 G区北部に位置する。他遺構との重複はないが、南1mのところにSB01がある。遺構の確認は表土(I・II層)直下のV層で行っている。平面形は、楕円形状を呈し、規模は長軸が0.9m、短軸が0.7mである。深さは確認面から20cmである。断面型はゆるやかなU字状であり、底面は平らではない。堆積土は、単層であり、褐灰色を呈する粘土質シルトが堆積する。遺物の出土はなく、時期も不明である。



第56図 土坑・井戸跡

(3) 井戸跡

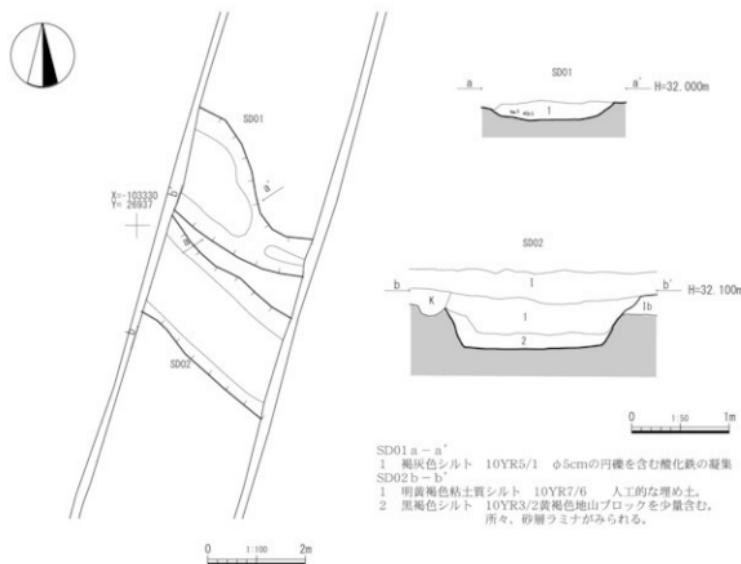
井戸跡として登録したのは1基のみであり、H区に位置する。2次調査で検出した井戸跡とも近く、この範囲にひとつのまとまりがあった可能性がある。

S E 01 H区南側に位置する素掘りの井戸である。S D 04と重複しており、新旧関係は本遺構の方が古い。東半分が調査区外にあるため全容は不明である。平面形は調査区内における形状から判断すると、円形～橢円形状を呈する。規模は、開口部幅が現状で1.7m、底面の幅が0.6mである。深さは遺構確認面から2.2mである。開口部は大きいが、底面はかなり狭くなる。堆積土は7つに区分される。上層である1～3層は黒褐色や褐色を呈する粘土～粘土質シルトである。下層は4～7層であり、灰色～オリーブ灰、オリーブ黒色を呈する粘土となる。グライ化が進んだ層である。下層はいずれの層も水分を多く含んでいる。遺物の出土はなく、時期も不明であるが、近世の遺構のまとまりが南の範囲にかけて存在するため、あるいはこの時期に相当するかもしれない。

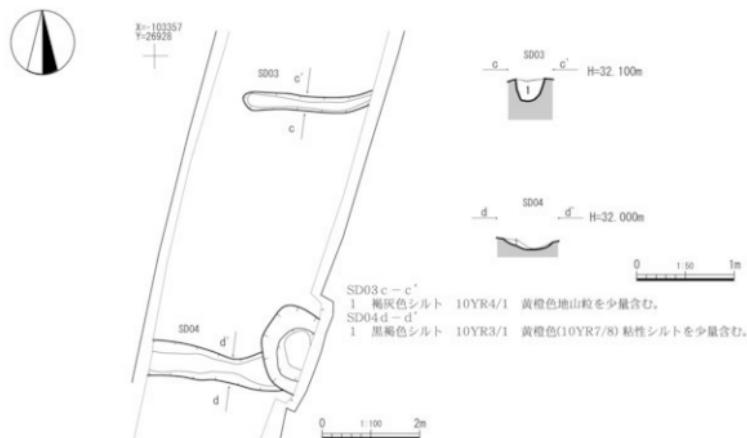
(4) 溝跡

溝跡はH区から4条を検出している。いずれも調査区を横断するかたちで検出しているため、調査した範囲は少ない。

SD 01・02



SD 03・04



第57図 溝跡

S D 01 H区中央部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はないが、南に隣接してS D 02が位置する。東西端ともに調査区外に延びる。調査区内における長さは、直線距離で3m、上幅は最大で2.0mである。深さは、確認面から18cmである。堆積土は単層であり、褐灰色を呈するシルトが確認できる。溝跡の方向は、南東から北東方向に湾曲しながら延びているが、中央付近で底面が一端高くなる。一方に水が流れるような溝ではない可能性がある。遺物は須恵器が少量出土するのみであるが、数か少ないこともあり混入の可能性も否定できないため、時期は不明と言わざるを得ない。

S D 02 H区中央部に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はないが、北に隣接してS D 01が位置する。東西端ともに調査区外に延びる。調査区内における長さは、直線距離で3m、上幅は最大で1.9mである。深さは、遺構確認面から40cmである。堆積土は大きく2つに区分される。上層は明黄褐色を呈する粘土質シルト、下層は黒褐色を呈するシルトである。溝跡の方向は、南東から北東方向にほぼ直線的に延びているが、調査した範囲が狭いため、底面の傾きは不明である。遺物は出土せず、時期も不明である。

S D 03 H区南端に位置する。遺構の確認はV層で行っている。他遺構との重複はない。東西端ともに調査区外に延びるため、全容は不明である。調査区内における長さは、直線距離で2.5m、上幅は最大で0.4mである。深さは、確認面から20cmである。堆積土は単層であり、褐灰色を呈するシルトが確認できる。溝跡の方向は、東から西方向にゆるやかに湾曲しながら延びている。遺物は出土しないため、時期を特定できない。

S D 04 H区南端に位置する。遺構の確認はV層で行っている。S E 01と重複しており、本遺構の方が新しい。東西端ともに調査区外に延びるため全容は不明である。調査区内における長さは、直線距離で2.5m、上幅は最大で0.7mである。深さは、確認面から10cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトが確認できる。溝跡の方向は、東からあり、西にほぼ直線的に延びている。遺物は出土しないため時期を特定できない。

(5) ピット・柱穴

建物跡に復元できなかった柱穴と想定される遺構である。建物があるG区のほかにH区南端付近にまとまって検出している。H区の方は調査区の幅が狭いこともあり、建物として復元することができなかつたが、この付近にも建物が存在する可能性がある。南にある井戸跡の存在も建物跡があることを予想させる。また、2次調査のC区とも距離的に近いことから、近世の集落が、3次調査B区南端から、2次調査のC区北端あたりに広がっていることが想定されよう。

これらの建物に復元されない柱穴群についての詳細は第14表にまとめた。

3 出土遺物

3次調査で出土した遺物は、前掲の通り数少ない。多くは細片であり、図化できたものは1点のみである。各遺構から出土した遺物の量は第12表の通りである。

(1) 土器類

1点のみ図化している(第58図)。284は手づくねかわらけの大皿である。ほぼ完形に復元できる。口径は13.4cm、器高は2.7cmである。S B 01を構成する柱穴P 148からの出土である。



第58図 土器類

VI 総 括

2次・3次の二度にわたる調査成果についてはこれまで記載してきたような成果があげられた。ここでは、これらの成果を再度ふれつつ、遺構・遺物に分け、要点をまとめていきたい。

遺構

調査区は、遺跡推定範囲の中では、北東部に位置する。遺跡全体の中でも北側に寄った位置である。この範囲では、周辺よりも標高が高いこともあり、畑作地として利用されることが多い。そのためもあって、度重なる土地改良にともない遺構は著しい影響を受けていた。北側に位置するA区などでは掘立柱建物を構成する柱穴がわずかな窪みとなって残存するように、多くの土地で著しい削平が行われている。このため、遺構の存在が空白の地点であっても、本来遺構があった可能性が高いことに注意しなければならない。

今回の調査においては、確實に縄文時代と判断できる遺構は検出されなかつたが、当該期の遺物が出土することから、何らかの遺構が存在する可能性はある。しかしながら、遺物の出土量が他の縄文時代の集落と比べて非常に少なく、この土地が利用されていたとしても小規模なものであったと考えられる。

遺跡の主要な時代である平安時代では、掘立柱建物跡の少なくとも2棟がこの時期に属する。削平が強く及ぶ建物であるが、柱穴からの遺物や方形を呈する掘り方という特徴から平安時代に位置づけたものである。とくに2次調査のS B01は、残存状態が悪いものの、柱穴の大きさや柱間寸法などから大型の建物であったと推定している。掘立柱建物があり、それが大型建物である集落はこれまで非常に検出例が少なく、かつ大規模な例が多い。そのため本遺跡も、調査範囲が少なく、残存状態も悪いものの、こういった集落である可能性が高いといえる。この点については今後の調査に期待したい。そのほか、平安時代に属する遺構には、土坑や溝跡があり、また焼土遺構もある。この焼土や炭化物集積遺構については、削平度を考慮すると竪穴建物の残骸である可能性がある。溝跡は時期不明のものが多いが、C区検出のようにL字形に曲がる溝が多い点に特徴がある。規模の点では大きなものはないものの、区画溝を想定させるような配置状況である。2条の溝が平行して延びるものもあり、(S D 14・15、S D 05・16など)道路(通路)があった可能性もある。調査範囲が狭小のため、判明する事実も少なく、隣接地の調査が待たれる。周辺に目を広げると、遺跡の北約500mに位置する水尻遺跡では、平安時代の掘立柱建物跡が検出され、しかも格式が高いと考えられている四面廂建物である。村落内寺院の可能性もあるが、付近に平安期の掘立柱建物を有する集落が複数存在することは、この地域の性格の一端を表していると考えられよう。盛岡市の盛南地区や奥州市の姉体地区のように多数の掘立柱建物が今後発見される可能性がある。

平安時代の末葉に位置づけられる平泉藤原氏の時代(12世紀)の遺構や遺物も今回の調査ではじめて発見されている。確実に12世紀に位置づけられる遺構として、掘立柱建物跡、土坑、井戸跡がある。本遺跡全体の中では量的に主要な位置づけではないが、ある程度まとまった形で発見されたことは重要な成果のひとつである。平泉町域内に存在する遺跡以外では、まとまって発見される例は少ないこともあり、周辺地域においてもこの時期の遺跡の広がりが確認されたことの意義は貴重である。

最近この周辺で行われた調査においても、次々とこの時期の遺物や遺構が発見されている。田高II遺跡、彼岸田遺跡、古城方八丁遺跡、水尻遺跡、道上遺跡、八反町遺跡、古城林遺跡などである。検

出土構や出土遺物には濃淡があるものの、狭い範囲内にこれほど集中することには注目される。この地域にはまた、五輪経塚や寺ノ上経塚などの12世紀代に位置づけられる経塚もあり、明後沢川流域には、12世紀の痕跡が色濃く残る地域である。現在調査中や整理中の遺跡も多く、現時点で触れる事柄は少ないが、いずれ注目して研究を続けるべき地域であろう。

本遺跡はまた、1次調査で判明していた江戸時代の集落としての側面もある。今回の調査においても、墓塚を中心に遺構が見つかっており、掘立柱建物跡も時期不明のものの中には、この時期に位置づけられるものも含まれよう。井戸跡と建物跡、墓塚など近世集落を構成する主要遺構はそろっている。今後は、これらの集落の範囲を確認する必要がある。

遺物

出土遺物の合計は約20kgと少ない。今回の主要な遺物としては、平安時代の遺物や江戸時代の遺物など遺構数が多い時代の遺物がやはり多い傾向にある。土師器・須恵器の土器類、国産陶器類、近世の金属製品がそれぞれ約1割ずつ占める。そのなかでも、特筆すべき出土遺物としては、かわらけや国産陶器などの12世紀代の年代が与えられる遺物であろう。多量に出土したわけではないが、一遺跡から、まとまって渥美や常滑窯産の国産陶器が出土する例は少なく、貴重な発見である。国産陶器をみれば、多くは1号土坑からの出土である。渥美産の片口鉢や大甕などのすべて日常の器が大半である。これらの遺物が出土したことには一定の意義はあるものの、これらを遺構ともあわせて、歴史的位置づけを行わねばならないであろう。

遺跡内には延喜式内社である止々井神社（江戸時代に胆沢区都鳥から移設）や藤原秀衡の姥伝承の残る姥神社など、歴史にゆかりのある施設が残る。前者は、古代の複数の掘立柱建物跡が存在し、一般的な集落とは数の稀少から異なる役割を有していたと想定される古代期の集落に関連し、後者は、12世紀の建物跡を含む集落との関連が想定される。このように、現存や伝承の事実と発掘調査の成果とが一致する事例としても、今回の調査は重要な成果を供すことができよう。

以上、今回の二度にわたる調査の成果について、主要な点を述べた。これらには残された課題が多いものの、本書の性格上多くの触れることができなかった。今後の活用に期待したい。

觀 察 表

第3表 遺構別出土遺物量(2次調査)

遺構名	國文・弥生	石器	土師器	須恵器	國產陶器	貿易陶磁	かわらけ	近世陶磁器	近代陶磁器	金屬製品	その他
SK01		14.00		21.18	海美1643.83		49.10				
SK03					海美17.43		48.34				
SK04		8.49									
SK05				301.08	24.46						
SK06	86.28										
SX01				210.13							
SX04				101.00							
SD01	28.33										
SD07		125.76	45.46					39.86	刀子柄	25.08	
SD08		14.98	387.60	305.81	常滑Y31.48						
SD03								肥前	5.97		
SD09		32.16	8.50								
SD11				77.29							
SD14		14.21									
ST01								釘	14点 38.50		
								鉄鉋	3点以上 20.14	木	
ST02	0.89							釘	18点 26.86		
								鉄鉋	2点以上 44.46		
								銅鉄	18点 42.74		
								キセル	1点 2.82		
								火打金	石 1点 16.66		
ST03							肥前	95.66	釘	74点 155.78	
ST05									鉄鉋	6点 12.09	
ST01~03									釘	10点 11.34	
ST03 (-ST04b)									鉄鉋	1点以上 118.64	
ST04	4.41					産地不明	0.4	釘	55点 93.96		
						6		鉄鉋	4点以上 55.58		
ST06								キセル	1点 1.44		
ST07~11	7.99							銅鉄	2点 6.63		
								刀子	4点 11.98		
								キセル	1点 0.95		
								火打金	1点 13.03		
								釘	19点 60.09		
								鉄鉋	3点以上 38.45		
								銅鉄	10点 16.91		
								キセル	1点 1.4		
								火打金	石 各 1点 5.7		
ST08								釘	6		
								銅鉄	8点 26.5		
								不明金属製品	1点 4.47		
ST09								鏡	1点 12.28		
ST10	墓石1908.33							鉄鉋	2点 3.81		
ST11								キセル	1点 6.07		
								火打金	1点 6.07		
								釘	11点 27.86		
								銅鉄	49点 123.62		
ST12	墓石2867.7							刀子	1点 7.05		
								鍍金具	1点 9.82		
								火打金	石 1点 23.09		
								釘	1点 10.21		
								銅鉄	6点 9.96		
ST13								キセル	1点 2.23		
								釘	37点 47.60		
								鉄鉋	4点以上 102.65		
ST14	墓石4720										
ST15								釘	5点 7.78		
								鉄鉋	1点以上 61.26		
ST17	2.80							釘	45点 92.37		
								鉄鉋	7点以上 188.16		
ST19								釘	16点 16.92		
								銅鉄	1点 1.87		
								鉄鉋	5点以上 35.82		
ST20								キセル	1点 7.71		
								釘	85点 153.75		
								銅鉄	18点 50.56		
								鉄鉋	5点以上 62.96		
ST21	13.13						22.26	キセル	5点 21.82		
								釘	45点 67.92		
								銅鉄	18点 42.09		
								鉄鉋	6点以上 16.81		
ST22	墓石3605							キセル	1点 3.17		
								釘	20点 57.12		
								銅鉄	4点 1.86		
								鉄鉋	5点以上 17.16		
ST15								キセル	1点 8.33		
								銅鉄	6点 18.05		
ST23	12.52							キセル	1点 4.80		
								火打金	石 1点 48.28		
P095	2.52							釘	4点 14.13		
								鉄鉋	7点 87.96		

遺構名	圓文・秀生	石器	土師器	須恵器	國產陶器	貿易陶磁	かわらけ	近世陶磁器	近代陶磁器	金屬製品	その他
P105				41.58							
P123				143.69							
P111				1.92							
P116				1.37							
P118				17.78							
P121				2.39							
P124				29.66							
P129		4.73									
P136		7.84									
A区	123.55	6.83	60.52	常滑 渥美	39.71 124.07						
C区		49.64									
F区		15.09									
廟山塗	76.37	8.88					9.82	13.39			
表土		13.18									
不明	16.67	47.68									
合計	238.16	13456.38	1496.00	428.74	1856.52	0.00	97.44	134.17	53.25	2342.94	3.41

第4表 土器類観察表(2次調査)

測定箇所	登録No.	器種	種別	出土遺構	層位	乳母率(%)	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整		その他
											外面	内面	
1	A17	杯	非内黒	P105	埋土	20	橙	(13.0)	(3.7)	—	回転ナデ	回転ナデ	
2	A8	甕	土師器	SK05	埋土	15	橙	(16.0)	(8.3)	—	回転ナデ	回転ナデ	
3	A9	甕	土師器	SK05	埋土	10	によい黄緑	(19.6)	(6.3)	—	口縁部:ヨコナデ 体部:斜面・縁部ヘラナデ	口縁部:ヨコナデ 体部:斜面ヘラナデ	
4	A10	甕	土師器	SK05	埋土	10	によい赤褐色	—	(6.3)	(6.0)	縁位ヘラケズリ	縁位ヘラナデ	
5	A24	甕	土師器	P123	埋土	10	赤褐	—	(8.5)	—	縁位ヘラケズリ	横位・斜位ハケメ	
6	A4	小皿	手づくねかわらけ	SK01	6層下	100	灰黄緑	8.4	2.0	—	スノコ痕・指おさえ		
7	A5	小皿	手づくねかわらけ	SK03	埋土	25	によい黄緑	(8.8)	1.6	—	スノコ痕・指おさえ		
8	A6	大皿	手づくねかわらけ	SK03	底面	20	によい黄緑	—	—	—	スノコ痕		

第5表 陶磁器観察表(2次調査)

測定箇所	登録No.	器種名	出土遺構	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	粘付・文様	産地	年代	重量(g)	備考
9	A33	陶器壺	SK01	埋土6~7	—	—	—		渥美	12C代	46.44	
10	A36	陶器壺	SK03	埋土	—	(3.4)	—		渥美	12C代	17.43	
11	A29	陶器甕	SK01	埋土3層	—	(6.8)	(18.4)		渥美	12C代	520.24	押印
12	A28	陶器甕	SK01	埋土中	—	—	—		渥美	12C代	309.72	押印
13	A32	陶器甕	SK01	埋土6~7	—	—	—		渥美	12C代	76.50	押印
14	A31	陶器甕	SK01	埋土6~7	—	—	—		渥美	12C代	124.85	押印
15	C3	陶器甕	SD08	埋土一括	—	—	—		常滑	12C後	31.48	
16	C4	陶器甕	A1K	Ⅲ層土器①	—	—	—		常滑	12C後	39.71	押印
17	A45	陶器甕	A区	Ⅲ層土器⑥	—	—	—		渥美	12C代	124.07	押印
18	A34	陶器甕(片口?)	SK01	6~7層	(35.4)	11.1	(14.2)		渥美	12C代	243.60	A30・35と同一個体か
19	A30	陶器片口	SK01	6層	(35.7)	(8.5)	—		渥美	12C代	200.13	A34・35と同一個体か
20	A35	陶器甕(片口?)	SK01	埋土中	(31.3)	(7.7)	—		渥美	12C代	122.35	A30・34と同一個体か
21	C1	磁器染付碗	C区3号墓	埋土一括	7.8	4.4	3.3	草花文	肥前	18~19C	95.66	大橋編年IV~V期
22	C2	磁器染付皿	C区3号溝	Aベルト埋土	—	—	—	唐草文	肥前	18C代	5.97	大橋編年IV期

第6表 金属製品観察表(2次調査)

発見No	登録No	種類	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	その他
23	P6	棒状鉄器	(道路下南半) SD07		<5.7>	2.1	1.95	25.08	
24	P24	刀子	ST07~09,11	埋土一括	1.2	<4.8>	0.6	2.45	
25	P25	刀子	ST07~09,11	埋土一括	2.3	<3.9>	0.6	2.58	
26	P5	刀子	ST07~09,11	埋土一括	1.6	<4.8>	0.3	3.17	
27	P23	刀子	ST07~09,11	埋土一括	<5.5>	1.6	0.3	3.78	
28	F55	刀子	ST12	埋土一括	<9.7>	1.2	0.3	7.05	茎片か
29	F53	鍍金具片	ST12	埋土一括	<8.2>	2.3	0.8	9.82	
30	F4	銅鏡	ST09	埋土一括	径6.3	—	0.2	12.28	
31	F6	キセル	ST11	埋土一括	雁首(3.1)吸口 (4.05)	雁首・吸口共 0.9	—	6.07	雁首・木質・吸口
32	F7	キセル	SD15	埋土一括	(5.6)	1.1	—	8.33	吸口・木質
33	F8	キセル	SD20	埋土一括	4.35	1.0	—	7.71	雁首・木質
34	F9	キセル	SD21	埋土一括	(5.1)	1.0	—	4.42	吸口・木質
35	F10	キセル	SD21	埋土一括	5.75	1.2	—	10.40	吸口
36	F12	キセル	ST21	埋土一括	5.3	1.0	—	5.72	雁首・木質
37	F16	キセル	ST23	埋土一括	(4.2)	1.1	—	4.80	雁首(炭化物付着) ・木質
38	P1	火打金	ST02	埋土一括	2.8	6.0	1.0	9.25	
39	P10	火打石	ST02	埋土一括	2.0	2.7	1.4	7.41	珪質頁岩
40	P4	火打金	ST08	埋土一括	1.4	6.6	0.35	3.48	
41	P9	火打石	ST08	埋土一括	2.0	1.35	1.0	2.26	玉ずい
42	P2	火打金	ST07~09,11	埋土一括	2.4	6.6	0.6	13.03	
43	P7	火打石	ST11	埋土一括	2.2	1.7	0.45	2.07	玉ずい
44	F54	火打金・石	ST12	埋土一括	4.0	5.7	2.2	23.09	
45	P3	火打金・石	ST23	埋土一括	3.8	7.9	2.5	46.60	
46	P8	火打石	ST23	埋土一括	1.2	1.7	0.75	1.68	玉ずい
241	F17	鉄釘	ST01	埋土一括	8.9	4.2	2.4	12.76	2本施着
242	F19	鉄釘	ST01	埋土一括	8.8	0.75	0.55	4.68	
243	F18	鉄釘	ST01	埋土一括	(9.0)	0.9	0.6	7.16	
244	F20	鉄釘	ST02	埋土一括	9.1	0.8	0.5	5.45	
245	F21	鉄釘	ST02	埋土一括	6.1	0.6	0.5	7.23	
246	F26	鉄釘	ST01~03	埋土一括	4.4	0.8	0.4	1.40	
247	F22	鉄釘	ST03	埋土一括	8.4	0.9	0.5	5.85	
248	F24	鉄釘	ST03	埋土一括	8.3	0.7	0.6	11.50	3本施着

掲載№	登録№	種類	出土遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	その他
249	F25	鉄釘	ST03	埋土—括	8.7	0.67	0.35	9.06	3本施着
250	F23	鉄釘	ST03	埋土—括	8.2	0.8	0.5	8.57	
251	F27	鉄釘	ST04	埋土—括	(6.9)	1.0	0.35	8.33	
252	F28	鉄釘	ST04	埋土—括	(3.8)	1.0	0.4	1.74	2本施着
253	F29	鉄釘	ST04	埋土—括	(2.85)	0.4	0.3	1.13	先端湾曲
254	F30	鉄釘	ST07～09,11	埋土—括	(5.2)	1.1	0.5	4.08	
255	F31	鉄釘	ST07～09,11	埋土—括	(6.2)	0.9	0.4	5.95	2本施着
256	F33	鉄釘	ST11	埋土—括	7.3	0.45	0.4	5.69	2本施着
257	F32	鉄釘	ST11	埋土—括	(6.45)	0.5	0.45	5.27	
258	F34	鉄釘	ST12	埋土—括	8.8	0.6	0.5	10.21	2本施着
259	F36	鉄釘	ST13	埋土—括	(6.5)	0.4	0.5	4.97	2本施着
260	F35	鉄釘	ST13	埋土—括	(7.35)	0.9	0.4	6.91	2本施着
261	F39	鉄釘	ST17	埋土—括	4.7	0.8	0.35	2.57	
262	F38	鉄釘	ST17	埋土—括	(6.4)	0.7	0.45	8.35	2本施着
263	F37	鉄釘	ST17	埋土—括	(6.2)	0.5	0.55	9.95	2本施着
264	F40	鉄釘	ST19	埋土—括	(2.6)	0.85	(0.15)	1.27	
265	F41	鉄釘	ST19	埋土—括	(3.0)	0.35	0.4	2.02	2本施着
266	F43	鉄釘	ST20	埋土—括	4.5	0.7	0.4	2.20	
267	F44	鉄釘	ST20	埋土—括	(7.8)	0.8	0.4	5.59	
268	F42	鉄釘	ST20	埋土—括	7.9	0.4	0.5	7.52	2本施着
269	F46	鉄釘	ST21	埋土—括	4.6	0.7	0.3	2.69	
270	F45	鉄釘	ST21	埋土—括	(4.5)	0.5	0.35	3.03	2本施着
271	F47	鉄釘	ST22	埋土—括	8.2	0.6	0.6	15.69	3本施着
272	F48	鉄釘	ST22	埋土—括	(5.6)	0.6	0.4	4.24	2本施着
273	F49	鉄釘	ST23	埋土—括	3.1	0.4	0.35	1.08	
274	F50	鉄釘	ST23	埋土—括	4.4	0.7	0.3	2.84	
275	F52	鉄釘	ST23	埋土—括	8.4	0.7	0.5	5.02	
276	F51	鉄釘	ST23	埋土—括	8.4	0.55	0.4	5.19	

第6表 金属製品観察表(2次調査)

掲載No	登録No	器種名	出土遺構	部位	銘種・特徴など	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)
47	G146	鉄錢	ST01	埋土一括	仙巖通寶	径2.3	—	3.13
48	G147	鉄錢	ST01	埋土一括	仙?通寶々 4枚癒着	径2.1	2.1	8.54
49	G148	鉄錢	ST01	埋土一括	仙巖通寶	径2.1	—	1.36
50	G149	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	0.87
51	G1	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶「文錢」	径2.4	—	3.30
52	G2	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.38
53	G3	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.85
54	G4	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.46
55	G5	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.61
56	G6	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.40
57	G7	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	3.10
58	G8	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.34
59	G9	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.52
60	G10	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.27
61	G11	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶「文錢」	径2.5	—	3.48
62	G12	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.32
63	G13	鉄錢	ST02	埋土一括	銘種不明	径2.4	—	0.89
64	G14	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.51
65	G15	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.85
66	G16	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.07
67	G17	銅錢	ST02	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.41
68	G153	鉄錢	ST02	埋土一括	仙巖通寶々 7枚癒着	径2.2~2.5	—	29.76
69	G154	鉄錢	ST02	埋土一括	仙巖通寶々 4枚癒着	2.2	2.1	13.30
70	G155	鉄錢	ST03	(一部4号も)	銘種不明	径2.4	—	2.63
71	G156	鉄錢	ST04	埋土一括	銘種不明	径2.5	—	4.29
72	G157	鉄錢	ST04	埋土一括	寛永通寶々 2枚癒着	径2.4	—	5.12
73	G158	鉄錢	ST04	埋土一括	寛永通寶々	径2.7	—	6.90
74	G159	鉄錢	ST04	埋土一括	寛永通寶々 4枚癒着	径2.5	—	14.28
75	G19	銅錢	ST05	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.31
76	G20	銅錢	ST05	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.51
77	G21	銅錢	ST05	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.22
78	G22	銅錢	ST05	埋土一括	寛永通寶、「古寛永」	径2.2	—	2.48
79	G23	銅錢	ST05	埋土一括	寛永通寶	径(2.3)	—	1.37
80	G25	銅錢	ST06	埋土一括	寛永通寶 4枚癒着	径2.4	—	5.22
81	G24	銅錢	ST06	埋土一括	寛永通寶 2枚癒着	径(2.5)	—	1.41
82	G26	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶、「文錢」	径2.5	—	2.86
83	G27	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「文錢」	径2.5	—	3.52
84	G28	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.3	—	3.57
85	G29	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「文錢」	径2.5	—	3.03
86	G30	銅錢	ST08	埋土一括	天聖元寶	径2.3	—	3.22
87	G31	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.4	—	3.48
88	G32	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.3	—	3.88
89	G33	銅錢	ST08	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径(2.5)	—	2.94
90	G34	銅錢	ST09	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.22
91	G35	銅錢	ST09	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.59
92	G36	銅錢	ST07~09.11	埋土一括	寛永通寶	径2.5	—	3.51

掲載No	登録No	器種名	出土遺構	層位	銘種・特徴など	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)
93	G37	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.4	—	3.73
94	G38	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.24
95	G39	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.5	—	2.91
96	G40	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	径(2.5)	—	1.67
97	G41	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.37
98	G42	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	—	—	0.37
99	G43	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	—	—	0.33
100	G150	銅鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶	—	—	0.52
101	G160	鉄鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶 カ 2枚施着	2.6	2.5	6.09
102	G161	鉄鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶 カ 3枚施着	径2.7	—	8.42
103	G162	鉄鏡	ST07~09,11	埋土一括	寛永通寶 カ	径2.6	—	3.31
104	G46	銅鏡	ST11	埋土一括	天聖元寶	径2.4	—	3.14
105	G47	銅鏡	ST11	埋土一括	文久永寶	径2.6	—	2.94
106	G45	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径(2.2)	—	0.70
107	G48	銅鏡	ST11	埋土一括	文久永寶	径2.6	—	3.24
108	G49	銅鏡	ST11	埋土一括	文久永寶	径2.6	—	3.68
109	G50	銅鏡	ST11	埋土一括	文久永寶	径2.7	—	4.18
110	G51	銅鏡	ST11	埋土一括	無紋	径2.1	—	1.87
111	G52	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.38
112	G53	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.83
113	G54	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.34
114	G55	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.93
115	G56	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.73
116	G57	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.57
117	G58	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.14
118	G59	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.19
119	G60	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.35	—	2.39
120	G61	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.93
121	G62	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	1.97
122	G63	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.1	—	2.21
123	G64	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.88
124	G65	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.07
125	G66	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.58
126	G67	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.44
127	G68	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.16
128	G69	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶 「古寛永」	径2.3	—	1.61
129	G70	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.85
130	G71	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.84
131	G72	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.01
132	G73	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.23
133	G74	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.36
134	G75	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.1	—	1.56
135	G76	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.70
136	G77	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.62
137	G78	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.17
138	G79	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.91

掲載No	登録No	器種名	出土遺構	部位	銘種・特徴など	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)
139	G80	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.20
140	G81	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶「古寛永」	径2.3	—	2.65
141	G82	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.36
142	G83	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.56
143	G84	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	3.03
144	G85	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶「古寛永」	径2.4	—	2.64
145	G86	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.96
146	G87	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.51
147	G88	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.88
148	G89	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.26
149	G90	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.84
150	G91	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶「古寛永」	径2.4	—	3.39
151	G92	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.05
152	G93	銅鏡	ST11	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.04
153	G94	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶・背元	径2.2	—	1.68
154	G95	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.77
155	G96	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.01
156	G98	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶	径2.1	—	1.31
157	G99	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.50
158	G191	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶々	径2.3	—	1.85
159	G192	銅鏡	ST12	埋土一括	寛永通寶々	径2.3	—	3.03
160	G193	鉄鏡	ST13	埋土一括	寛永通寶々 2枚重着	径2.5	—	6.48
161	G194	鉄鏡	ST13	埋土一括	寛永通寶々 4枚重着	径2.8	—	23.28
162	G196	鉄鏡	ST13	埋土一括	寛永通寶々 5枚以上重着	径2.6	—	60.79
163	G195	鉄鏡	ST13	埋土一括	寛永通寶々 2枚重着	径2.5	—	8.78
164	G100	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.47
165	G101	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	3.74
166	G102	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	3.31
167	G103	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.80
168	G104	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶「古寛永」	径2.4	—	2.20
169	G105	銅鏡	ST15	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.53
170	G163	鉄鏡	ST16	上層	寛永通寶々 3枚重着	径2.5	—	10.51
171	G164	鉄鏡	ST17	埋土一括	寛永通寶々 3枚重着	径2.4	—	7.64
172	G165	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々 3枚重着	2.3	2.3	10.84
173	G166	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々 3枚重着	2.1	2.1	8.79
174	G167	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々	径2.5	—	2.95
175	G168	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々	径2.4	—	2.83
176	G169	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々	径2.5	—	2.57
177	G170	鉄鏡	ST17	埋土一括	仙臺通寶々 3枚重着	径2.2	—	12.17
178	G106	銅鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々	径2.3	—	1.87
179	G171	鉄鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々 2枚重着	径2.7	—	5.36
180	G172	鉄鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々 3枚重着	径2.6	—	8.81
181	G173	鉄鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々 2枚重着	径2.7	—	5.40
182	G174	鉄鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々 2枚重着	径2.4	—	5.49
183	G175	鉄鏡	ST19	埋土一括	寛永通寶々	径2.4	—	3.52
184	G107	銅鏡	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.09

規範No	登録No	器種名	出土遺構	層位	銘種・特徴など	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)
185	G108	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	1.46
186	G109	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.73
187	G110	銅錢	ST20	埋土一括	銘種不明	径2.3	—	2.31
188	G111	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.15
189	G112	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.01
190	G113	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	1.69
191	G114	鉄錢	ST20	埋土一括	寛永通寶々	径2.5	—	1.47
192	G115	鉄錢	ST20	埋土一括	寛永通寶々	径2.5	—	1.31
193	G116	銅錢	ST20	埋土一括	銘種不明 2枚癒着	径2.4	—	4.95
194	G117	銅錢	ST20	埋土一括	銘種不明 2枚癒着	径2.4	—	4.96
195	G118	鉄錢	ST20	埋土一括	仙臺通寶 2枚癒着	2.2	2.15	5.12
196	G119	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶 2枚癒着	径2.35	—	6.32
197	G120	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.57
198	G121	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.90
199	G122	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	2.06
200	G123	鉄錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	1.67
201	G176	鉄錢	ST20	埋土一括	寛永通寶々 3枚癒着	径2.7	—	17.08
202	G151	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.89
203	G152	銅錢	ST20	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.57
204	G177	鉄錢	ST20	埋土一括	仙臺通寶々	径2.4	—	2.61
205	G178	鉄錢	ST20	埋土一括	仙臺通寶々	径2.3	—	2.80
206	G179	鉄錢	ST20	埋土一括	寛永通寶々	径2.4	—	2.85
207	G124	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.66
208	G125	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.47
209	G126	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	3.92
210	G127	銅錢	ST21	埋土一括	銘種不明	径2.2	—	2.37
211	G128	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.53
212	G129	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.67
213	G130	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.4	—	2.89
214	G131	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	3.52
215	G132	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.46
216	G133	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.82
217	G134	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.2	—	1.70
218	G135	銅錢	ST21	埋土一括	銘種不明	径2.3	—	2.07
219	G136	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.36
220	G137	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	1.40
221	G138	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	2.10
222	G139	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.00
223	G140	銅錢	ST21	埋土一括	洪武通寶(模鉄錢か)	径2.1	—	2.39
224	G141	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.3	—	1.17
225	G142	銅錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.4	—	1.76
226	G143	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.2	—	0.46
227	G197	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.4	—	1.93
228	G180	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々 2枚癒着	径2.4	—	4.27
229	G181	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々	径2.3	—	2.79
230	G182	鉄錢	ST21	埋土一括	寛永通寶々 2枚癒着	径2.7	—	4.55

掲載No	登録No	器種名	出土遺構	層位	銘種・特徴など	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)
231	G144	銅鏡	ST22	埋土一括	寛永通寶	径2.3	—	1.53
232	G145	銅鏡	ST22	埋土一括	寛永通寶	径2.4	—	2.40
233	G183	鉄鏡	ST22	埋土一括	寛永通寶々 1枚癒着	径2.6	—	4.85
234	G184	鉄鏡	ST23	埋土一括	仙巖通寶々 3枚癒着	2.2	2.1	5.47
235	G185	鉄鏡	ST23	埋土一括	仙巖通寶々 2枚癒着	2.4	2.3	6.06
236	G186	鉄鏡	ST23	埋土一括	仙巖通寶々 2枚癒着	2.2	2.1	5.14
237	G187	鉄鏡	ST23	埋土一括	仙巖通寶々 3枚癒着	2.35	2.35	9.62
238	G188	鉄鏡	ST23	埋土一括	寛永通寶々 6枚癒着	径2.5	—	20.46
239	G189	鉄鏡	ST23	埋土一括	仙巖通寶々 6枚癒着	2.3	2.3	15.94
240	G190	鉄鏡	ST23	埋土一括	銘種不明	—	—	25.27

第7表 繡文土器観察表(2次調査)

掲載No	登録No	器種	部位	出土遺構	層位	胎土	文様の特徴	重量(g)	備考
277	A1	深鉢	胸部	SD01	埋土土器③	砂粒含みやや粗	細粘土紐を短くちぎって折り重ねた施術状況、LR。	28.33	大木5式相当
278	A2	深鉢	胸部	A区	IV層土器⑤	砂粒多く粗	地紋のみ、RL 0多。	81.85	
279	A3	深鉢	胸部	A区	トレンチ内土器②	砂粒含みやや粗	地紋のみ、LR。	41.70	

第8表 石器・石製品観察表(2次調査)

掲載No	登録No	器種名	出土遺構	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質・産地・年代
280	F13	石製品	ST21	埋土一括	(3.5)	1.0	0.3	5.37	デイサイト? 奥羽山脈 新生代新第三紀
281	D1	スクレイバー	SD07		5.5	3.5	0.8	11.99	頁岩 北上山地 古～中生代
282	D2	スクレイバー	表土一括	I層	5.35	3.05	1	11.32	頁岩 北上山地 古～中生代
283	D4	墓標	ST14	埋土一括	29.5	12.9	7.4	4720	安山岩 奥羽山脈 新生代～新第三紀

第9表 柱穴被覆表(2次調査)

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(cm)	その他
P001	40	37	19	32.050	
P002	25	25	16	31.960	
P003	35	30	5	32.040	
P004	35	30	14.5	32.085	
P005	欠番				
P006	25	20	11	32.000	
P007	欠番				
P008	欠番				
P009	30	30	14	31.985	
P010	22	18	19.5	31.905	SB05
P011	25	20	14.5	31.945	
P012	30	22	17.5	31.920	
P013	28	22	14	32.060	SB05
P014	欠番				
P015	26	22	14.5	31.975	
P016	16	16	10.5	32.005	
P017	欠番				
P018	36	26	16.5	31.900	
P019	26	20	17	32.030	
P020	49	34	27	31.940	
P021	28	25	18	32.020	SB05
P022	20	14	13	32.060	
P023	33	32	21	31.860	
P024	38	—	22	31.860	
P025	25	20	21	31.950	
P026	26	20	14	32.050	
P027	26	18	19.5	31.985	
P028	22	19	16	32.040	
P029	43	32	15	32.020	
P030	欠番				SB*
P031	40	30	23	31.940	
P032	32	30	21	31.980	
P033	28	24	24.5	31.925	SB03
P034	22	14	10.5	32.090	
P035	25	17	15	32.010	SB03
P036	32	24	10.5	32.115	SB03
P037	20	19	15.5	32.015	
P038	欠番				
P039	23	20	10	31.940	
P040	28	24	10.5	31.895	
P041	25	21	23.5	31.965	SB03
P042	26	24	20	31.990	SB03
P043	24	20	12	31.950	
P044	16	12	16.5	31.970	
P045	34	28	24	31.930	SB03
P046	23	20	9	32.095	SB04
P047	26	23	23.5	31.895	SB03
P048	24	17	18.5	31.935	
P049	26	20	18	31.925	SB04
P050	22	20	19	31.890	
P051	22	19	21	31.950	SB04
P052	23	20	20	31.870	SB04
P053	22	20	17.5	31.915	SB04
P054	21	14	20	31.890	SB04
P055	22	17	16	31.970	
P056	欠番				
P057	25	15	16	31.900	
P058	32	28	19.5	31.935	
P059A	20	17	22.5	31.930	
P059B	22	17	14	32.010	
P060	36	26	10	32.050	
P061	22	18	19	31.980	
P062	20	16	16	31.980	
P063	24	24	24	31.900	
P064	欠番				
P065	18	18	14	32.000	SB04
P066	22	13	40	31.260	
P067	22	20	10.5	32.005	SB04
P068	22	20	18.5	31.955	SB04

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(cm)	その他
P069	欠番				
P070	欠番				
P071	34	23	19.5	31.955	
P072	20	20	21	31.870	
P073	欠番				
P074	欠番				
P075	欠番				
P076-2	48	40	13	31.991	SB02
P077	45	38	14	31.790	SB02
P078	17	15	6.5	32.045	
P079	22	18	12	31.880	SB04
P080	20	20	9.5	32.115	
P081	20	15	14	32.020	
P082	22	20	16	31.900	
P083	24	18	15	31.930	
P084	28	28	24	31.870	
P085	欠番				
P086	23	17	17	31.940	
P087	27	22	19.5	31.865	
P088	36	26	21.5	31.895	
P089	32	26	39	31.700	
P090	22	16	23	31.840	
P091	75	61	8	31.110	SB01
P092	95	75	3	32.073	SB01
P093	80	68	8	32.089	SB01
P094	80	73	5	32.133	
P095	90	62	13	32.066	SB01
P096	65	50	11	32.059	SB01
P097	84	70	12	32.075	SB01
P098	26	20	19	32.065	
P099	20	18	10	32.077	
P100	18	17	12	32.088	
P101	50	40	28	31.210	
P102	50	45	31	32.080	SB02
P103	50	40	17	32.070	SB02
P104	44	40	17	32.030	SB02
P105	46	40	19	32.000	SB02
P106	42	40	20	32.044	SB02
P107	42	35	17	31.730	SB02
P108	54	32	18	31.710	SB02
P109	(86)	(46)	8.6	31.569	
P110	48以上	—	—	—	
P111	26	24	10	32.330	
P112	31	24	16	32.070	
P113	27	22	14	32.320	
P114	70	50	6.5	32.361	
P115	29	25	31	32.100	
P116	42	40	18	32.280	
P117	30	20	30.5	32.170	
P118	44	28	37.5	32.055	
P119	35	33	8	32.370	
P120	28	23	13	32.180	
P121	(22)	(18)	25.5	32.175	
P122	25	20	14	32.300	
P123	45	36	38	32.070	
P124	66	61	8	31.070	
P125	26	22	16	31.907	
P126	38	34	22	31.790	
P127	40	30	29	31.750	
P128	39	36	51.5	31.285	
P129	46	34	27	31.760	
P130	26	22	9.5	31.675	
P131	24	21	19	31.820	
P132	30	28	14	31.843	
P133	36	31	14	31.330	
P134	32	27	22	31.300	
P135	55	37	19	31.230	
P136	56	48	9.5	31.925	
P137	35	34	11	31.900	

第12表 遺構別出土遺物量（3次調査） × その他は表の項目以外、近代・現代のものなど

遺構名	縦幅×弥生	石器	土師器	須恵器	国産陶器	貿易陶磁	かわらけ	近世陶磁器	近代陶磁器	金属製品	その他
SD01				22.90							
P090			8.19								
P148						48.88					
A区	3.29	15.30							3.20		
B区		7.09									
C区				12.37				15.65	88.07		現代金属製品 138.59
合計	3.29	22.39	8.19	35.27			48.88	15.65	91.27		138.59

第13表 土器類観察表（3次調査）

周数No.	登録No.	器種	種別	出土遺構	層位	残存率(%)	色調	口径	器高	底坪	調整	その他の 内面
								(cm)	(cm)	(cm)		
284	A47	大皿	手づくね かわらけ	P148	堆土下 (柱頭跡)	25	において黄褐	(13.4)	2.7	—	指おさえ	

第14表 柱穴観察表（3次調査）

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(m)	その他
P001	25	20	14	31.670	
P002	24	17	22.5	31.585	SB03
P003	35	22	10	31.660	
P004	32	26	21	31.440	SB03
P005	25	20	29	31.430	
P006	30	34	25	31.490	
P007	22	18	39	31.370	SB03
P008	23	16	17.5	31.595	
P009	24	22	37	31.360	SB02
P010	22	17	35.5	31.345	SB02
P011	28	18	31	31.380	
P012	24	18	28	31.380	SB01
P013	26	18	28	31.420	SB01
P014	30	18	27	31.430	
P015	45	35	6	31.634	
P016	25	23	31	31.400	SB02
P017	22	19	37	31.360	SB02
P018	28	25	40.5	31.315	SB01
P019	34	28	38.5	31.605	
P020	(24)	(16)	16	31.820	
P021	26	20	36	31.600	
P022	14	14	19.5	31.595	
P023	38	32	13.5	31.675	
P024	23	20	22	31.530	
P025	19	16	27	31.494	
P026	35	30	42.5	31.345	SB01
P027	28	22	38	31.440	SB01
P028	17	15	8.5	31.715	
P029	22	20	15	31.620	
P030	40	36	41	31.340	SB01
P031	20	20	13	31.630	
P032	34	30	36	31.390	SB01
P033	18	18	12	31.620	
P034	26	24	56	31.160	SB01
P035	17	14	11	31.630	
P036	24	22	26	31.440	SB01
P037	25	22	28	31.420	SB01
P038	25	23	25	31.450	
P039	22	18	29	31.450	
P040	30	25	27	31.710	
P041	17	15	11	31.630	
P042	20	16	31.5	31.465	SB03

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(m)	その他
P043	19	16	13	31.640	
P044	25	20	13	31.650	
P045	20	20	11	31.660	
P046	22	19	35	31.430	
P047	23	20	18	31.580	
P048	17	15	16	31.580	
P049	32	28	36	31.310	SB04
P050	21	19	33	31.355	
P051	25	20	41.5	31.225	SB04
P052	30	25	35	31.300	SB04
P053	27	25	33.5	31.095	SB04
P054	40	30	15	31.825	
P055	25	22	26.5	31.725	
P056	18	14	22	31.470	
P057	26	22	35	31.390	SB04
P058	22	15	31.5	31.395	
P059	32	23	13	31.540	
P060	欠番				
P061	25	21	25	31.350	SB04
P062	18	18	13	31.450	
P063	42	22	13	31.470	
P064	18	15	28.5	31.315	
P065	20	15	6	31.530	
P066	20	20	15	31.770	
P067	40	35	41	31.120	SB04
P068	28	25	6	31.490	
P069	40	35	9	31.700	
P070	32	25	6.5	31.730	
P071	欠番				
P072	24	20	8	31.618	
P073	40	26	11	31.840	
P074	42	30	23	31.440	
P075	(24)	26	20	31.450	
P076	30	25	30	31.680	
P077	28	22	48	31.290	SB04
P078	20	20	23	31.750	
P079	18	15	14.5	31.558	
P080	25	18	35	31.660	
P081	34	20	31	31.460	
P082	38	(28)	17	31.560	
P083	20	17	10	31.660	
P084	22	18	22	31.460	SB03

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(m)	その他	遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面の高さ(m)	その他
P085	22	19	10	31.560	SB03	P125	26	22	38.5	31.255	SB02
P086	28	20	30	31.400	SB03	P126	30	15	21	31.440	
P087	22	18	19	31.510		P127	27	22	35	31.310	SB01
P088	25	22	23.5	31.435	SB02	P128	30	24	22.5	31.445	
P089	28	23	32	31.660		P129	15	(12)	8	31.620	
P090	53	35	33	31.350	SB02	P130	33	28	19	31.600	SB02
P091	28	25	11	31.590	SB02	P131	17	13	18.5	31.615	
P092	22	18	10	31.600	SB03	P132	22	18	19.5	31.590	SB03
P093	22	24	28	31.350		P133	22	21	23	31.460	
P094	28	25	20	31.570		P134	30	27	30	31.400	SB01
P095	19	15	12.5	31.635		P135	25	25	26	31.400	
P096	26	20	15	31.660		P136	24	20	15	31.320	
P097	19	17	11	31.710		P137	18	15	14.5	31.565	
P098	28	25	17	31.490	SB02	P138	22	20	9	31.670	
P099	18	15	17	31.550		P139	欠番				
P100	20	17	15	31.830		P140	22	20	40	31.400	SB02
P101	16	14	21.5	31.225		P141	28	24	19	31.790	
P102	25	17	10	31.700		P142	34	30	48	31.202	SB01
P103	19	17	7	31.720		P143	33	(23)	10	31.480	
P104	20	17	14	31.650		P144	24	20	24.5	31.435	SB01
P105	20	17	21	31.290		P145	15	14	15	31.600	
P106	20	18	20.5	31.565		P146	30	25	39	31.380	SB01
P107	20	18	11.5	31.645	SB03	P147	18	15	6	31.740	
P108	20	18	18	31.270	SB02	P148	38	30	37.5	31.435	SB01
P109	29	17	19	31.600	SB03	P149	30	28	33.5	31.435	SB01
P110	20	15	33.5	31.435	SB03	P150	30	25	27	31.250	
P111	22	18	26.5	31.335	SB02	P151	22	15	23	31.270	
P112	24	18	13	31.450		P152	30	25	27	31.350	SB01
P113	28	25	25	31.340	SB02	P153	22	18	32	31.300	
P114	22	17	21	31.320	SB02	P154	23	18	20.5	31.405	
P115	20	17	22	31.290		P155	26	23	15	31.450	SB01
P116	20	18	13.5	31.295	SB02	P156	20	18	11	31.870	
P117	35	30	40	31.590	SB05	P157	17	16	6	31.920	
P118	24	22	25.5	31.395		P158	19	18	8	31.570	
P119	22	13	27	31.400		P159	13	16	12	31.510	
P120	(38)	(35)	25.5	31.705	SB05	P160	20	18	12	31.570	
P121	(50)	(42)	30	31.660	SB05	P161	欠番				
P122	欠番					P162	18	15	9	31.670	
P123	18	16	25	31.230		P163	30	25	18	31.810	
P124	20	17	25	31.380	SB02	P164	30	25	42	31.505	

写 真 図 版



1. 遺跡遠景 1 (南西から)



2. 遺跡遠景 2 (東から)

写真図版 1 遺構 1



1. 遺跡遠景 3 (南から)



2. 遺跡近景 1 (南から)

写真図版 2 遺構 2



調査区 全景



A・B区 全景

写真図版 4 遺構 4



C・D・E・F区 全景



1. 調査前の状況1（A区付近）



2. 調査前の状況2（B区付近）

写真図版6 遺構6



1. 調査前の状況 3 (C 区付近)



2. 調査前の状況 4 (E 区付近)

写真図版 7 遺構 7



1. 基本土層



2. D区完掘

写真図版 8 遺構 8



1. E区完掘



2. F区完掘

写真図版 9 遺構 9



1. SB01



2. SB02

写真図版10 遺構10



1. SD01



2. SD01 断面

写真図版11 遺構11



1. SD02



2. SD02断面

写真図版12 遺構12



1. SD08-09

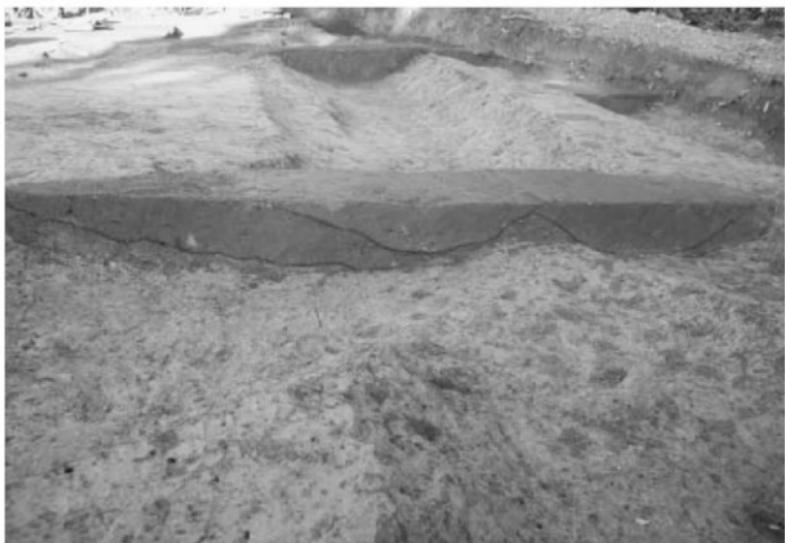


2. SD07-08-11

写真図版13 遺構13



1. SD06-07 断面



2. SD07-08・11 断面

写真図版14 遺構14



1. SD08 断面



2. SD07・08・09 断面

写真図版15 遺構15



1. SD07-09



2. SD06-07

写真図版16 遺構16



1. SD13



2. SD14

写真図版17 遺構17

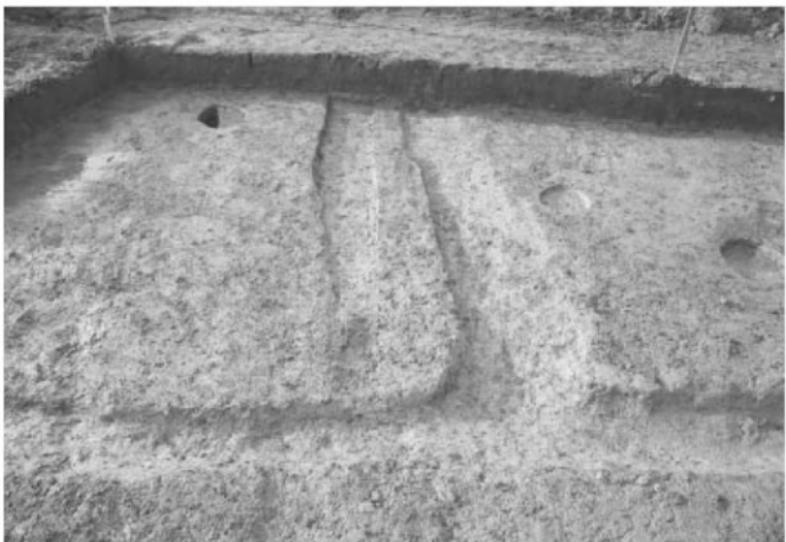


1. SD15



2. SD16

写真図版18 遺構18



1. SD17-18



2. SD19

写真図版19 遺構19



1. SD20



2. SD21

写真図版20 遺構20



1. SD22



2. SD22 断面

写真図版21 遺構21



1. SK01



2. SK01 断面

写真図版22 遺構22

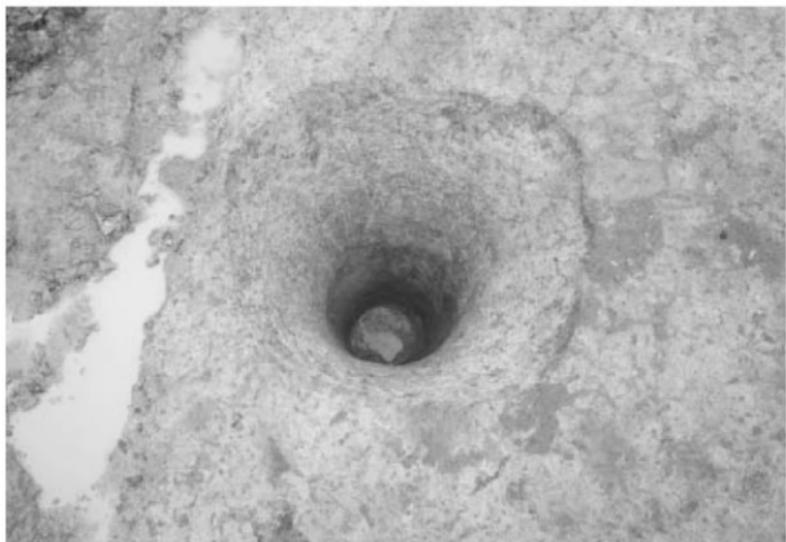


1. SK01 遺物出土状況 1



2. SK01 遺物出土状況 2

写真図版23 遺構23



1. SK02



2. SK02 断面

写真図版24 遺構24



1. SK03

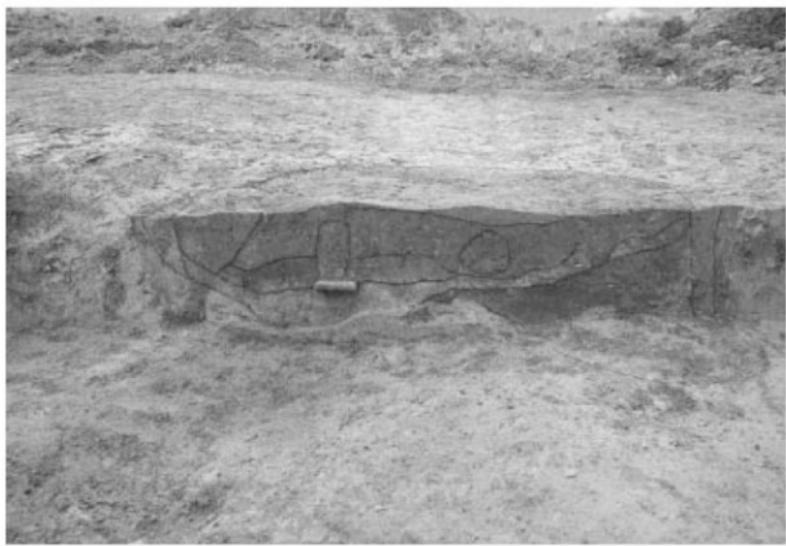


2. SK03 遺物出土状況

写真図版25 遺構25

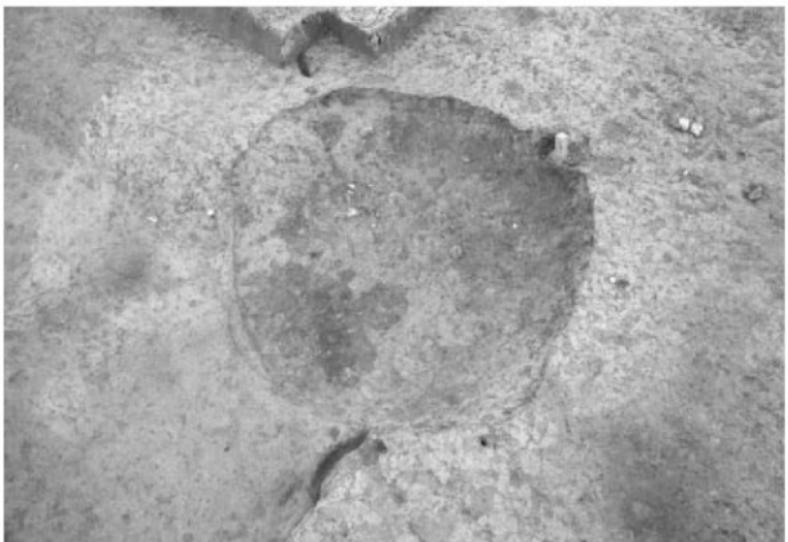


1. SK04



2. SK04 断面

写真図版26 遺構26



1. SK05



2. SK05 断面

写真図版27 遺構27



1. SE01



2. SE01 断面

写真図版28 遺構28



1. 近世墓壙群1（東から）



2. 近世墓壙群2（北から）

写真図版29 遺構29



1. ST01-02 断面



2. ST03-04 断面

写真図版30 遺構30



1. ST03-04 断面2



2. ST06 断面

写真図版31 遺構31



1. ST08-13-16 断面



2. ST12 断面

写真図版32 遺構32



1. ST14-16-19 断面



2. ST17 断面

写真図版33 遺構33



1. ST18 断面



2. ST20-21 断面

写真図版34 遺構34



1. ST22-23 断面



2. ST23 断面

写真図版35 遺構35

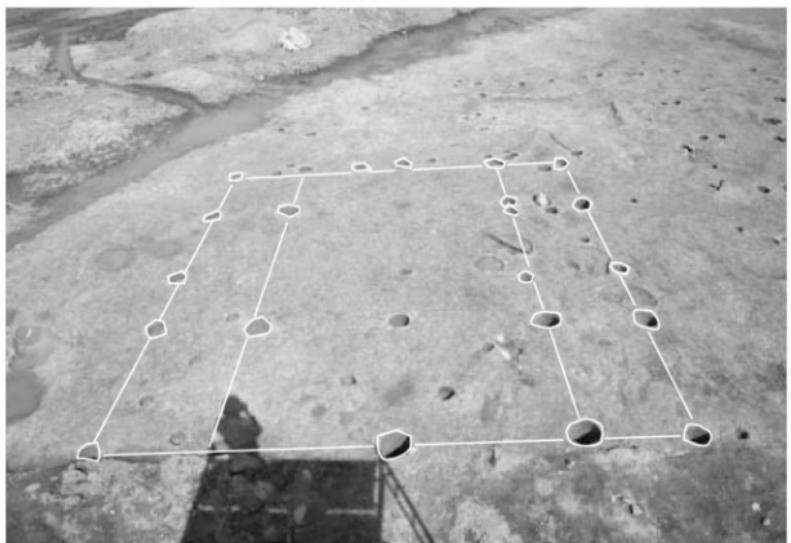


1. 遺跡近景写真（北から）

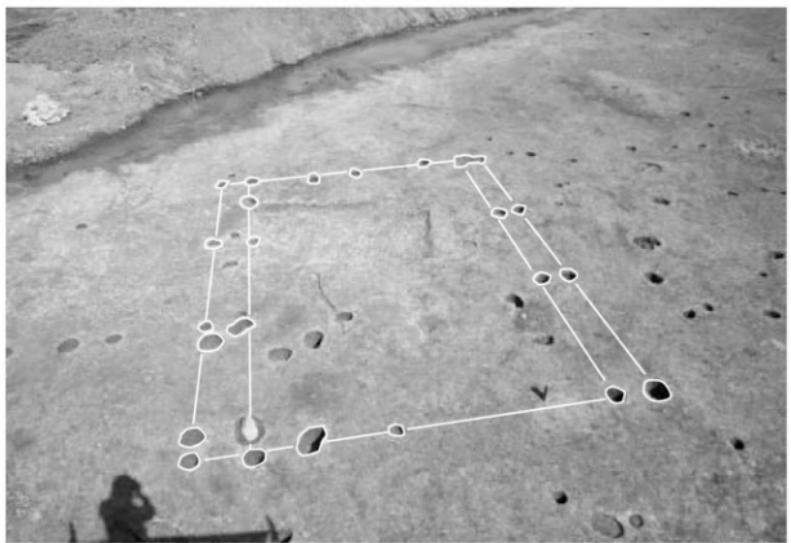


2. 調査区全景

写真図版36 遺構36

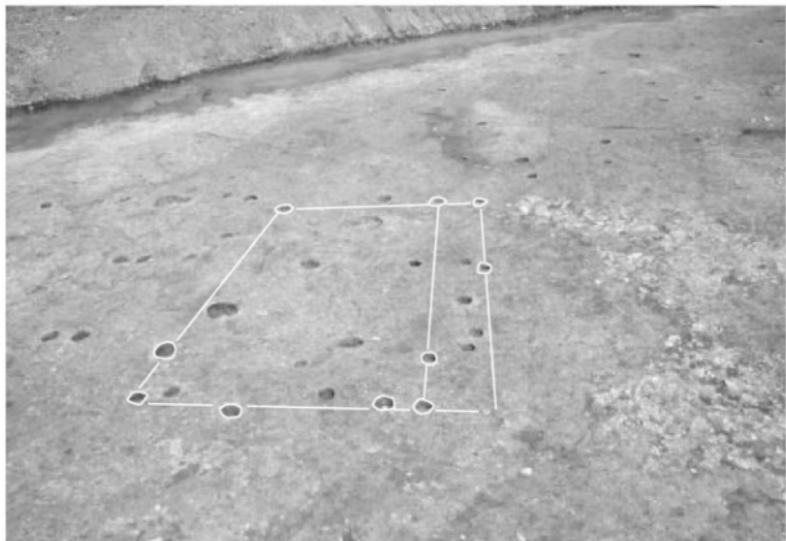


1. SB01

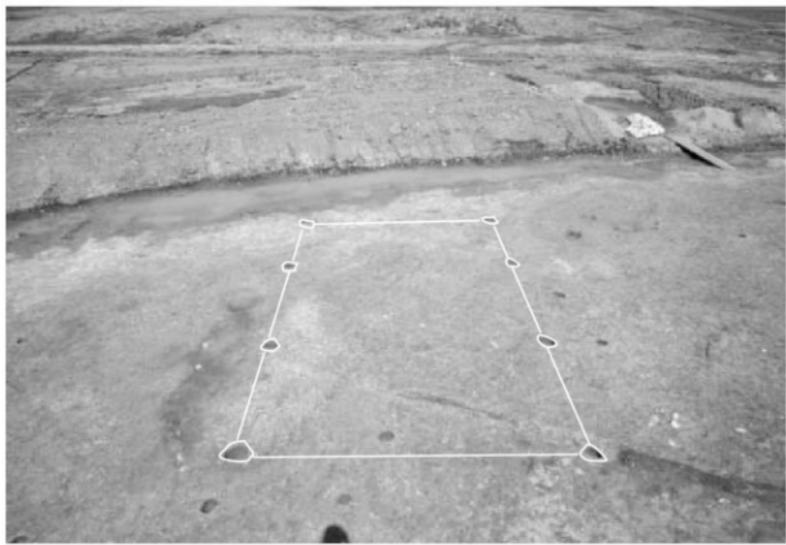


2. SB02

写真図版37 遺構37

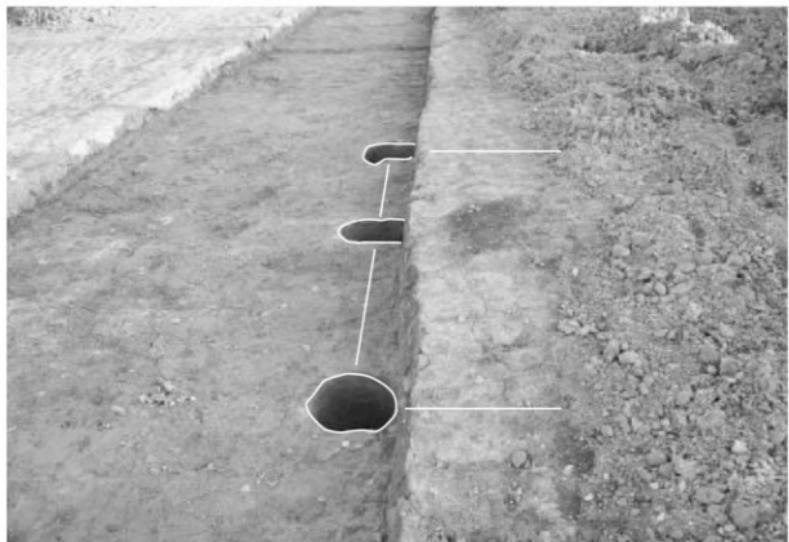


1. SB03



2. SB04

写真図版38 遺構38



1. SB05



2. SK01

写真図版39 遺構39



1. SE01



2. SE01 断面

写真図版40 遺構40



1. SD01



2. SD02

写真図版41 遺構41

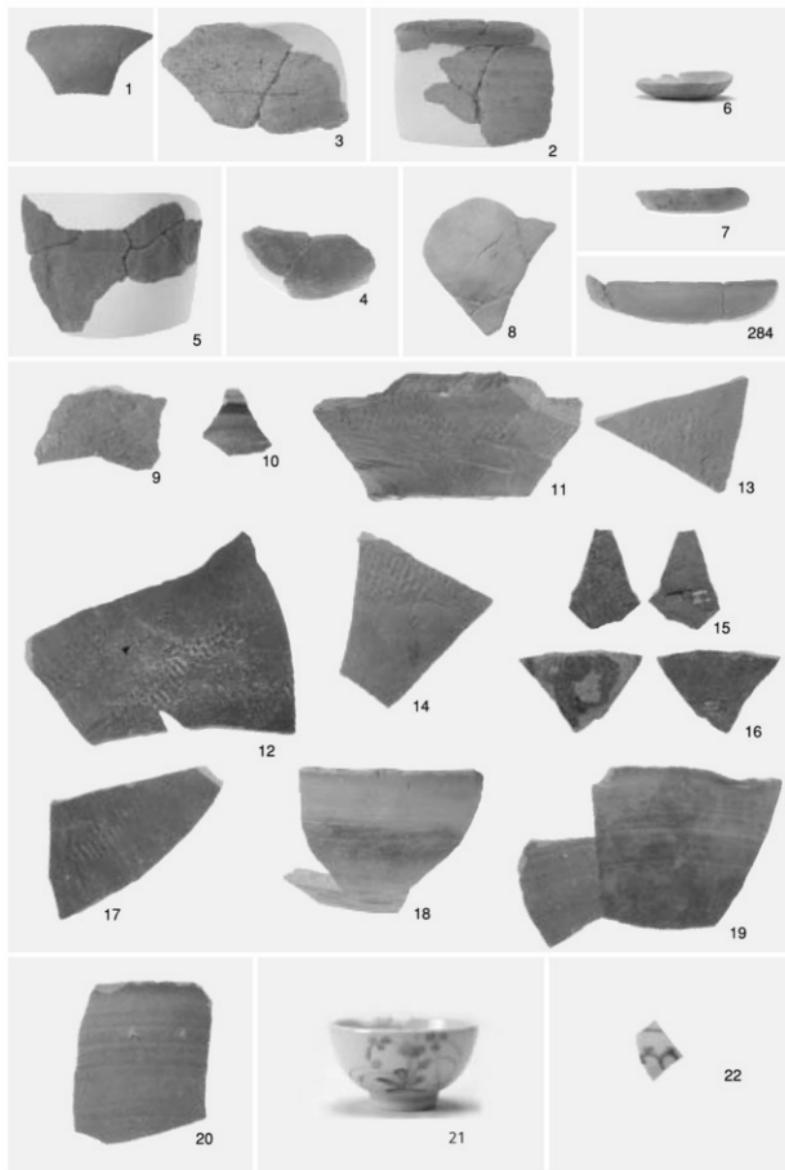


1. SD03

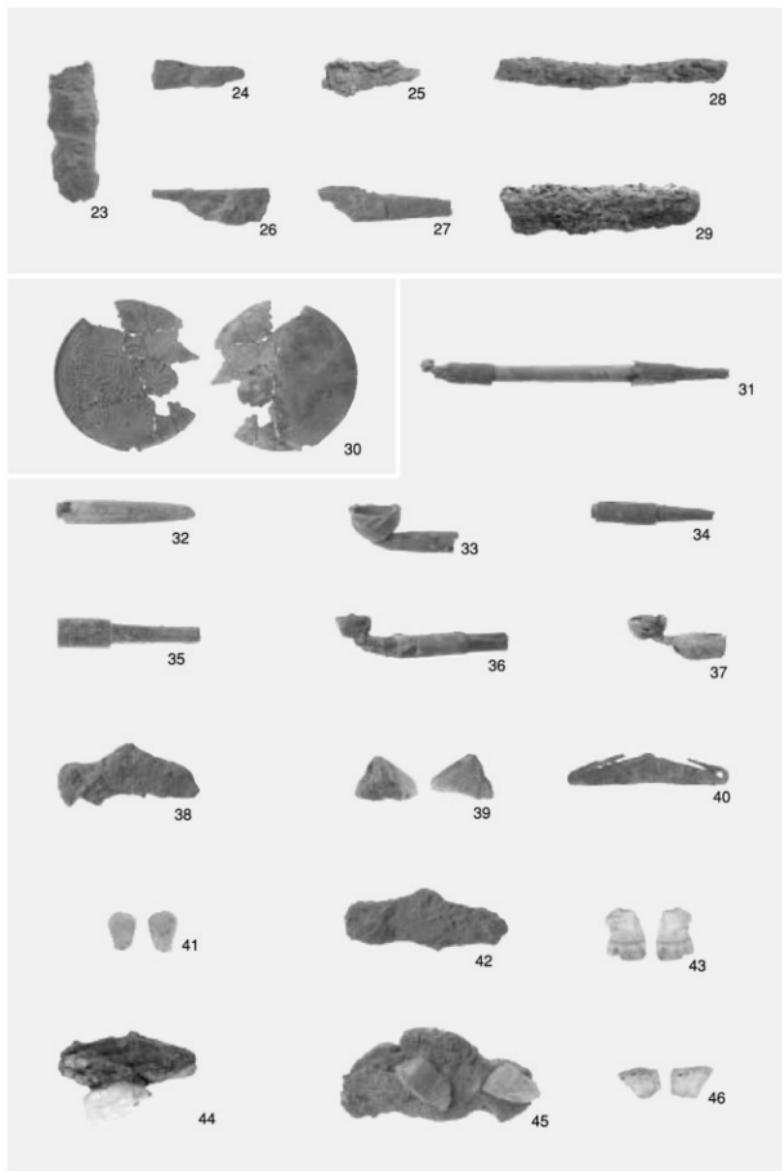


2. SD04

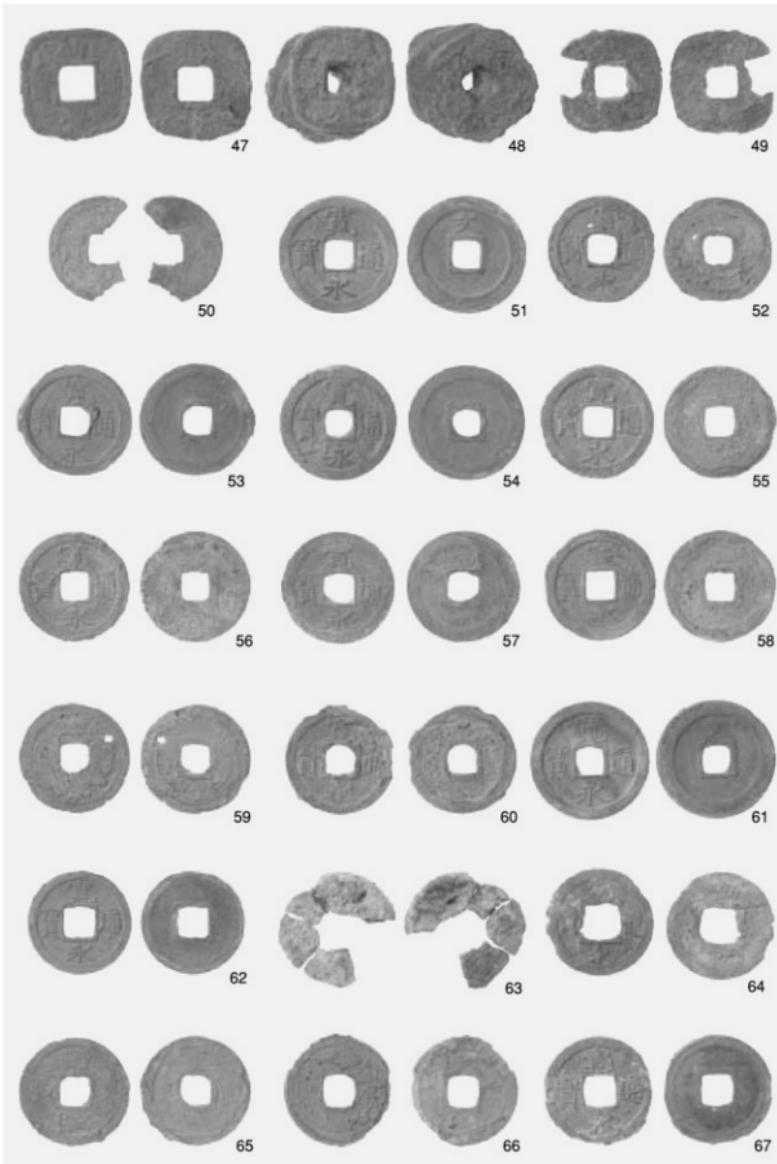
写真図版42 遺構42



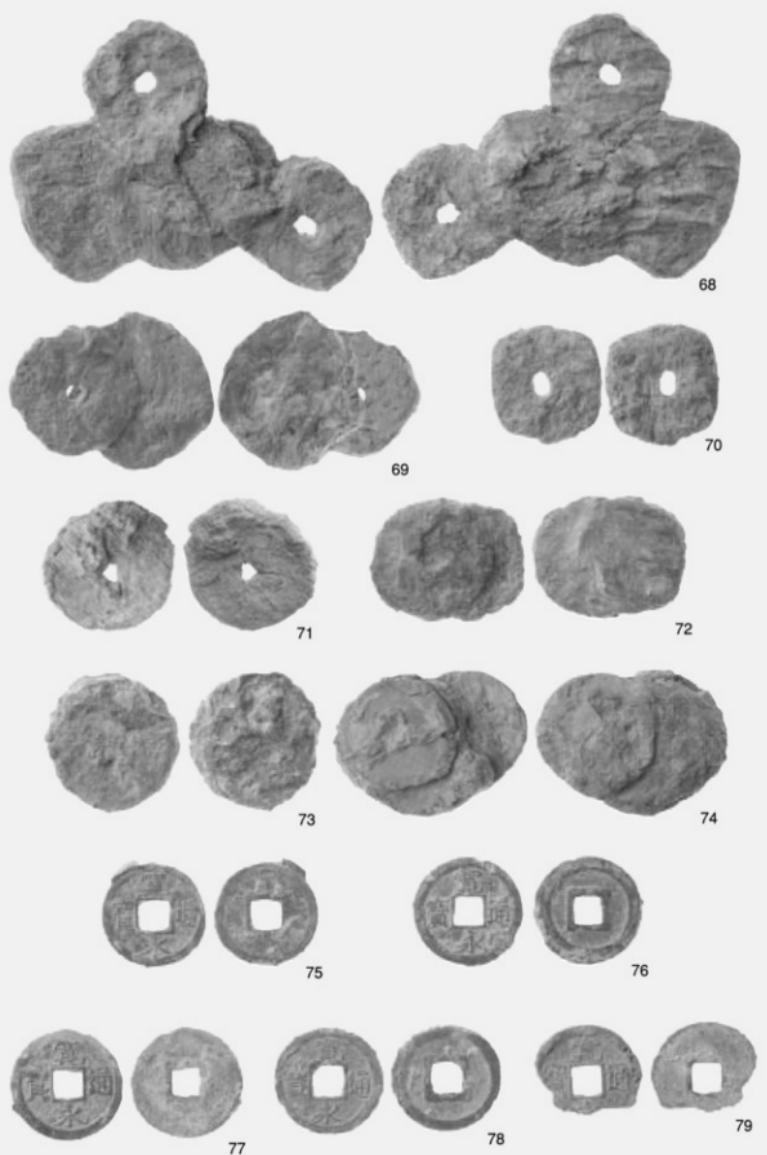
写真図版43 遺物1 土器・陶磁器類



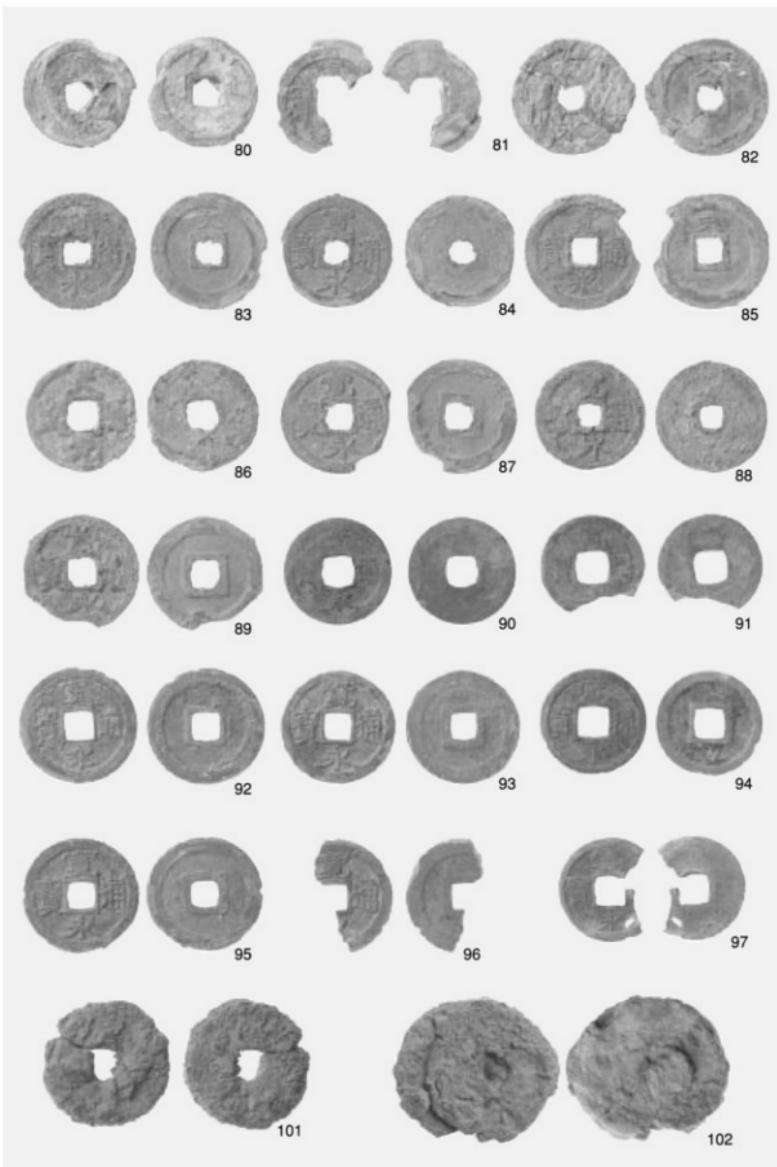
写真図版44 遺物2 金属製品1



写真図版45 遺物3 金属製品2



写真図版46 遺物4 金属製品3



写真図版47 遺物5 金属製品4



103



104



105



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119

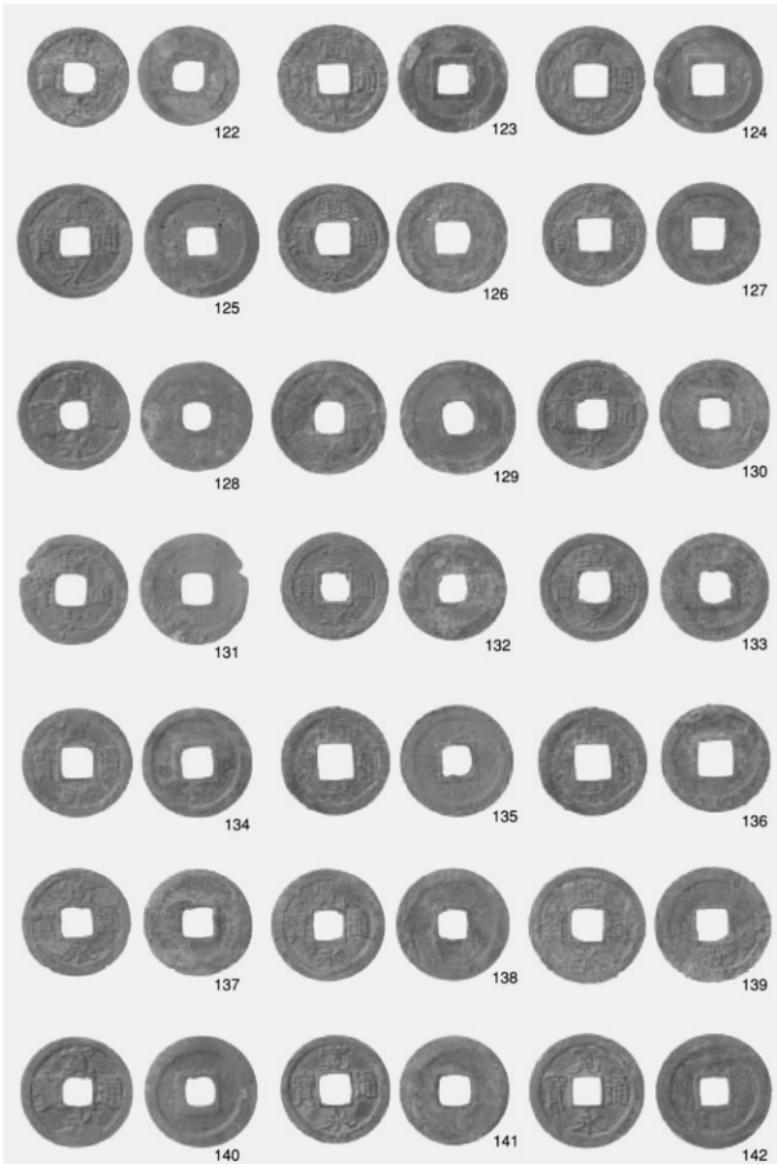


120

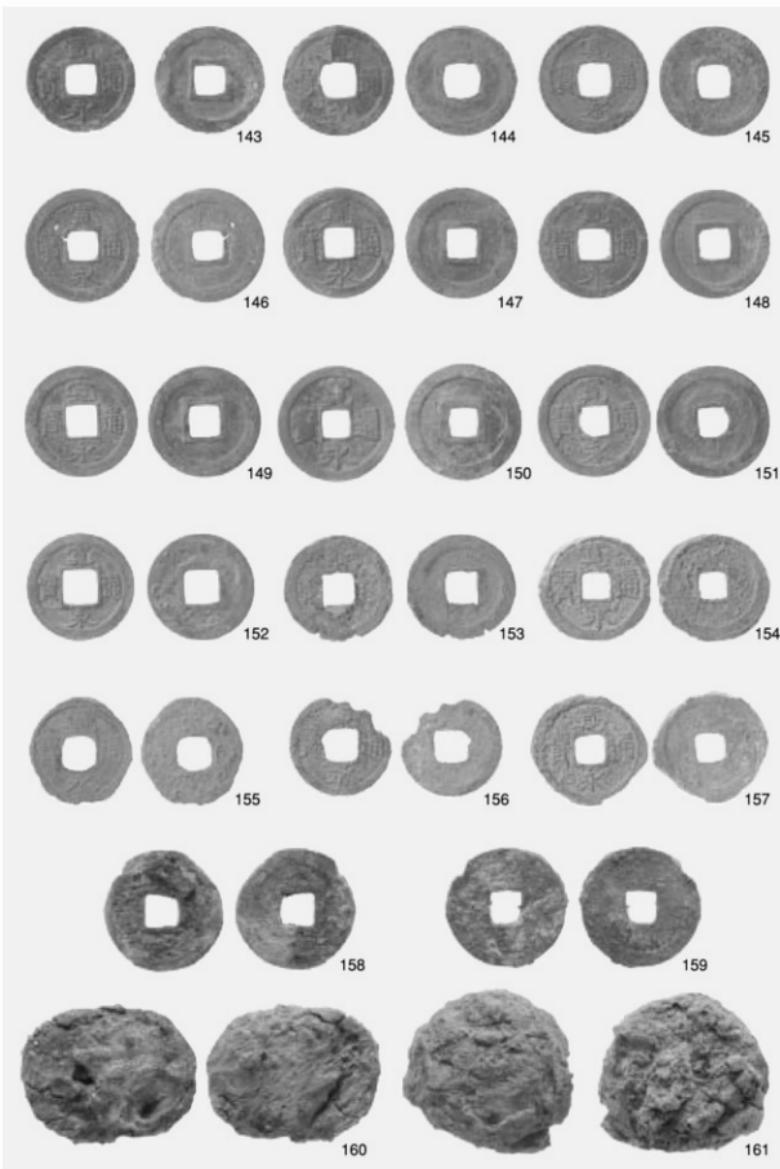


121

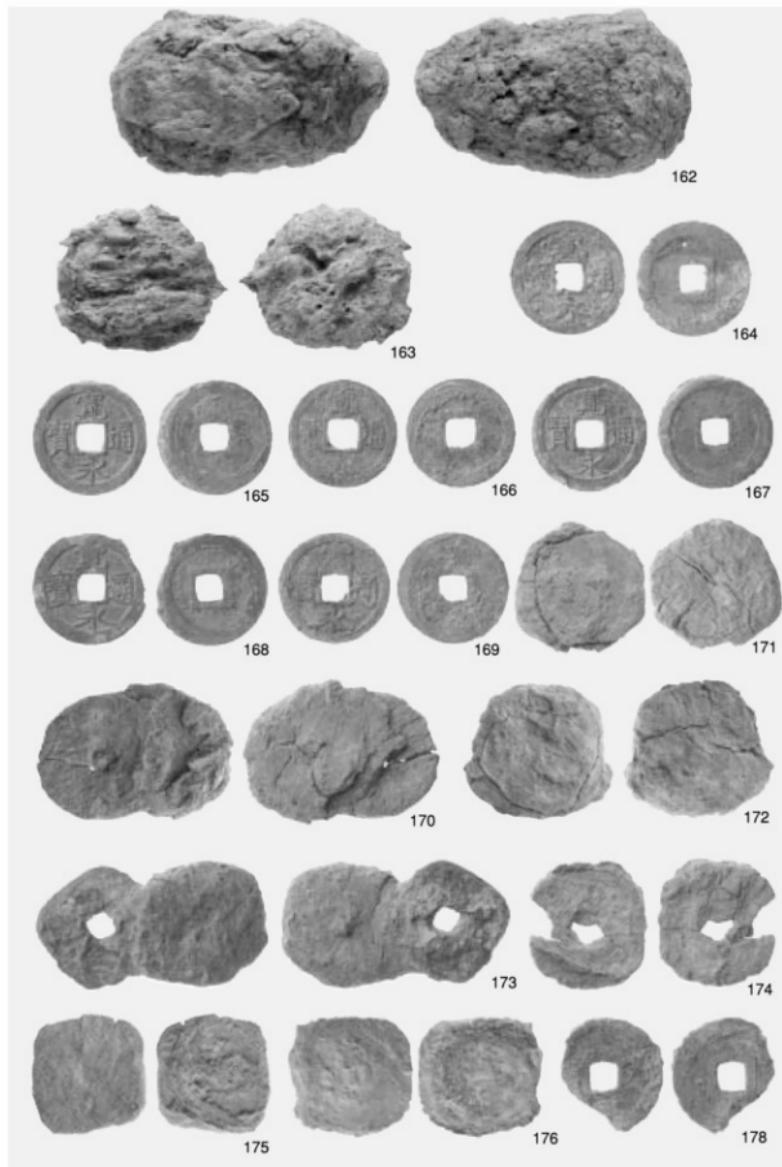
写真図版48 遺物6 金属製品5



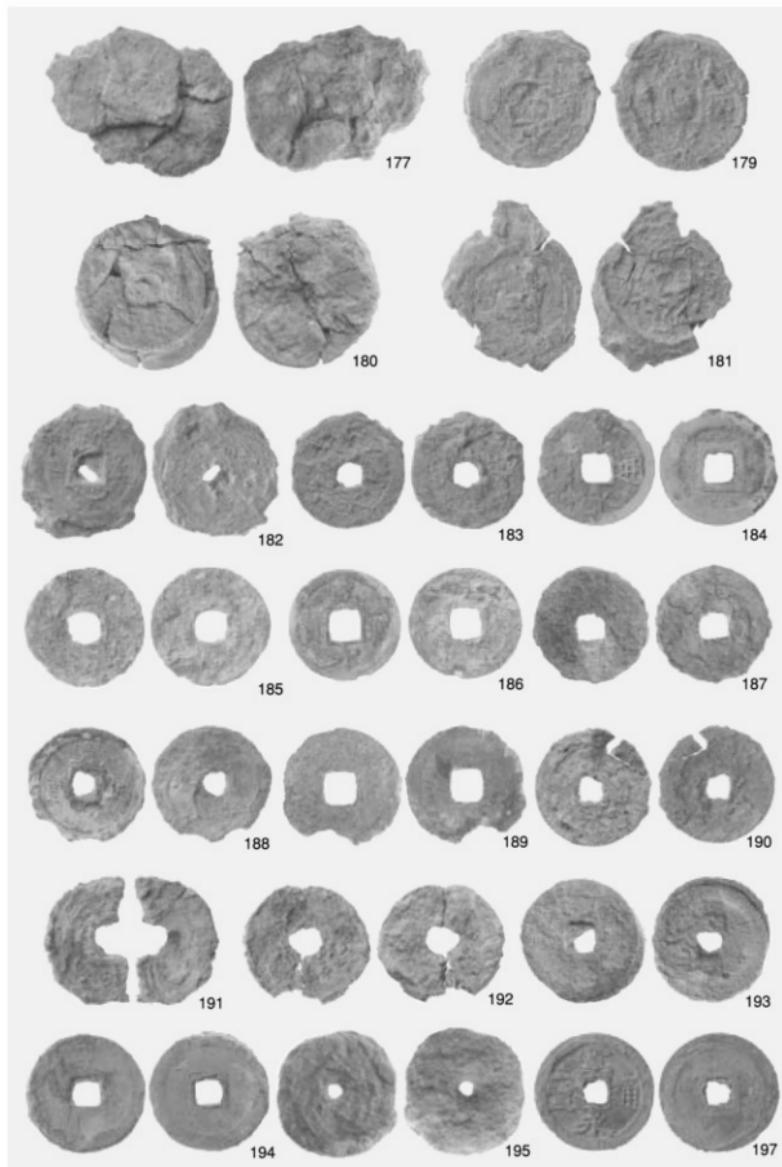
写真図版49 遺物7 金属製品6



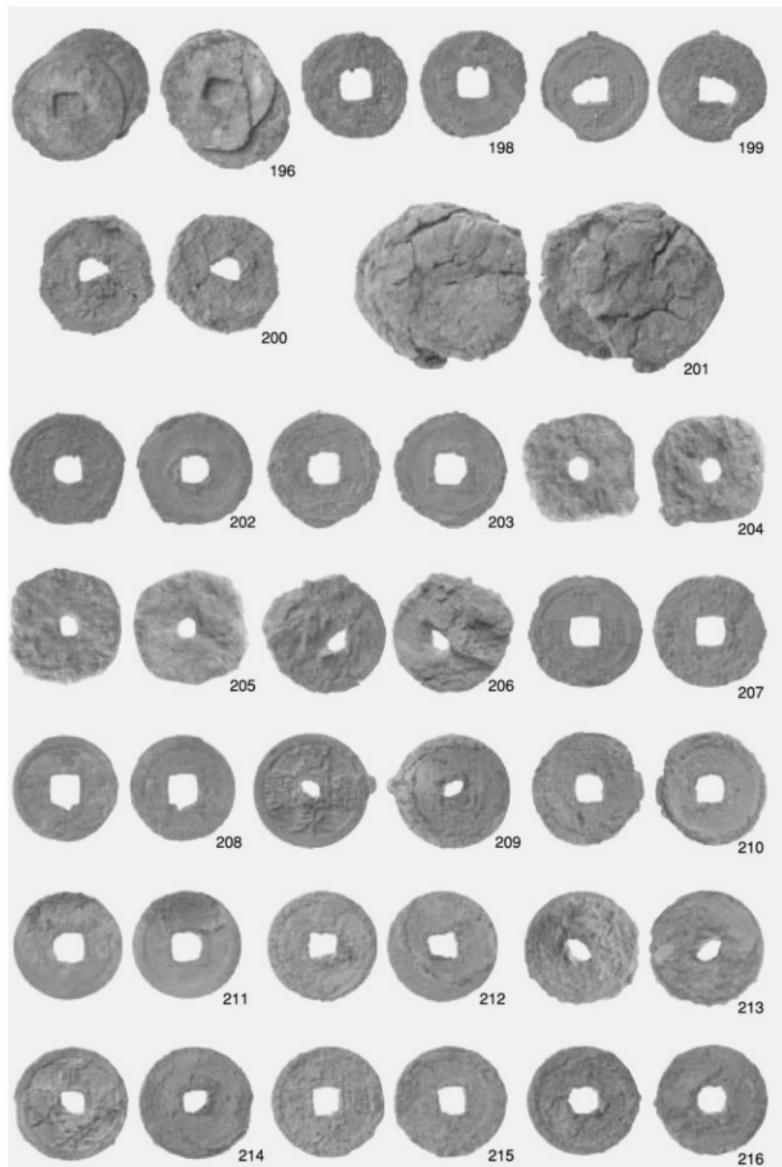
写真図版50 遺物8 金属製品7



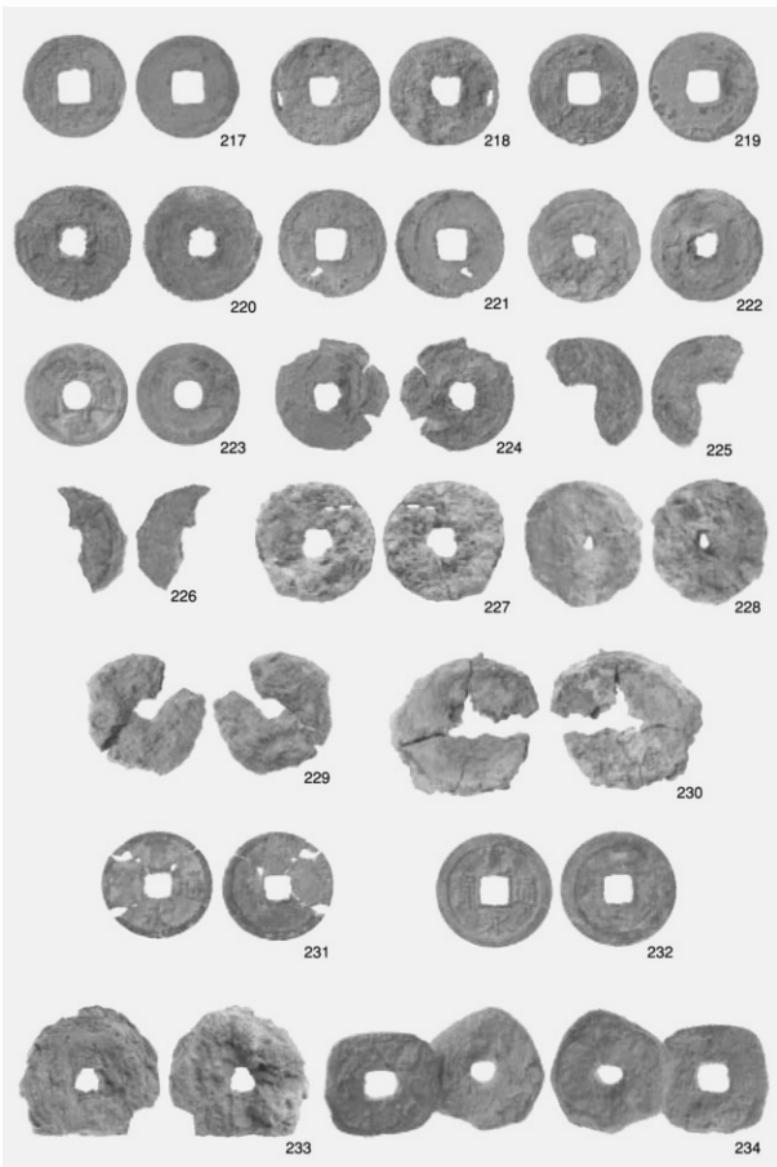
写真図版51 遺物 9 金属製品 8



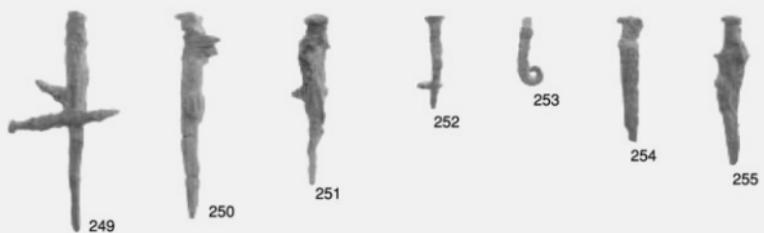
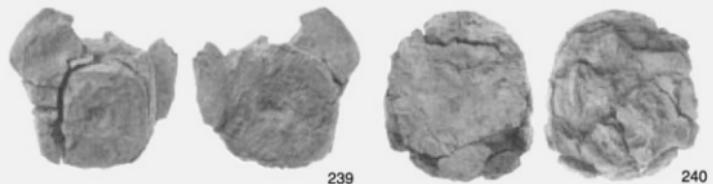
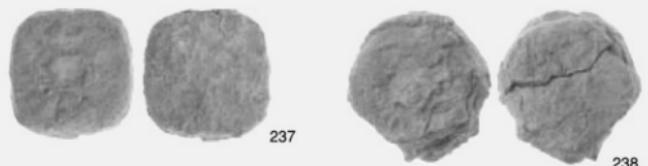
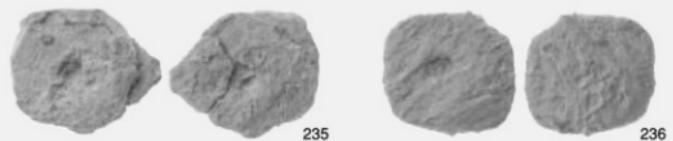
写真図版52 遺物10 金属製品 9



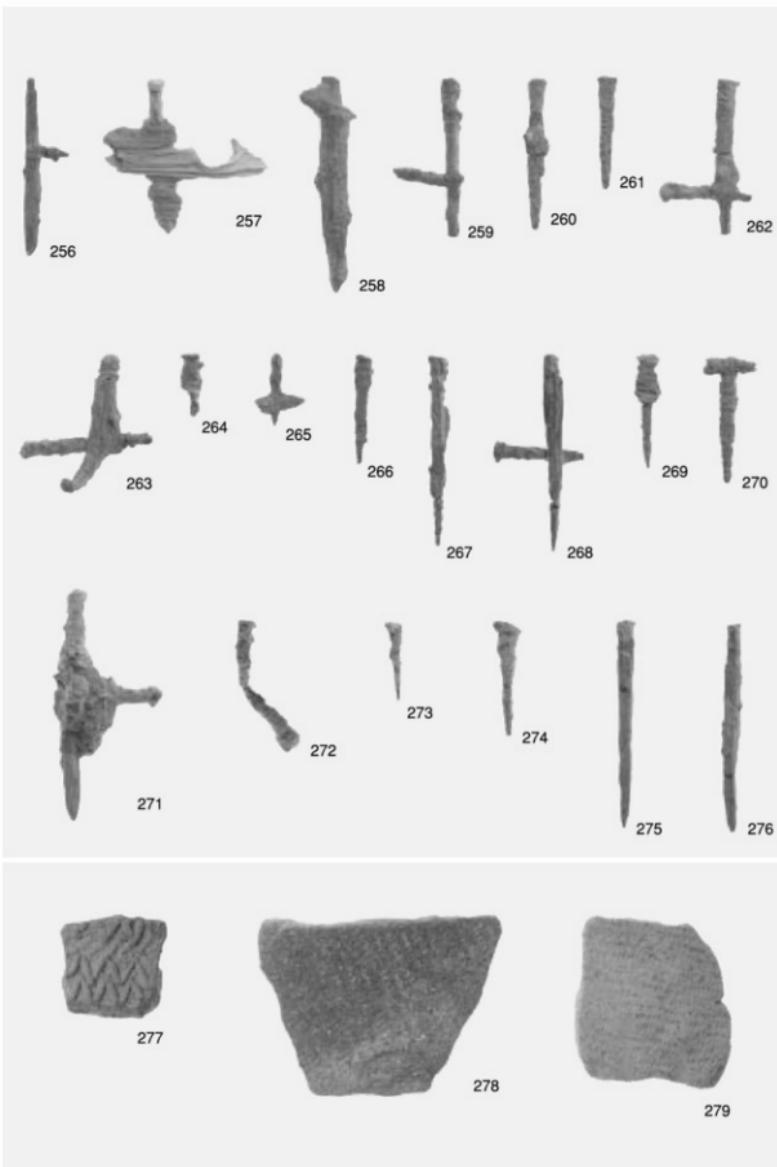
写真図版53 遺物11 金属製品10



写真図版54 遺物12 金属製品11



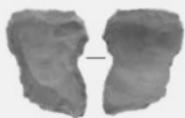
写真図版55 遺物13 金属製品12



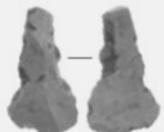
写真図版56 遺物14 金属製品13・縄文土器



280



281



282



283

写真図版57 遺物15 石器・石製品

報告書抄録

ふりがな 書名	あくざわひがしいせきはっくつちょうさはうこくしょ 安久沢東遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第611集							
編著者名	西澤正晴							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2013年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
あくざわひし 安久沢東遺跡	おうしのひのまえさかわくこじょう 奥州市前沢区古城 あづやばやしきちない 字姥屋敷地内	3215 NE46-2300	39度 04分 07秒	141度 08分 40秒	2010.10.15 ~2010.12.07(2次) 2011.04.25 ~2011.06.03(3次)	4380m ² (2次) 1260m ² (3次)	経営体育成 基盤整備事 業に伴う緊 急発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
安久沢東遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器・ 石器	平安時代の掘立柱建物跡が検出され る。また、12世紀代に位置づけられ る遺構や遺物が発見された。			
	集落	平安時代 (12世紀含む)	掘立柱建物5 土坑4 焼土・炭化物集 積4 溝跡3	土師器・須 恵器・国産 陶器(常滑・ 渥美・須恵 器系)・土製 品				
	集落	江戸時代	井戸跡2 墓壙23	陶磁器 漆器・銭貨				
		時期不明	掘立柱建物5 土坑3 溝跡21					
要約	今回の調査は、奥州市が行った1次調査に続くものである。調査の結果、縄文、平安(12世紀含む)、江戸時代の遺構や遺物があることが判明した。とくに平安時代には、掘立柱建物跡が検出されるなど有力な集落であった可能性が高い。また、平泉藤原氏の時代(12世紀)の掘立柱建物跡等の遺構やかわらけ、国産陶器などの出土遺物が発見されたことは重要な成果といえる。近年、周辺地域でも同様の成果があげられており、今後の研究が期待される。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第611集

安久沢東遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成25年3月14日

発 行 平成25年3月19日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638- 9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7番13号

電 話 (0197) 35- 8440

(公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654- 2235

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641- 0671

